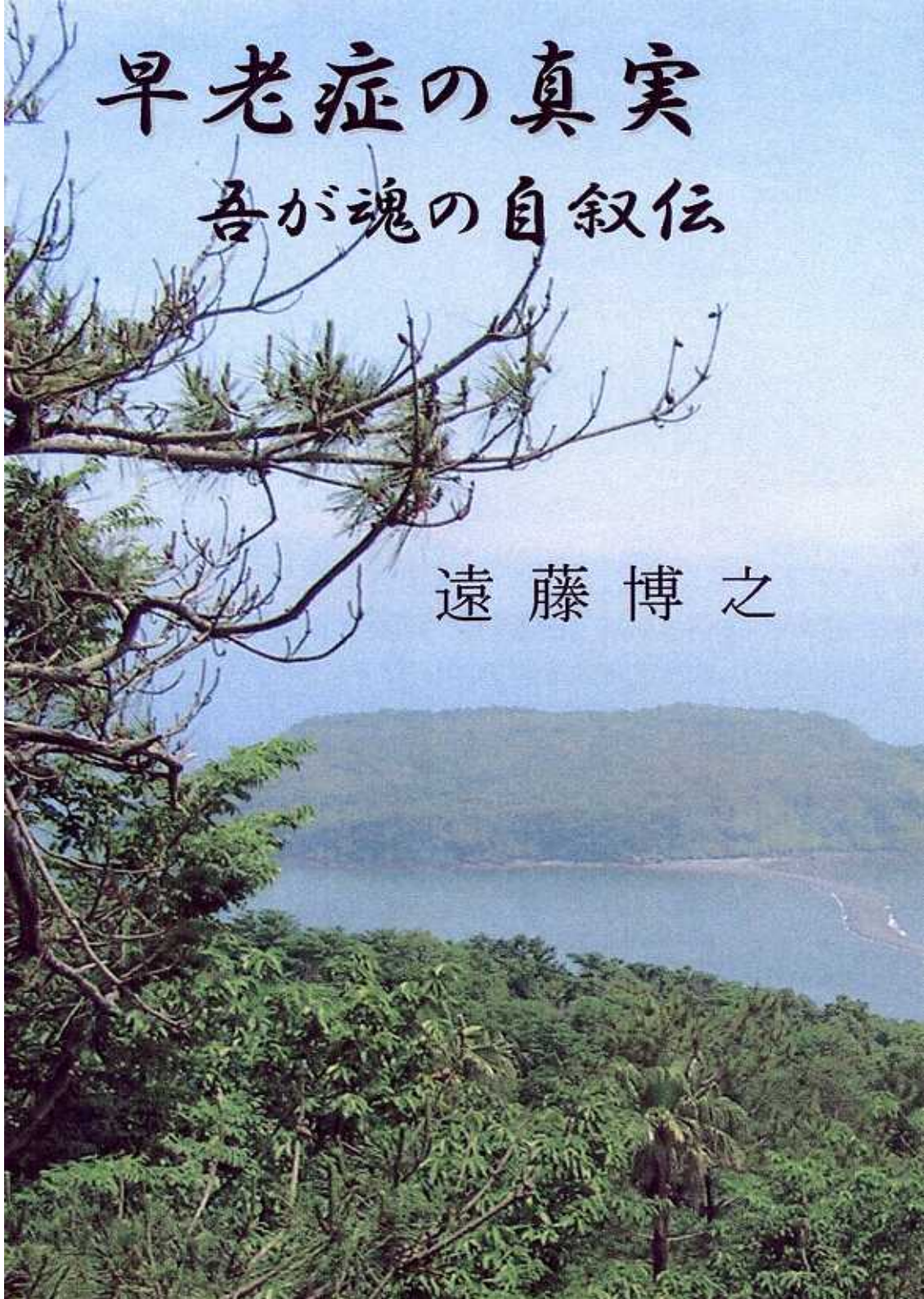
早老症の真実

遠藤博之



早老症の真実　もくじ

『推薦文』　杉本正信　サイエンスライター　薬学博士
はじめに　10～17
参考文献
第一章　ウェルナー症候群を知っていますか？……18～64
第二章　青春……
㈠誕生／㈡わんぱく小僧／㈢知らざー言って／㈣未来への希望
㈤順風満帆／㈥死に場所をもとめて／㈦素浪人発奮
第三章　終わりなき戦いの始まり……65～98
㈠左膝関節打撲／㈡両眼白内障手術
㈠左白内障手術／㈡右白内障実験台
㈢駄目だ！失った眼と救われた眼
㈠右眼球摘出／㈡救われた眼約一ヶ月のブラジル旅行

㈣左骨骨折／㈤馬の想い出／㈥鍼灸専門学校
㈦鍼灸の底力／㈧左膝関節打撲二度あることは三度ある
第四章　母は逝く……99～106
第五章　病因の発見……107～141
㈠声を失う／㈡やっと判った病因／㈢痛い足を引きずり歩く
㈠魚の目が痛む
㈡大腿四頭筋断裂
㈣あわや切断か
㈠右足内果緑膿菌汚染／㈡無駄な入院／㈢右足内果削除と右足中指切断手術
㈣両足親指切断手術／㈤左親指再切断と左足外足削除手術
㈥左人工靱帯の破損
第六章　糖尿病……142～159
㈠診てくれ無い科／㈡自分で見付けた病院／㈢一時の安らぎ
㈣期待

第七章　両側下肢切断……160～177
㊀左大腿部切断／㊁右膝下部切断／㊂リハビリ病院に転院
第八章　両肘潰瘍・皮膚筋移植手術……178～225
㊀訪問看護と在宅医療／㊁だるまさん／㊂転院療養
㊃退院後の日々／㊄叔母さん従姉妹へ逢いに札幌に
㊅故郷鹿児島指宿
第九章　ウェルナー症候群の診療医師との出会い……226～251
㊀検査入院／㊁右肘潰瘍手術／㊂魂の故郷鹿児島
㊃左肘部管症候群／㊄左肘潰瘍手術
第十章　生きている喜び……252～267
㊀三度目の鹿児島帰省／㊁日常の生活
あとがき
表紙　鹿児島県指宿市　知林ヶ島砂州　遠藤博之 撮影

『推薦文』

今年(二〇〇八)の秋に遠藤氏にお会いし、彼の著作である「早老症の真実」についていろいろと伺いました。

私は、官民共同プロジェクトで設立された株式会社エイジーン研究所、およびこのプロジェクトの終了後に、この成果を受けて設立されたバイオベンチャーである株式会社ジーンケア研究所において、十数年間、老化と遺伝子の研究を行ってきました。その中心は、ウェルナー症候群の分子生物学的な研究でした。

また、遠藤氏の血液のサンプルを分析し、遺伝子診断を行ったのも私たちでした。

その間に、「老化と遺伝子」(杉本正信、古市泰宏著、東京化学同人)という本を著しましたが、遠藤氏はこの本を介して私を知ったとのことです。

「早老症の真実」は、ウェルナー症候群という遺伝性の早老症にかかった、一人の患者さんの、約四十年間に渡る闘病の体験談です。本書には、遠藤氏の生い立ちから始まって、時間を追ってこの病気がどのように姿を顕し、そして遠藤さんを苦しめることになったか、具体的に、克明に記されています。科学的にみても、記載

は正確です。本書は、臨床的な観点からも価値があると思いますが、
また、現在対症療法以外に根本治療方法がない、ウェルナー症候群と闘っている一人の患者さんの自叙伝でもあり、その魂の記録でもあります。
この病気の研究に携わってきた一研究者として、私はこの本が出版され、ウェルナー症候群以外にも、出口の見つからない各種の遺伝子病で苦しんでいる患者さんの励みになることを切に願うものです。

平成二十年十一月八日

薬学博士、サイエンスライター
杉本　正信

はじめに

誰しも、若い頃には自分だけは歳を取らずにいて、老人になり、よぼよぼになって動けなくなるなんて考えもせず、ましては青春時代には思いもよらぬ事です。
小生も人に違わず青春を謳歌(おうか)し、大いに闊歩(かっぽ)していた一人です。
しかし、若かろうが、年寄りであろうが、大金持ちであろうが、貧乏人であろうが、有名人であろうが、無名の人であろうが、誰でも何時かは思いもよらない病魔(びょうま)に襲われ、或いは大事故に遭遇して一瞬にして青春を奪われ、大切なる人生をも崩壊の憂(う)き目に晒(さら)されるかも解りません。
只今小生は六十一歳です。後何年生きられるのか？生かされるのか？
生かしてくれるのか疑問です。
まだ生きている と 云うことは死んでいけない何かの指令が残されていて、それ

を果たすべく宿命によって生かされているのかもしれません。其れが何なのか、どうしてなのか解りません。

小生は考えました。

歩んで来た路を語り、それが何だったのか、小生は幸せだったのか。

小生と少しでも関わった人に善い影響を与えたのか、人を救ったのか、愛する人に幸せを与えたのか、生きて来た人生の証しがほしいと思います。

そんな小生の人生が後世に残り、日本中の、いや世界中のたった一人でも良いから小生の生きざまにエールを送って下さる方がおられたなら、小生はそれだけで大満足です。その方に心より感謝申し上げます。

そして最高に幸せだったと心と身体一杯に感じることでしょう。

平成二十年五月吉日

遠藤博之

【参考文献】

医学大辞典　１９７２年　１０月　１日　第１５版２刷発行　南山堂

３２科学のとびら　老化と遺伝子　著者　杉本正信　古市泰宏　東京化学同人

人は何歳まで生きられるか　著者　杉本正信　新書館

【御協力戴いた方々の所属する団体】

慶応義塾大学医学部付属病院　ブース記念病院　荻窪病院　衛生病院　㈱エイジーン研究所

千葉大学医学部付属病院

【出版にあたり御協力戴いた方】

挿絵　長崎仁美

出版アドバイザー　福岡市箱崎　金進堂書店社長　長谷川澄男

『推薦文』　杉本正信　サイエンスライター　薬学博士

編集　交正　ＭＡＲＩＯ

第一章　ウェルナー症候群を知っていますか

ウェルナー症候群は、『早老症』と言われ、普通の人の二倍以上の速度で細胞が老化進行する病です。

約百年前(一九〇四)にドイツの眼科医 オットー・ウェルナー博士が、兄弟四人の若年性白内障の兄姉を診て発見した遺伝子の病気です。

『ウェルナー症候群』は成人に近い二十歳前後から徐々に症状が出始め平均四十六歳で死に至ると言われております。

ごく普通の老人は、単発的に老人症状が出てくるのに対して『ウェルナー症候群』は、多少の差があるにせよ老人特有の殆どの病気と『ウェルナー症候群』特有な病気が次々に発症します。

先程二十歳前後の発症と申しましたが、遺伝子病なので生まれながら序々に起こし知らずに或いは発見されずに過ごすことが多いのです。

私の遺伝子検査は次の通りです。

ウェルナー症候群のある患者様の遺伝子検査の結果につきまして

平成十六年九月にご依頼頂きました、ウェルナー症候群の疑いのある患者様の遺伝子診断の結果につきまして、以下の通りご報告及びご説明申しあげます。

記

一．検査の内容

ウェルナー症候群の原因遺伝子であるウェルナーヘリカーゼ遺伝子のうち、日本人のウェルナー症候群の80％以上の患者に見られる4ヶ所の部位(それぞれ mut1, mut4, mut5, mut6 と呼ぶ)の変異(塩基の置換)を調べました。

二．検査の結果

ご依頼の患者様の検体では、解析した4ヶ所のうち mut4 の部位に、通常グアニン(G)であるべきところがシトシン(C)に変化していることがわかりました。さらに、その変異がウェルナーヘリカーゼの二つの対立遺伝子に存在することが明らかとなり、この結果から、この患者様はウェルナー症候群であると診断されました。

三、検査結果の説明

ＤＮＡ(遺伝子)の傷を直すウェルナーヘリカーゼという酵素の遺伝子に変異(通常の人とは異なる遺伝子の配列)があるために、ＤＮＡの傷を治す能力が失われ、そのため細胞の老化が早まるのがウェルナー症候群と考えられています。遺伝子の配列はＧ，Ａ，Ｔ，Ｃの記号で表される四つの化学物質の並びです。父親と母親のそれぞれからひとつずつ同じ遺伝子を受け継ぐため、皆、同じ遺伝子を二つずつ持っています(この二つの遺伝子のそれぞれを対立遺伝子と呼びます)。二つのウェルナー遺伝子のうち少なくとも片方が正常であれば遺伝子の傷を直すことができ、ウェルナー症候群にはなりませんが、両方の対立遺伝子に変異があるとウェルナー症候群となります。ご依頼のあった患者様の場合、二つのウェルナー遺伝子の両方で通常Ｇであるべきところ(mut4の部位)がＣになっていることが、当社の解析で明らかになりました。

平成十七年三月十四日　　医学博士　　〇〇〇㊞

☆ 遺伝子四つの塩基 Ｇ(guanine) Ａ(adenine) Ｔ(thymine) Ｃ(cytosine)

以上が私の血液の遺伝子検査の結果です。

つまり第八染色体短腕上に存在するＲｅｃＱ型ＤＮＡ／ＲＮＡ(ＷＲＮ)ヘリカーゼホモ接合体変異によるウェルナー症候群(早老症)であると診断されました。

私は、現在両側の甲状腺癌(乳頭腺癌)を原発として左肺下葉に〇六年八月以前転移癌に冒されております。きわめて悪性ステージｖなので治る見込みはありません。

第一に、自ら感じる足底の胼胝で痛くて歩けなくなるや・・・　身長が低く伸びのなさ・・・例外的に背の高い人もいる　四肢の異状な細さ・・・　体重のなさ・・・　筋肉のなさなど。

第二に、他人が見ても直ぐ解る若い時からの白髪や禿など。

第三に、医師の診断による若年性両眼白内障や皮膚の強皮化及び薄皮化と骨関節の変形　潰瘍(かいよう)壊死(えし)　褥創(じょくそう)　アキレス腱の石灰化などは、二十歳前後に表れるので、総ての医師が気付いて、採血による遺伝子検査によって早期発見と予後について、患者本人とご両親に説明すべき事柄です。

一対の遺伝子は、両親から一方ずつ受け継ぎます。両親に異常な遺伝子を持っていない場合に全く問題はありません。もし片親に一方の遺伝子に異常があった場合に子供に受け継がれる可能性があります。

もしも両親に片方ずつの遺伝子に異常があって生まれた場合多くは四人目の子供に一対の遺伝子の異常が生じウェルナー症候群となる可能性はけして否定出来ません。また三人目や四人目の

末子に発症することが多くあります。しかしながら四人兄姉全員がウェルナー症候群であることも報告されています。

日本において縄文時代やそれ以前に遡（さかのぼ）り、ましてや島国である。しかも三百年以上の鎖国政策にあって、土地財産を守る為に、親戚縁者の結婚が普通になっていたことが一番の原因かも知れません。

世界各国で『ウェルナー症候群』と診断され報告されている三千二百名の内の約二千名余が日本人であることで頷けないこともありません。

つまり日本人百万人に二六名の割で発症が報告されております。

ただしこれは遺伝子検査（三十五歳前後）において、或る程度進行し『ウェルナー症候群』として発症が確認されている人数の報告の数値であり、氷山の一角にすぎません。

ＷＲＮ変異をヘテロ接合体で保有する日本国民は七十万人と推定される。

毎年二十名の赤ん坊がリスクとなり、「ウェルナー症候群」発症の温床になっております。

現在の研究では、親戚縁者の結婚に生まれる子供だけに表れる『ウェルナー症候群』と断定出来ない、逆に恐ろしい結果が報告されています。

この文章で脅かしている訳ではありませんが、ひとごとではない気がしませんか？

『ウェルナー症候群』は特定疾病に指定されている病であります。

ただ、難病に指定されていないのが悲劇なのです。私のような病は治す手立ては有りません。

私はこのことについて主治医に質問と提案を試みてお話致しました。主治医は納得し賛同して下さいました。

遺伝子異常による病気は、臍帯血（さいたいけつ）による遺伝子検査で早期発見は可能です。勿論両親の同意があってのことです。

発症(生まれながらの発病)は二十歳前後になってからの発見やそれ以後十年二十年してからでは、既に遅く進行を放置しあるいは部分的な処置（対症療法）にのみに周知しております。

糖尿病においては、当たり前とされるⅡ型の治療のみで考えている医師が殆どで、血糖値が高いことでインスリンのみの量に周知し大量投与を行うことによるインスリン抵抗性高血圧の発症と低血糖の繰り返しであります。

『ウェルナー症候群』からの糖尿病(抗インスリン糖尿病=非依存性糖尿病)発病を知らないで医療していることの医師の無頓着には呆れます。

動脈硬化症(閉塞性動脈硬化症)は必ず出現します。圧迫される場所や血行が悪くなるところに潰瘍(かいよう)や褥創(じょくそう) 壊疽(えそ)として現れ、菌が侵入すると切断を余儀なくされます。

強皮症的皮膚障害や あらゆる部位の石灰化(特にアキレス腱)と萎縮 などを起こします。

脳においては、高血圧 低血圧による脳卒中(梗塞=血栓・出血)を起こします。

貧血は必ず出現します。心臓に関係しては心筋梗塞 を起こします。

また低体温症による障害や・・・漢方で云う瘀血(おけつ)による冷えのぼせ と頭重 頭痛を合わせ持ちホットフラッシュなど年中起こします。他に、自律神経系や新陳代謝や免疫機能低下やホルモンのアンバランスとなり、ストレスからと思われる睡眠障害・精神障害など。

また平行して、糖尿病(インスリン非依存性糖尿病)・若年性両側性白内障・しわがれ声・声帯麻痺・肝臓胆嚢障害・腎臓膀胱障害・肺臓大腸障害など、眼科においては、若年性白内障を患うことは先に触れましたが、それに伴い眼底の火傷による水疱が出現や緑内障・視神経萎縮などによる失明もありえます。

そして一般的に現れる癌腫瘍以外に、特殊なサルコーマや甲状腺腫と骨腫瘍 皮膚癌においては

黒色表皮腫が認められます。

甲状腺癌は特に起こし易く医師は検査は絶対怠らないでほしいものです。

医師は「検査していた」「大丈夫だから」と、私は言われ続け、右甲状腺穿刺検査のみで、平成八年三月)悪化の症状が出るまで左甲状腺穿刺検査をしませんでした。六日後・・・呼ばれました。

医師も告知をためらったのか、一時間程待たされました。

検査の結果「レベルvの判定が出ている」と、言い「手術をしなければ死ぬよ」とまで言われました。

『ウェルナー症候群』は前記の病に総て関係している先天性劣性遺伝子病 全身性疾患です。

真綿で首を絞められるように序々に進行し苦しみの内で耐えて生きていかねばなりません。

第二章　青春

㊀誕生

僕は、昭和二十二年五月七日に東京都杉並区に今でも存在する実家の六畳間で早朝の四時二千二百グラムの少し小さめながら五体満足で産声を上げました。

二男二女の末子 次男として生まれました。

この昭和二十二年は、戦前戦後を通じて一番子供の多い年で、六十年後の現在は『団塊世代』と言われる初年度にあたります。

実家は、戦時中の昭和十七年新宿区落合の下宿から杉並区和田本町(現在和田三丁目)に新築したばかりの家に引っ越したそうです。

昭和十九年から二十年にかけて、当時八歳の長女・七歳の長男・二歳の次女の三人の子供は山梨でもそれぞれ違う場所に疎開しており、父親も海軍の兵隊にいっており不在だったそうです。

母は一人で家を守っておりました。

昭和二十年三月十日の大空襲は、それはそれは大変だったそうです。特に下町は軍事工場が多くあったのか、攻撃の対象となって爆撃され多くの人が亡くなりました。

下町は焼け野原となって、焼け出された人々は山の手に逃れて来たそうです。

この近辺にお寺が多いのも、関係していると聞きました。

それでも山の手も下町のような激しい空襲ではないにせよ、B29爆撃機から焼夷弾(しょういだん)を投下され、そうとう広い範囲が焼けたそうです。

ところが、気丈(きじょう)な母は回りの家が火に包まれる中、火の粉から家を守るべく水をかけ続け、屋根にまで登って頑張り通したそうです。それで我が家は焼けずに済みました。

しかし、その後近所やその他の焼け出された人々が家に入り込み、しばらくは大変に応情(おうじょう)していたようでした。

という訳で、僕は、実家の六畳間で午前四時 正に満潮の時、自然分娩でお産婆(さんば)さんに取り上げてもらいました。未熟児のように二千二百グラムと小さかったのですが、すこぶる元気だったそうです。山梨の本籍からも伯母さんが手伝いに来てくれました。

何事もなくすくすくと育ち三歳になるころ初めて覚えていることがありました。
姉である長女は、中学一年の時自分の通う学校に、連れて行ってくれました。
学校の中も隅々まで連れて歩いてくれました。
校庭では、今で云う学園祭の一部のバザーのようなことだったと思います。色々なことをやっていて、来園した人を飽きさせないようにしていたとおもわれます。
僕が好きでやらせてもらったのは、「魚釣り」と云って棒の先に紐を付け、紐の先にプラス磁石を付けて、魚の口に付けたマイナス磁石で引き合わせ、つり上げるゲームです。とても楽しかったのでしょう。
そのとき僕はわずか三歳、にも拘わらずこのことは、はっきり覚えているのです。
その前後なのか、僕は覚えていないのですが、あるデパートの屋上で動物のゾウに乗ったそうです。

㊀わんぱく小僧

次女である姉が申すには、博之は色白でおとなしく可愛いが弱々しくて喧嘩すると、いつも負けて泣いて帰って来るのがとても印象的だったと言っておりました。
でも僕は、おとなしく見えるように ネコ を被っていたのは事実ですが、真はしっかりしていたつもりです。かな？
一年保育の幼稚園では、非常に目立ちたがりやのところもあって、写真を撮る時には一番前や、スベリ台の一番高い所によじ登り写真を撮ってもらっていた事も覚えています。
しかし、あの当時の僕はマセていたのか⁉ 毎日幼稚園へ行く通りすがりには、女の子の家で「花子ちゃん」と呼んで一緒に通っていました。
初恋は、ななんと、幼稚園の先生でした。もちろん片思い。
またお寺の経営する幼稚園だったので【ちんねんさん】を踊ることになり、とても上手に踊ったことも覚えています。そしてこの時代は、戦後復興の時期に当たり、生活にも活気が出て来た時代です。戦前賑やかだった料亭や遊郭（ゆうかく）が無くなくなった広場には、テント張りの「どさ回り」もその頃全盛期にあたりました。

㊂知らざー言って

僕も観るのが大好きで、母が「やめなさい 危ないから」と止めるのもきかず、「観たい 観たい」の一心で石垣によじ登り、滑り落ちて頭を軽くぶつけた記憶もあります。
そして【高田浩吉】主演映画のワンシーンを真似しては喜ばれ、喜ばれてはまた演じる変な子

供でした。
直ぐ近所に「コガネ座」と言う映画館がありまして、当時子供四十円で入館することが出来ました。東映・東宝の時代劇や日活の青春ものを二本立てでゆっくり楽しめました。これは小学生時代テレビが家庭に普及まで良く観にいきました。
映画館の中は土床に椅子を置いた百名入るかどうかの劇場でした。映画と映画の休憩時間には、大人にはビールとおつまみ 子供にはアイスクリームやサイダーやラムネやポップコーンなど売って歩いていました。
またその頃の遊びは、刀 僕は棒きれだったな・・・ 棒を持ってチャンバラごっこをしたり、ピストルごっこは、手でピストルの形を真似して「パンパン」と声を出す遊びなどをやっていた。ピストルで撃たれて死ぬ格好の真似をしたりして、それに、おっかけっこ遊びをしていました。
積み木遊びでは色々の形を想像して作り楽しんでいました。
また、夕方暗くなると積み木を拍子木にして叩いて「火の用心」などと声を上げ町中を友達と歩いたりしました。それもみんな遊びだったのですね。
梅雨が明け夏になるとカブト虫や蝉や蝶々を見つけにいったりしました。
そして九月の中秋の名月十五夜には、各家庭で縁側にお団子やお菓子果物を、お供え置きして

ススキを飾りお月様を眺めたものです。
子供達には、そのときばかりはお供えものを盗む（本当はくれた）のを見逃してくれたので、その時代の風習だったと思います。 縁側のお菓子や緑色のみかんや栗など盗みに行って、けして多くは取らずに一個ずつの暗黙の了解が歴然とあったと思います。嬉しい思い出がありました。
これは昭和三十三年頃まで続いていたと思われますがその後も暫く有るにはあったと思います。
僕が物心ついて初めて病気になったのは、腸捻転でした。
夏の盛りの夕食後だったと記憶しています。それは何故かと云うと、寝るための布団が敷き詰めてあり、蚊帳（かや）が掛けてあったからです。僕は、右側か左側か記憶にないのですが、お腹が急に痛み出し布団の上を転げ回ったのです。正に疝痛（せんつう）でした。僕は「神様仏様お助け下さい」と何回言ったのでしょうか かかりつけの医者が来ても「神様仏様お助け下さい」と転げ回っていたのです。医者も呆れていましたが、そこは心得たものしっかり治してくれました。
母は優しく看病してくれました。僕の具合が良くなると「ひろは何が食べたい食べたいものを

言ってごらん」と布団に仰向けで寝ている僕に聞いてくれました。
僕は「バナナが食べたい」と贅沢を言いました。母は、家計も大変だったにも拘わらず買って食べさせてくれました。当時バナナ二本で七十円もする高い買い物だったのです。母には感謝々の日々を過ごしていました。
当時の時世では、買い物に行くより各家庭に売りに来る御用聞きが当たり前の風潮でした。
早朝一番二番を争って売り声を掛けるのが、「あっさりしんじみい」です さて何のことでしょうか？ 貝屋さんの売り声で『浅蜊（あさり） と 蜆（しじみ） と 蛤（はまぐり） 』を売りに来ているのです。
「なっとなっとぉー」のワラジッポの『納豆』売り 木べらで和がらしを入れてくれました。
牛乳も朝早く届きます。そして酒屋の御用聞きです。
夕方には、『豆腐』を売りに「プヲーピープヲーピー」とラッパを吹きながら自転車でやって来るおじさんがおりました。家には僕が生まれると同時に飼い始めたラブラドールの雑種で名前を『ペス』と言う犬がおりまして その犬が豆腐屋のラッパに呼応して「ワウンーワウンー」と啼くのです。僕が勝手口に出て行くと豆腐屋のおじさんがアメ玉を二個くれるのですが、そのことを母に告げると母はお鍋を渡し豆腐と油アゲを買い求めます。

その他、「たけやーさおだけ」は洗濯物や布団を干す竹竿をリヤカーに乗せて売り歩く『竿竹屋（さおだけ）』さん。秋から冬 ときには春まで「九里より美味（うま）い十三里半～・・・いもーぇいも」と掛け声をかけて、リヤカーで売り歩く『焼き芋屋』さん。夏には「きんぎょーぇ きんぎょ」の『金魚屋』さん。「チリン・・・チリン」と涼しげな音を響かせながらリヤカーを引き回す風鈴売りの『風鈴屋』さん。また売りには歩かないけれど、近所に『氷屋』なる商売がありまして夏とは言わず年中ですが買いに行ったものです。壱貫目(三、七五キロ)の重さの氷を藁縄（わらなわ）で十文字に縛りつり下げるようにしてくれます。重たいが持って帰りました。
その頃我が家には、氷で冷やす木作りの冷蔵庫があって、夏には母が『カキ氷』を作ってくれます。美味しくて美味しくて忘れられない絶品の味でした。
「ドカーン」と爆発音が聞こえると、お米一合と十円を持って行きアラレを作ってもらう『バクダン屋』さん。「ピー」と汽笛のような音をたててやってくる『ラウヤ』はラウスの竹を使ったキセルのすげ替えやパイプの掃除屋さん

煙突に詰まったススを掃除してくれる『煙突掃除屋』さん。『鋳掛け屋(いか)』は、鍋の穴を塞いだり錠前を直したりします。昭和三十三年頃まで町のあちこちを巡り歩いていたようです。

僕が小学校五年か六年生までのようです。その頃テレビが家庭に普及しました。

たいへんに便利な時代でした。

家の回りは、東と南側に麦畑と野菜畑がありまして、北に遊び友達の家そして西に道路でした。

門は、瓦を乗せた武家門作りで左手には、瓦を少し覆う黒松が植えてありました。

玄関は西に位置しており引き戸でした。

玄関の中の床は、コンクリートに小粒の石を散りばめ敷き詰めた二畳程の大きさでした。

玄関奥の中央には、靴や下駄や草履を脱ぐ長方形の踏み石があり、そこから床に昇るようになっていました。左手には下駄箱が有りました。

この玄関を僕は大好きで、日曜日には、玄関の掃除を欠かさずやっていました。

水をまいてデッキブラシで擦(こす)る方法でした。僕は、ちっとも苦にならず、遊び感覚でやっていたのです。

玄関から上に登ると二畳程の板の間になって左端に中廊下が台所(お勝手)に続いておりました。

「うーんと・・・」

中廊下で懐かしく想い出したことがありました。それは、廊下の左右の柱に左右の手の平と左右の足底を蛙のように充て、天井まで忍者のようにへっちゃらで昇っていたのです。凄いと思いませんか?!

玄関の左側 北には四畳半と便所(当時は汲み取り)がありまして、右側 南には八畳分の洋間があります。

中廊下へ入り直ぐ右手(南側)に床の間のある八畳間と襖(ふすま)(襖(ふすま)を外すと十四畳)で仕切られた六畳間(僕が生まれた部屋)の南側に障子で仕切られた縁側があります。

縁側には、自然石の踏み台があり、雨戸があって、僕が夜には引き出して閉じ、朝には引き込んで収めていましたそれが日課の一つだったのです。

縁側から一番奥手南側に樹木に覆われた庭 そして花壇のある庭が一望出来ます。

北側の台所には、流しと木製の冷蔵庫(氷で冷やす)がありました。

(後に電気冷蔵庫と洗面所となり、井戸水をモーターで流しに引き入れました)

食卓の床下には、一・五畳の地下防空壕がありました。

その奥東側には、掘り炬燵(ごたつ)のある六畳間(おばあちゃんの部屋に東向きの仏壇)がありました。

東側は、出入りが自由の引き戸のガラス戸になっていて、床には、縁台がありました。

そのころ冬には必ず雪が三十㎝程降ることが例年、当たり前の様子でした。そして雪国みたいにカマクラを作って友達と遊びました。

さて、僕は縁台から、雪に向かって”おしっこ“で絵描きをする悪餓鬼(わるがき)でした。

学校から帰ると掘り炬燵にもぐり込みウトウトするのが好きで病みつきになっていました。

ネコと一緒に・・・

西寄りの勝手口から外に出ると、風呂場と洗濯場そして手こぎの井戸がありました。

軒下では、薪(まき)で炊く焜炉(こんろ)があってお釜で御飯を炊いていました。

よくお釜のお焦げ御飯を兄姉で「キャァキャァ」言いながら捕りあっていたのを思い出します。

それが最高に美味しいのです。

家の周りは、ぐるりと歩き廻れるようになっていて、隠れんぼうや追いかけっこ、チャンバラごっこなどで大暴れする事が出来ました。

また家の周りには、配置良く東には胡桃(くるみ)の木・南には柿の木・西には柘榴(ざくろ)の木・南西には茱萸(ぐみ)の木・北東には無花果(いちじく)の木・南の六畳間の前には葡萄(ぶどう)棚 西には柘榴(ざくろ)などの果実がありました。

そして桜(そめいよしの)や梅の木(白梅・紅梅)や金木犀(きんもくせい)もありました。

このように一年中とぎれることのない自然環境の楽しみ一杯の庭でした。

母は、庭に花壇を作るのが大好きでした。

ダリヤ・カーネーション・向日葵(ひまわり)・コスモス・薔薇(ばら)・鶏頭(けいとう)を作って咲かせておりました。小さな紫色のスミレも好きだったことを覚えています。

桜の木は、毎年咲いて花は綺麗で嬉しいのですが、新芽が出ると毛虫が発生するので、毛虫取りに狩り出され大変でした。でも先頭に起って退治していたのを覚えています。

また当時は、家屋は二階建てが少なかったせいもあり、三㎞も離れているにも拘わらず、中野駅始発の蒸気機関車の汽笛が『ブゥキョオーブゥキョオー』と見事に聞こえていました。

『冬至来ぬ　機関車汽笛で　目覚め哉』

機関車と言えば、この頃中央線で甲府に行き身延線で田舎に行くにも、東海道線で静岡や林間学校に行くにもＣ62を普通に利用していました。

トンネルに入ると慌てて窓を閉め煙りを避けた想い出があります。煙は石炭の臭いで今でも脳裏に焼き付き懐かしさで一杯です。

小学校は、越境入学で中野区の桃園第三小学校（桜花小学校と合併現桃花（おうか）小学校）に通っていました。低学年のときは、バスに乗って一人で通っていました。定期券がとても嬉しくてバスの車掌さんに何回も見せたりして「もういいのよ」などと言われ近所の人だったせいもありまして、顔見知りになり挨拶するようになっていったのです。バス停は、その頃都営バスの堀ノ内車庫でした。

昭和三十九年には環状七号線になったのですが、それまではバスが行き違うこともままならない狭い道路でした。たぶん東京オリンピックに向けて作ったのでしょう。

さて、話しを元に戻します。　小学校では、色々な思い出があります。

学校の正門は中央運動場の西側にあり、東向きに入ります。校門へは道路の右と左からスロープになっていて、(横から見ると蒲鉾形)中央に位置しておりました。

校門に入ると西側右手に樹齢は知りませんが欅（けやき）の大木があり、現在(平成二十年)も現存しているそうです。西側左手には砂場と鉄棒そしてその北側に縦二十五メートル横十五メートルの大きなプールがありました。運動場を中央に東側から西側に横切るＬ字形の校舎がありました。

東側校舎の左北側に五メートル巾の十段位の階段があります。校舎に入る入り口の階段です。その最上段に登り後方(西側)に振り向くと、「なあななんと」素晴らしきかな【富士山】が麗美な姿を観せてくれます。天気が良い日はいつも感激していました。

またこの小学校には、父親と二十歳離れた兄(叔父)の娘が、僕にとっては従姉弟（いとこ）が先生をやっていて、なんとなく親しみ深く感じていたので、通うのが楽しみでした。

冬の教室では、達磨ストーブで暖を取っていました。ストーブの火入れは、男と女の二人が組みになり毎日交代で当番に当たり、教室の皆が来る前に暖かくしておきます。

僕も当番になった時は、早く出掛けて任にあたりました。まず北側にあった石炭倉庫から楕円錐形の黒いバケツに一杯(沢山)を当番の相手と「よっこらしょ よっこらしょ」と頑張って運びます。そして校務員のおじさんにマッチと新聞紙と小板を貰い達磨ストーブに火を灯すのでした。僕は、自慢じゃないけど上手でした。あれ 自慢したかな？

正月には、凧揚げ大会なども催されとても充実していました。

夏になると、プール開きが行われ、待ちに待った水泳教室の体育授業が始まります。

水泳教室以外でも、プールで遊ぶ時間もありました。やはり鬼ごっこが支流でした。僕は素潜りが得意だったので逃げるときも鬼で捕まえるときも、他人(ひと)よりは有利だったようです。とても楽しかったでーす。

また学校のプール以外にも家の近所に「山手プール」がありまして良くいきました。ここは製氷会社が経営していたせいもあってか、水温が低く泳いだ帰りには寒くなっていました。

それを見越してか、出入り口に「おでんや」の屋台がありまして買って食べない訳にはいきません。プール入場料金四十円 おでん五円の時代です。

また中野区公会堂(現在のゼロホール)まで学校から歩いて往き「でん助劇場」や「狂言」「映

画」を観劇する課外授業が多くありました。とても楽しくてうれしかったことを覚えています。

その他小学校の行事では、林間学校や臨海学校がありました。臨海学校では男の子全員赤ふん(褌(ふんどし))で海に入りました。少し恥ずかしかったけれど仕方ありません。

一～二年生はバスで通い 三～四年生は主に歩いて通い 五～六年生は自転車で通いました。

バス通いの頃には放課後早く帰ることが殆どで自宅近所の友達と野球をやるのが楽しみでした。

当時はG巨人の大ファンでした。東京なので必然的だった気がします。水原監督・長島・王の時代です。僕も近所の遊び仲間で野球チームを作り練習に頑張っていました。小学生のチームが勝ち進んで強くなれば、後楽園に出れるなどと夢物語でした。でも日曜日になれば、中学校の校庭を借りて(今だから時効なので、本当の事を申しますと勝手に塀を乗り越え使っていました)練習したり、他チームと試合をしていました。

一番嬉しかったのは、母がグローブとバットそしてユニホームを買ってくれたことです。

僕は、G巨人のショート広岡が好きだったので、ショートを守っていました。

母は、内職やデバートのマネキンをして苦労をして何不自由なく育ててくれました。

いま思うと僕は、その時の生活が当たり前のことのようにふるまっておりました。母の愛に感謝

しております。

そして大相撲の大ファンでした。僕の家の近所から十両を経験した「島田川」と名乗る元関取がおりました。毎年夏には、巡業と称し高砂部屋と花籠部屋から力士を呼んで、小生が低学年の時は近くの空き地で催しておりました。三年生の頃より、自宅の東と南の麦畑や野菜畑が無くなり広っぱになりました。その空き地を利用して巡業と子供相撲を毎年夏にやることになりました。

当時は、高砂部屋の小結朝潮 後の横綱朝潮 と 花籠部屋の小結若乃花 後の横綱若乃花が来ていた時代です。相撲取りは大食漢なので我が家の母が手伝い【ちゃんこ】を作たり、【うどん】を茹でて食べていました。

勿論です 僕も子供相撲に毎年参加しました。僕は身体が小さいわりに自慢じゃないけれど結構強くて、三人抜き・五人抜きで相手を倒し賞品(醤油・味噌・砂糖)を沢山貰った記憶があります。

ちなみに掛技(得意技)は『吊り寄り二枚蹴り』で、すいません僕が勝手に名付けた掛技でーす。

相撲をやった広場はいつも子供の野球などの遊び場でした。暗くなって野球が出来なくなると、暗くなっても出来る遊びをやりました。

棒を立てて小石を棒と平行に投げながら 口で「うー」と言うのです。するとどこからともなく黒い影が寄って来るのです。面白い遊びです。 まさにバットマン・バックテュウ・ザ・フィチ

ャーの蝙蝠(こうもり)です。

自宅から少し西に行った所に、済美山と言う名の雑木林の小高い丘、その脇をすごく綺麗な小川が流れていました。 夏になると、蛍が飛び交います。夕涼みをかねて、母と姉と一緒に出掛けたものです。

『母姉と 蛍狩り哉 夕涼み』

学校へ歩いて通う頃の帰り路では、一日十円のお小使いを駄菓子屋に寄って使うのも楽しみの一つでした。他の日には、紙芝居がやって来て太鼓を鳴らし子供達を呼び集めます。

駄菓子を買うと、僕は水飴(割り箸で小練り透き通った水飴を白くする)やソースせんべいなど食べながらみんな地べたに座ります。すると「始まりはじまり」太鼓を叩き調子を合わせ独特の口調で物語りを喋り見せてくれます。あの頃はテレビが無かった時代の子供達の唯一の娯楽であり、贅沢だったと思います。

その頃は、歩いて帰るので、『まめちゃん』などと女の子に呼ばれ一緒に帰ったことが多くあり、いつしか恋心を抱くようになりました。子供相撲に誘っては、強いところを魅せてアピールしたこともありました。ずっとずっと忘れられない思い出です。

また近所の掘之内にはお寺が沢山ありますが、通称“お祖っさま”と言われている日蓮宗の厄よけ祖師『日円山妙法寺』は建立七百年余の歴史があります。
そうです、古典落語の［お祖っさま］と 言う演目にもなっているお寺なのです。

その噺（はなし）は・・・

『下町に夫婦が仲良く住んでいました、ところが最近主人の物忘れがひどくなったのを心配したお嫁さんが、家主の長老に相談すると・・・

「物忘れを治すには［お祖っさま］にお参りするのが一番良い」と言って旅に出したそうです。

しかし主人は、旅の途中で自分の行く場所や何を目的にに出掛けたのかも忘れて途方にくれた』と言う話を面白可笑しく噺した落語でーす。

前置きが長くなりましたが、そのお寺は、三夜様と言って三の日が縁日なっています。

当時は十三日と二十三日の二回でした。僕も学校から帰ると必ず遊びに行ったものです。

最近 たぶん平成になってから［無縁様］で三日も縁日になっております。

縁日には、とても楽しいことが沢山ありました。

現在では、大道芸を認可性にして、行う場所を決め大会をやって芸を競い合っているので、全

くと言って見る機会が無くなりましたね、残念です。

僕の子供の頃は、［お祖っさま］の縁日で何時も見ることができました。

その中でも［ガマの油売り］が大人気でした。

僕も知る限り語ります。では・・・

『「ちょっと ちょっと 口上をば、申し上げまする・・・」』

「さーて 御立ち会い 御用とお急ぎのない方は 寄ってらっしゃい 見てらっしゃい

ここに取い出したる銘刀 正宗 真剣であーる 本当に真剣にやりますーる

それでは銘刀正宗の切れ味を得とごらんあれ・・・ここに懐紙が一枚

この懐紙 北朝鮮みたいに返してくれない!? ん 冗談は顔だけにしてくれって

それでは一枚の懐紙が二枚 二枚が四枚 四枚が八枚 八枚が十と六枚 十と六枚が三十と二枚 三十と二枚が六十と四枚 六十と四枚が百二十と八枚

さーてお立ち会い 銘刀正宗の切れ味を見たかな 三鷹かな いや堀ノ内妙法寺かな」と言いながら細かく切った紙を扇子で吹雪のようにまき散らした。

「お疑いなされるな この正宗の切れ味 腕で試そうほどに」と言って、刀を腕に当てた。そして

引いた。そこから血が滲(にじ)み出した。それを観客に晒(さら)すとざわめく。
「さーて お立ち会い ご覧の通りの刀傷 心配は **いりません!?」**
ここに取り出したる軟膏」「何個かな一個だけ!?」
と言って軟膏を血の出た傷口に塗った そして懐紙で拭き取り
「傷口に塗ればこのとおり治ってしまうというしろもの」
「まーだ お疑いか? ならば 銘刀正宗に軟膏を塗って試してみようではござらぬか?」と言うと
刀に軟膏を塗りだした。
「さーて お立ち会い 軟膏を塗った刀は如何に・・・」と言って腕に押し当て
「押してもだめなら引いてみろ」と言いながら刀を扱(しご)いた。
「うおー」と歓声
「切れないではないか わっかるかな この軟膏の素晴らしさを知って貰いました」
「では、この軟膏は何じゃらほい 遙か北に位置にする筑波山 この筑波山の山麓奥深くに、日本

でただ一ケ所にだけ生息する珍しい蛙 その名も四六(しろく)のガマと申す」
「四六のガマを知っているかなぁー? 知らないだろうな?
見たことないのに知っているはずはない だがお立ち会い これなる箱におとなしく入っておる」
と言って 箱を指差すが、中は見せない。
「この四六のガマ なぜ四六のガマと言われるか分かるかな?
分からないだろうな でーは 教えて説(せん)じよう」
「ガマとは何か 蛙のことである しかしお立ち会い 蛙は、かえる なのである。
知ってのとおり玉子からおたまじゃくしになりおたまじゃくしから蛙に かえるのである。
ところがガマは、おたまじゃくしからならない 最初から我慢(ガマン)して蛙形になる 信じるか?
インディアン嘘つかない?
その時前後の指が前四本と後ろ六本になる だから四六のガマと言う」

「この四六のガマ 見付けて捕まえるのがまた大変　それこそ四六九時 中 見張っていなくてはならない大変なのであーる」
「さーて捕まえた四六のガマ どうするのか？」
「この箱の中におる　中には、五面のガラスが敷き詰められている」
「中では、四六のガマは、おのれの姿に惚れ惚れとして・・・ん?!違うな　恐れ 戦き だらりだらりと冷や汗をかく」
「その冷や汗を丁寧に一滴残らず土鍋に集め　柳の葉をもって四六の二十と四日の間とろりとろりと弱火で煮詰め　出来上がったのが　このガマの油であーる」
「効能は見ての通り、切り傷・擦り傷・口内炎・肌荒れ・にきび・恋の病などなどである　お買い得だよ三百文　よーし 今だけ半値の百と五十文でお譲り致そう」『
てなわけで・・・大道芸ガマの油売りの口上であった。
「その他には、南京玉すだれ・蛇遣い・バナナの叩き売り・飴細工・チンドン屋・ばくだん

ラウヤ・包丁研ぎ」や「お好み焼き・やきそば・ベッコウ飴・綿菓子・ハッカパイプ・串だんごカルメ焼き・ソース煎餅・チョコレートデザインバナナ・しょうが餅・あめ細工・ラムネ
八源七味唐辛子売り（一味・胡麻・陳皮・罌粟・菜種・麻の実・山 椒）この八源七味唐辛子売りにも「口上」があります。
『そもそもやげん堀の七色唐辛子とは由緒いわれ、故事来歴がございます
今をさること三百有余年前 かの徳川御名君と謳われた三代将軍家光公の御時代は
寛永二年長月 菊の御宴のみきりに 将軍家に奉りますればことのほか御感に入り
徳川の**「徳」**の字を賜って 徳の商標をつける事と相なりました』
トトン トン トン トンと匙で丸桶の端を、拍子を付けながら叩き・・・
『やげん堀の七色唐辛子とは 何が入っているかと申しますとトトン トン トン
まず最初に取り合わせまするは トトン トン トン　武州川越の名産 黒胡椒
次は紀州名産蜜柑の皮粉 江戸内藤新宿は焼き唐辛子 トトン トン トン トン
東海道を上りまして静岡は朝倉の粉山椒 大和のけしの実 トトン トン トン
野州日光の名産麻の実 トトン トン トン トン 七色が七色ともに香り トトン

大辛　中辛　小辛　辛抜き 名にしおう お江戸のやげん堀 トトン トン トン

家伝で合わす七色は 世の皆様のお好みに 叶う元祖の匙加減

お江戸のやげん堀の出張販売でございます』

「金魚すくい・ヨウヨウ・ボンボン・フウセン・盆栽・似顔絵・糊絵・鉢植え屋

切り花屋・こよみ雑誌ふろく・まくら・下駄履き」などの店がところ狭しと軒を並べています。

色々な出店や大道芸は驚きと感激で『三夜さま』の縁日を楽しんでおりました。

「さてと・・・『お祖さま』の語りはまだまだありますが、これくらいにして　母との思いでに浸ることに致しましょう」　「結局母とのお付き合いは、たった二十七年と四ヶ月でありました。つまり 僕は昭和二十二年五月七日生まれ、母は、昭和四十九年九月六日に亡くなりました。」

どのような女性であったか勿論一言で言うことはできませんので、ここでは、幼年期から小学生のときの母を語りましょうか。」母は、いつもいつも着物を着ていました。よっぽど好きたったのですね。料理を作る時には、襷（たすきか）掛けに前掛けか、割烹着を着ていました。またもんぺを履いていました。　掃除（雑巾で縁側を水拭きしたり、茶かすを畳にまき散らしホコリを取り払い拭く）していました。

寝具布団も打ち直し天日干しにしては、作り替えていました。僕もそんな時真綿を引く手伝いを何回もやった覚えがあります。

そして正月が近づくと襖（ふすま）の張り替えをしていました。勿論正月のお節料理は、総て手作りでした。僕もそんな母の料理を初め、色々なことを学びました。洋服を着ていたのはほんのわずかしか見たことが有りませんでした。」

「僕が物心ついて薄ぼんやり記憶にあるのは、七五三（しちごさん）のとき自宅玄関で姉（七歳）と母の三人で撮った写真でした。母は、とても写真が好きだったのでしょう、記録として残っています。」

そのころ一九五〇年（昭和二十五年六月）朝鮮戦争勃発

でも当時六十一年前（僕の誕生直後の赤ちゃん）や五十年前の写真は、自宅のカメラではなくて写真屋さんに撮って貰ったのだと推測しますよ。でもね お金も係るし趣味的感覚がないとそこまでやらないと思うのだ。」

幼稚園での写真　七夕の姉との写真　運動会で昼食時母との写真 等々沢山想い出が残っているのです。

母は、芸術的センスもあってか、絵画も描いたりしていました。
母が亡くなった時には、天地がひっくり返る如き騒ぎで長年母の描いた絵画を欲しいと思いながら手元にはありません。残念です。
そして夏になると母は、「庭でバーベキューをやろう」と言って、おにぎりを結び、肉や魚そして野菜(ピーマン・人参・玉葱・長ネギ・きゃべつ・アスパラ・少し茹でてアルミホイルに包んだじゃがいも・さつまいも)を用意しました。
焜炉(こんろ)はレンガの広い面を表裏に隙間を空けて互い違いに積み上げて空気の通り道を造り、高さ八十センチ　横巾八十センチ　縦幅五十センチに作る。下には、大きな石を置いて底上げをして、薪を入れるレンガの積み上げを工夫する。上には、網と鉄板を置いて立派な焜炉の出来上がりなのである。焜炉(こんろ)を囲む人々は、家族と兄と姉の友達が加わり大勢でわいわいやるのが楽しいのです。大人は、ビールを呑みながら談笑しています。
僕は花火担当で『好きこそ物の上手なれ』と言われるように上手にやっていました。

母は、「花火は綺麗ね　でも火傷(やけど)をしないように気を付けなさい」と言ってバケツに水を入れて持ってきてくれました。優しいでしょう。
僕も色々なものを沢山食べてサイダーをのんでお腹一杯になって満足　まんぞく「ゲブッ」と　ゲップをしちゃった「ごめんしてけろ」ん・・・どこの方言?!
ま・とにかく善い母　善い家族に恵まれ育ちました。
この頃兄姉で流行っていたのが「あみだくじ」でお金を出し合う料金配分を決めるものでした。
僕はくじに参加しますが、お金は出さず買い物に行く役でした。
ソフトクリーム(バニラ)や駄菓子「駄菓子」は当時　匁(もんめ)からグラムに変わりました。一匁が三、七五グラムになった時代です。(主にかりんとうや煎餅コンペイトウ)や今川焼き(当時五円)等でした。ちなみに千匁が壱貫目になります。氷りは壱貫目(三・七五Kg)売りでした。
五年生の夏に、母を先頭に僕と兄姉四人で箱根の芦ノ湖にキャンプに行きました。
その時のキャンプはテントではなく丸太を組んだ山小屋風のログハウスでした。皆とわいわい食事を作り家族の絆を作りました。

夜はキャンプファイヤーをやって過ごし二泊しました。
昼間の僕は湖で泳ぐつもりで出掛けボート屋の息子と友達になってボートに乗り遊びました。
泳ぐためにボートから下り手を離して泳いだのですが、何か解らないものが身体や足にまとわり付き泳げなくなりました。ずるずると引き込まれ溺れそうになりました。
藻に足を絡まれ沈み頭上にボートが通り抜けるのをはっきり見届け死ぬところでした。
その時冷静に絡まれた藻を外し一命を取り留めました。
小学六年の時には、青梅街道の地下に地下鉄丸ノ内線が開通され、青梅街道に走っていた都電が廃線になりました。でも同時に開通と廃線にならなくて、しばらくほんの僅かな期間ですが走っていました。その期間を見逃さない六年生のクラスメイトの勇士が集まり都電に乗り新宿まで往き、復路は地下鉄に乗りました。とても嬉しく楽しい時間と歴史の一頁に載った気分でした。
そんな小学生時代でも いじめ はありました。僕は身体が小さく弱々しく視られていたのだと思われ、いじめ の対象になっていたのでしょう。

でも当時の いじめ は、最近の陰湿なしかも先生が荷担する恐ろしい いじめ ではなく遊びの延長でした気がします。
僕は、立ち向かって自分で解決していました。
やはり、怖(こわ)くて怖(お)じ気づくだろうと思われる人を見つけて いじめ は行われるだろうと思われます。また話題にくわえてもらえず 無視されることもある。兎に角積極的に臨機応変に立ち向かい行動することです。
先生にもはっきりと説明し理解をしてもらい家庭でもなるたけ早い内に父母に相談すべきです。
何と言っても、自分の弱さを自分でカバーして解決するのが最善でしょう。
また六年生の担任になった先生は、僕を弱々しく思ったのか、逞(たくま)しく育ってほしいと思ったのでしょう。先生自身もボーイスカウトの隊長をしていたので僕を入隊するように薦めてくれました。自宅に近い百二十八隊に入隊することになりました。ボーイスカウトは、僕にとって大変有意義な活動でした。

日本ジャンボリーに二回出ました。そのころの生活や行動 物の考え方観察力が自分にとって如何に重要な心の支えになったことだと思われました。

事あるごとに担任の先生は、「**雑草の根強さを持て**」と いつも言っておりまして 僕に向かって言ってくれているかのように素直に受け止めています。今でも頭の中でその言葉が活動しています。大袈裟に言うとそれからの進路や人生設計を自分自身で考え行動することを学びました。

アウトドアやキャンプの楽しさ厳しさ そして料理の作り方や手順 人数分の材料のイメージそしてそして 山の素晴らしさ(海も大好きです)を知ったのです。

食べることの大切さ 栄養の重要さ 料理の手際と段取り 塩分 糖分 油脂の摂り方使い方等々大いに興味がありました。

小学校を卒業してその後一年に一回のクラス会に先生も出席して七年程大学時代まで続きましたが、僕が幹事をやって油壺から城ヶ島に小旅行クラス会を計画実行してから途絶えて今は断絶状態です。後々判ったことですが、先生のお子さんは片足を切断する大怪我で家庭も大変だったと云うことを小耳にはさみ、それでクラス会が無くなったと推測致しました。

中学になってから単独登山を始め、ボーイスカウトでの食事やアウトドアの教育が大変に役に立ちました。

㊃未来への希望

昭和も三十五年四月となり、中野区の中央中学に入学しました。

まったく将来についてや何を勉強するかなどと考えがありませんでした。

昭和三十五年六月(一九六〇)僕が中学一年当時トランジスターラジオを聞くことがはやっていて放課後放送を聞いておりました。

この時浅沼社会党委員長暗殺事件を伝える放送を聞いたのです。

良く判りませんが、浅沼稲治郎(三宅島出身)は安保闘争を領導していたそうです。

人間嫌いで 勉強嫌い、唯一単独で山に登ることが心の支えになっていました。そんなとき思いもよらぬ出来事がありました。女の子からの誘いです。僕って もてるのかなぁー 赤羽から遠く中野まで通っている女の子です。赤羽の家に遊びに来ないかとの誘いでした。小学校の同級生だったそうです。僕は二つ返事で承諾し、学校の放課後一緒に電車に乗り赤羽の女の子の家に行きました。家では母親がにこにこして出迎えてくれました。近くを散歩したりお喋りしたり、夕方になって家の正面から真っ赤に光って落ちる夕日を二人で眺めました。何か映画のワンシーンを僕が演じているようでした。夕食をご馳走になりました。それからの二人の関係は・・・

残念ながら一メートル前も見えない濃霧の中で迷路に迷ったままとなって発展しませんでした。

ある日家の前の広場(麦畑が無くなり野球をして遊ぶ所や子供相撲とプロの相撲取りの巡業場所)に知り合いの獣医(この時は学生)が馬にまたがり格好良く颯爽と現れたのです。僕は、頭をハンマーで殴られたような衝撃が走りました。「僕はこれを求めていたのだ」と 感じました。僕も獣医になって馬に乗り牛を追うそんな夢を視ることになるのです。

何か？何をやったら獣医になれるのか全く解りません。僕は暫く途方にくれました。

誰に相談する訳でなく時が過ぎていきました。それでも相変わらず山登りには熱心に取り組み勉強が疎かになっていたのですが、気付いていなかったのです。

何にでも興味のある僕は身体を動かすことが大好きでした。良く言っても、悪く言っても兎に角じっとしていられない経ちでした。そこで始めたのが水泳と柔道 空手 八光流合気道武術などでした。そんなある日 いじめ があったのです。首謀者は手を汚さず他人に喧嘩を嗾けるのです。まんまと謀略にはまった僕は屋上に行く踊り場で喧嘩をすることになりました。でも相手は、身体は少し大きいが自分から喧嘩するような人ではないことを解っていました。

でも負けるのが嫌いな僕は、掴みかかってくる相手の顔に拳で殴ってしまい、左眼に青丹を作ってしまいました。その後首謀者は僕を後ろ手に縛り踊り場に放って体育の授業に行ってしまいました。僕は、やっとのことで縄を解き体育の授業に遅れて参加しました。しかしおどろいたのは首謀者 体育の先生は遅れた僕に理由を聞いたのですが、「トイレ」とだけ答えると駈け寄り平手で僕の左頬を叩きました。僕は体育の授業にすんなり入り後は黙りを続けました。

その後僕へのいじめはなくなりましたが、他のターゲットを見付けいじめていました。僕は首謀者にいじめを止めるように説得して止めたのです。そして助けた子と仲良くなって一緒に山に行くことになりました。その子とは違う高校に通うようになってからも、山行きで付き合っていました。ところが、いじめの首謀者はかえって孤独になって僕との付き合いを求めてきました。

僕は断らずに付き合うことにしました。それからと言うもの家に呼ばれては南アルプスの白峰

三山(北岳・間ノ岳・農鳥岳)に誘って貰きました。僕も大きな山の縦走は行く機会がなかったので、パーティを組んでの山行は二つ返事で参加を決めました。雷鳥と北岳草を観ることが出来ました。嬉かったです。

㊇死に場所を求めて

「おーい 遠藤やってみろ・・・」 僕は今、何故此処に居るのだろう?

自分でもわからない疑問をもちながら、先輩に教えてもらった動作をやってみた。「よーし行くぞ」心の中で上手くやるぞ度胸試しだ と祈っていた。

ザザー 三十度の急斜面を落ちて行く 「ザバ」とピッケルが雪に刺さりアイゼンの足を上げ身体を留めた。初めてにしては上手く出来たグリセード。

雪の斜面に立ち上がり先輩に手を振った。答えて先輩も手を振ってくれた。

五回程練習をした。練習する三十メートル程下には、網を張っている。失敗して落下するのを食い止める役の先輩もいた。安心であった。

総ての先輩部員が終了して山小屋に戻った。

先輩が聞いた。

「遠藤は、初めての雪山か?」「はい」小さくうなずき小声で答えた。

「初めての雪山に一人で来るとは、よっぽど度胸があるか馬鹿だなぁ 何かあるのか?」

「・・・」僕は何も答えられなかった。胸に何かがグサリと突き刺さる気がした。

「何かあるのか?」の先輩のたった一言で、黄泉黄泉(よみ)世界から現実の世界に呼び戻してくれた気がしたのです。

冬山の厳しさも人生の厳しさも歩みは同じ「負けるな 頑張れ 生き抜け」と口には出さずに教えてくれたと僕は暖かい心と命の大切さを感じました。

人と人との【出会い】は人生を左右する最大の転機。そして、夢と希望を与えてくれるものです。僕は命を救われました。

厳冬期の冬山は、ベテランでも二の足踏む厳しいものです。まして高校二年の身体の小さな男が一人で向かう先ではありません。

ビッケルにアイゼンを着けていっちょまいの格好で雪路を夢遊病者のように歩いていました。

そこに大勢のパーティが追い越すように歩いて来たので、礼儀として、一歩横に避けて

「こんちは」 と言いながら通り過ぎるのを待ちました。

そのときパーティの先頭から二人目の人が、「高校生か?」と声をかけてくれました。

僕は、「はい」と答えました。
「一人で良く来たな 中程に入れ」と言ってくれました。
空けてくれたパーティの列の中に入り、僕は、「ありがとうございます。お願い致します。失礼します」と言って歩調を合わせて歩き始めました。
ところが、心は乱れ足下は ガダガタ震え前を歩いている先輩の 踵(かかと) をアイゼンで引っかけては「すいません」と謝ること仕切りでした。
雪山の絶景なる景色など楽しむ余裕など全くありませんでした。ただ黙々と付いて歩くのみでした。
「名前を教えてくれ」と言われましたので 「遠藤」です。と答えました。
「遠藤なら最後尾の一年と同じ名前だ」と言って「仲良くしろ遠藤頑張れ」などと 声を掛けてくれました。
「我々は、M大学のワンダーフォーゲル部の冬季訓練なのだ、高校生の遠藤は何クラブなのだ?」と聞いて来ました。
僕は、話に引きづられて本当のことを、「駿台学園高校のワンダーフォーゲル部のサブリーダー

です」と答えてしまいました。
「よーし、それは奇遇だおもしろい、遠藤も訓練に参加してみろ」
山小屋に到着すると、直ぐに訓練の仕度を整え出掛けました。
訓練は何をするのか何も聞いていません。外は、マイナス三十度 半端な寒さではないのです。
訓練を終えて小屋に戻る時間(とき)には、真っ白な雪山に金色の配色 滅多に観られぬ光景である。
マイナス三十度の厳しさも忘れてしまう。幸いにか、運悪くか、運が善かったのか天気は、上々天晴れだった。複雑な気持ちだったと想います。雪は降らず 吹雪かず ブリザードにも合わず『命』を救われ何と運の良い男であったのであろう。
夕食の仕度は、一年生の役目 勿論僕は自分の分を作った。インスタントラーメンである。
インスタントラーメンが開発販売されたのは確か昭和三十一年だとおもいます。。
僕が山に持っていったインスタントチキンラーメンは、中学生の山登りに利用していましたが、今回は昭和三十九年二月の厳冬期の八ヶ岳赤岳の冬山でした。
室外は、昼間でもマイナス三十度になる標高二千九百メートル付近では、山小屋の夕方から夜の室内でもマイナス二十度から二十五度に低下して動作がとても鈍くなってしまいました。

周りの山男達は、それでも機敏な動作でノルマを達成していきます。それが生き残る唯一の方法だと充分に解っているからです。

僕は、感動と生きている喜びと、人間は苦しくても諦めず精一杯生きることが必要であり一番大切なことだと感じました。

僕はなんて馬鹿なこと卑怯なこと、真正な山で死のうとしたのであろうか？ 未だにその理由が説けないのであります。本当に愚方な小男であった。反省をしています。

それからは、山を愛し、一歩一歩を大切に踏みしめて歩くことに考えが変わりました。

考えを変えたのは、M大学ワンダーフォーゲル部OBの大先輩の温かい優しい思いやりでした。何でもお見通しのOBは、言葉でなく行動で示し悟らせてくれたのです。

僕の夕食は、インスタントラーメンと缶詰のコンビーフと乾燥野菜とドライフルーツです。

その頃の山小屋は、素泊まりだけで、持参の食事だったのです。

僕の食事の問題点は、インスタントラーメンでした。

気温や気圧を全く考えていなかったのです。

石油圧縮ボイラーでお湯を沸かし（気圧が低いので沸騰点が低いことも想定外でした）金属のお椀にラーメンを入れお湯を注ぎ三分間待つのです。明らかに失敗でした。

「しまった！」思わず声が出ました。

食べ始めてからやっと気が付いたのです。どんどん冷えて食べ終わる最後には完全に冷たくなっていたのです。

食事も終わり、後は休息を取るため煎餅布団を敷いて寝袋をザックから取り出し掛け布団を掛けて置きます。

それぞれグープで円座になって話をしています。

僕は、地球に対する月のように、円座の中には入れないよそ者でした。でも話の内容は聞き取れないところもありましたが、おおよそ頷くところがあってたいへん勉強になりました。

「高校生の遠藤」と急に呼ばれビックリしましたが、「はい」と返事をすると、

「今日の訓練 グリセードはどうだった 初めてだったので驚いただろう でもな 冬山には絶対条件で必要なのだ！」僕は、一寸の間・・・答えられませんでした。

(心の奥底では、死ぬつもりで来た冬山なのに、何故か滑落しても死なない方法を教わってしまったのです。運命とは、不思議な出会いであり、不思議だなぁと考えさせられました)

威(い)を決っして答えました。

「本日は大変お世話になりまして有り難うございました グリセードの言葉さえ知らなかった若輩者をご指導戴き本当に感謝しております 自分でも滑落した瞬間に足を上げアイゼンが雪に刺さらないように上げ方を身につけたつもりでおります また同時にピッケルの使い方の動作も知ることが出来ました 皆様にご迷惑お掛けしましたが訓練させて戴きまして感謝しております」と喋りました。

OBの先輩は、「高校の遠藤は他人(ひと)の指導を良く聞いてそれに運動神経や反射が良いので一回の失敗も無かった 一年二年もしっかり頑張るように」と言うお言葉でした。

僕は嬉しくてたまりませんでした。

そんな こんな しているうちに消灯の時間になりました。

先ほど敷いておいた煎餅布団に寝袋を入れ、ダンウジャケットを着たままもぐり込み眠りに付

きました。

睡眠した と言っても寒くて眠れませんでした。多分少しは眠ったかもしれませんが、自身は眠れなかった と思いました。朝起きると頭がぼんやりして重かったのです。

それから、初めての体験で大変だったのが、トイレでした。

山小屋のトイレは、〝木枠て〟作ってあり、前面に少し掴まれる為の立ち上がりがあるだけの縦に深い穴と少し下に横に一本の棒が渡してあるものでした。お尻丸出しで、氷点下の中暫くしゃがんでいるのも辛いものでした。排泄したものも直ぐに氷ってしまいます。

中を覗いて見ると横棒に氷ったものが氷柱となってぶら下がっていました。

「おぉ・・寒ぅ!」思わず悲鳴を発してしまいました。

朝食は、クッキーに残りのコンビーフ 紅茶にドライフルーツ 乾燥野菜の豪華なものでしょう。

明大ワンゲル部は、朝六時に出立しました。

別れの時OBの先輩は、「慎重に歩め 頑張り過ぎるな 命あっての物種だ 気楽に行け」などと僕に優しく声を掛けてくれました。　　そこで別れました。

僕は、一時放心状態になったように動けませんでした。何故僕自身山で死のうと思ったのかまだ答えは見付かりません が、しかし高校時代という時期の誰にも判らない、反抗的な気持ちから

だったと考えました。ぐれて学校に行かなくなりそれでおしまいになることにならずに立ち直ったことに意義があったと解釈しております。

その間、今までの自分が走馬燈のように子供の時から今回の雪山まで振り返ったのです。

“ハッ“と吾に返り現実に戻りました。

『登山は人生そのもの』と知る。

そして三年になり、受験地獄に押しつぶされ気持ちの持って行き所のないまま二月を迎えました。昭和四十一年三月高校卒業

この時には、日本大学農獣医学部の獣医科を受験しましたが、見事不合格となった次第です。

㊐素浪人発奮

充電期間あるいは休息期間と僕も割り切っていましたが、やはり気分は冴えない虚ろ（うつ）な再出発でした。

あんなに好きだった登山も打ち切り、予備校に通って勉強に励みました。 と 言いたいけれど何か吹っ切れない気持ちで日々を送りました。

夏になって高校時代の友達に誘われアルバイトをしました。

派遣社員の会社から夏だけのCoホールのエレベーターボーイです。

その頃Coホールでは、歌手が大勢出演する「百万ドルの饗宴」や「笑点」「ボクシング」「ダンスホール」をやっていて、屋上ではビヤガーデンが盛況でした。

ビヤガーデンの支配人と仲良くなって、ビールを飲みに来ないかと毎晩のように誘われました。アルコールを飲めて、好きな人は誘われるときっと毎日通ったことでしょう。

無料で誘ってくれるので僕も嬉しくて時々行きましたが、飲むより焼き鳥やおつまみを食べることで済ませていました。ご馳走様でした。

「百万ドルの饗宴」では、大勢の歌手出演者や有名な作詞家にお会いしました。

「笑点」では、漫談や漫才の方と会いました。

そんな一時期を過ごし、九月になって本格的に勉強を始めていました。ところが派遣会社から一ヶ月の約束でホテルボーイとして働いて呉れないかとの要請があり、行くことになってしまいました。僕も悩みましたが、世間を知っておくことも重要な社会勉強と思い引き受け働くことにしました。

そこで勉強したことは、接客を如何に手早く正確にやること と 英語力の必要性かと思いました。当日から結婚式披露宴の配膳ボーイでした。

少し教えてもらいましたが、判らないことだらけなのにベテランのような顔して対応しました。
一番難しかったのは、富士山の格好したアイスクリームを一卓七名(本当は八名)に残さず分け配るのと、一人ずつ順番に平等にナイフを使いその場で切り分けスプンとフォークで皿に盛って上げるのです。自分でも賞賛褒めてあげたいです。
それから在る大臣の甥子の結婚披露宴や有名美人歌手の高校の卒業パーティに遭遇し、仕事をしながら歌を聴くことが出来て嬉しかったです。
一番困ったのは、外国人のパーティでカクテルの注文を受けたときです。カクテルの種類や名前すら知らず、英語のスピーキングも判らず困惑したことです。
中華料理の会食では、女性が主に立ち働き男性はあまりやることが無いので、残った中華料理を食べるだけでした。夕食分助かりました。
学校で教えてもらう英語は、文法やらリーデングでやたら解らないことが多くとても実践にそぐわないことに気がつきました。勿論受験勉強には必要不可欠なものです。学校でもスピーキングから教えてもらえれば興味が湧くのではないかと思いました。
一応次ぎの年 昭和四十二年 獣医大学と日本大学農獣医学部の拓殖学科に受験して拓殖学科畜産コースに合格いたしました。

拓殖学科一番の教えは、frontier spirit フロンティア スピリット(開拓者精神)でした。
やはり嬉しかったです。
大学に入学して大動物と接することが一番の望みだったのです。
そして馬術部に入会することも希望でした。
僕は、馬術部に入会すると毎月の会費に備え、高校卒業してから大学入学までアルバイトをすることにしました。今回は、配管工です。
学校や動物園の温室やビルディングの縁の下へ潜り込み配管の取り替えを手伝う仕事でした。
ネジ切りも特別教えてもらいました。
上手に出来ていたのですが、ほんの少し気を抜いたその時器械に指を挟まれてひとさし指の爪横を挟まれ怪我をしてしまいました。ほんの一瞬の出来事だったのですが不覚でした。
アルバイトとは云え責任を持って、泥んこになって働きました。
配管は一本三キロもあると思いましたが、三〜四本を担いで持って現場まで運びねじ切りをして、床下に運び繋ぎ合わせる仕事でした。
配管工のお兄さん達も仲間のように優しく接してくれました。
居酒屋に連れていってご馳走してくれました。配管工のお兄さんは、毎日のように食事を兼ね

て行くそうです。
お店のご主人は、鹿児島出身のようで、芋焼酎を売り物にしていたようです。
僕にもお皿を下に置いたコップ酒で芋焼酎を飲ませてくれました。初めての経験で良く判らないので、コップ一杯飲んでしまいました。二日酔いとはこんな物でしたか？
連日連夜眼が回り吐くやら 下痢するやらで大変でした。もう二度と自爆的飲酒はいたしません。
でもアルコールはけして嫌いではないのです。雰囲気も好きです。
ビールと焼酎は勘弁してもらいますが、高級ウイスキーのすこっち を少しと高級ブランデーのレミーマルタンなどなど。飲みたいです。
中学校時代からの色々なアルバイトは、お金も欲しかったことを否定しませんが、一番の財産となったのは、仕事の段取りや人とのお付き合いを肌で感じたことと、自分が仕事で生活することになった場合世間を知らなくてはやっていけないと思い経験が自分の将来に必ず役に立つと思いました。

第三章 終わり無き戦いの始まり

大学に入学してから馬術部(体育会系)に入部しました。
二年の夏には、馬術部の先輩 同輩 後輩が九州の各地から通っていまして、帰郷するのに合わせ僕も九州旅行にいきました。
小倉競馬場では、先輩が馬に乗っても良いょ と言って競走馬に乗せてくれました。
競馬場なので、乗馬用の鞍が無かったのです。僕も初めて乗った鞍(モンキー)で競馬の騎手のように疾走して走りました。すっごく楽しかったです。
ちょと落馬するのでないかとドキッとする場面も体験しましたが、無事に乗りこなすことができました。
また、阿蘇の草千里でも観光乗馬に乗りましたが、ここでも後輩と一緒に単独で馬を走らせ、池に水を飲ませに行きました。
後輩は高校生の馬術部で乗っていたのでお手の物だったようです。
同時に獣医科の繁殖学講師(後に教授になります)に付きまとい研究室にも足繁く通い教師とも仲良くなって卒業論文の担当になってもらいました。

当時実習で行っていたシャロレー牛(フランスベルリーニ地方原産)の北海道の牧場での実習で、僕にしか出来ない繁殖学実験を課題提供して戴きました。

馬 牛 馬 牛と年がら年中大動物に係りきりの生活で、忙しさと言ったら半端でなく学業が疎かになりました。これはいけないと思い、二年生の時成績表を持参して学生指導課に相談しました。すると・・・よっぽど勉強しないと真ともに卒業が出来ないと、太い釘を一本刺されてしまいました。

㊀左膝関節打撲

大学時代二年の春、北海道駒ヶ岳山麓で牧場実習をやっている時のことです。

丸太を刳(く)り貫(ぬ)いた約八十キロの重い「飼い場桶」の位置を変えようと、二人で両端を掴(つか)み降り積もった雪の中を運んでいました。 しかし僕は柔らかい雪に足を沈めてバランスを失い、重たい約八十キロの「飼い場桶」を左膝に落としてしまいました。そのときの衝撃は忘れられません、激痛があって暫く動けませんでした。やっとのことで立ち上がったのです。

膝が曲がらず伸びたままで歩くことになりましたが、実習は頑張って続けました。

当日の実習で運動のため外に出ていた犬ころのように走り回る可愛い仔牛を牛舎に入れるため

追いかけていると、激痛が走って大変な思いを致しました。

しかし今考えると、知らなかったせいもありましょうが、牧場には長老がかならず居ります、その長老と親しくなっていたので、一緒にお風呂に入ったことが後の後遺症として現れたのかと推測しました。

若(わか)かったのでしょうか一ヶ月間牧畜の作業や乗馬にて放牧場の棚の点検や昼夜を問わずの仔牛の出産の手伝いや仔牛への乳やり(皆近づいて乳をねだり、はたまた僕の親指も啜るのです可愛くてたまりません) 母牛の乳房炎の治療 母牛の死牛の解体 トラクターの運転作業等忙しい日々でしたが辛抱して頑張り通しました。

函館の病院へは、二回程行ったと思います。でもそのときは医学の知識が無かったので、レントゲンを撮って貰ったのか定かでは有りません。

今思うと、その日の夜にお風呂に入ったことが悪かったと思います。もしかしたら半月板もしくは十字靭帯を損傷していたことも充分考えられます。

大学の新学期が始まりましたが、三ヶ月程膝の曲がらない伸びたままの足で過ごしたのです。

この左膝も後々に切断に至る序章の後遺症として現れることになるのです。

㈡両眼白内障

㋐左白内障手術

突如としてこの身に降りかかった災難であった。

大学三年生が始まり専門課程になってようやく勉強の意欲が出て来た頃でした。大学方面へ行くバスの行き先表示が見えなくなり、運転手や待っている人に聞いてバスに乗る有様で、小さな字も見づらくなっていたことは感じていました。でも、それ程では無いと多寡(たか)を括(くく)っていたのです。母は、慌(あわ)てて大学病院(何処の病院か判らないのですが)に僕を連れて行ってくれました。

その頃は運悪く大学紛争でほとんど閉鎖されていました。

でも母は諦(あきら)めなかったのです。医師に会って診てもらうことになりました。

とても好感の持てる医師でした。

白内障との診断でしたが、「手術の時期が最も大切で、左眼はその時期が近づいています。

ただし、右眼はまだ手術ではありません」とのお言葉と「入院業務の再開の見通しが起(た)ちません」のお言葉に、母共に不安が断ち切れませんでした。母は知り合いという知り合いから情報を得て(現在の様にメディアが未発達の時代でしたから)やっとのことで、TK病院の眼科部長のY医師にお願い致しました。

それが悪夢の始まりです。

その年の十二月、ひと通りの入院検査を終えて「異常なし」の太鼓判を押されました。そして左眼の手術を受けました。

手術は勿論初めてだったので、やはり凄く恐怖がありました。

手術台に仰向けになり、眼の近くに局部麻酔を行いました。手術中は「眼を開いたままにしておくように」と指示されました。眼球(角膜)にメスが入り一瞬に見え無くなった気がしました。その後の事は覚えておりません。手術は成功致しました。

病室では、両耳の横に砂嚢(さのう)が置かれていました。

顔を動かしてはいけないと言われ三日間寝たまま過ごしました。

母が病院に寝泊まりして、食事からトイレまでお世話になりました。そのようなある日、ドロドロに白く濁(にご)った尿が出ました。母でも判ったので早速主治医に知らせましたが、それでも検査をしませんでした。でも、そこで一つ疑問に思うことは、若年性の白内障が何故出たのかを、医師が当然疑っても然るべきことかと思われました。つまり、結果のみに重点を置いて原因や経過や既往歴や家族歴を病気の根底を無視していたと思います。

母はY医師を信用していました。僕はそのように導(みちび)いてくれた母を当然の如く信頼しておりました。僕は入院中 年中数え切れない程「溜息」をしていたのです。自分ではよくわからなかったのでしょう。母は「**溜息は命を削る鉋(かんな)哉**」と言って良くないことだから気を付けて「溜息」は自分の気持ちでやらないように止めおくようにと諭してくれました。

㋑右白内障手術実験台

左眼の手術後一ヶ月が過ぎて翌年の一月に右眼の手術をするために入院しました。

通常一ヶ月前に入院手術したとしても新たに検査すべきものと思い、僕は入院して直ぐに、直

接Y医師に、右眼の手術のための検査を依頼しました。しかし検査は行わずそのまま手術することになりました。以前某大学病院で診てもらったとき、右眼は手術の時期が来ていないと告げられ大学紛争のため手術入院ができなくて諦めていました。 不安であった。

手術室に入ると手術台に乗ったが、前回の手術と様子が全く違っていた。もの凄く寒い。小刻みの痙攣のような震えを起こしていた。恐怖を感じていた。

また、それを助長するかのようにセッシやメスを並べる音が響いていた。

局所麻酔なので、オペ室の回りの様子は耳をそば立て無くても総て解っていました。

何が起こったのか・・・ いきなり右眼に、ホースから出る水を掛けて目の玉をグリグリ洗い始めたのである。嘘ではない本当のことである。『痛い 痛い』 僕は悲鳴を上げました。すると・・・

Y医師は眼圧(がんあつ)を測って、「眼圧(がんあつ)が高い」「眼底(がんてい)出血を起こした」と 確かに言いました。僕は確かに聞いたのです。それからは手術中、痛みと恐怖で意識朦朧(もうろう)となって気がついたら寝台の上でした。両耳の脇には砂嚢(さのう)が置かれていて、身体は愚か顔も三日間動かすことを禁じられました。

もっとも、身体は動かすことが出来ない状態でした。
そして退院三日前 処置室に呼ばれ、包帯を取りのぞき、Y医師はどうだ見えるだろう と聞くのです。僕は正直に見えませんと答えると、もの凄く怒って部屋に帰されました。
次の日若い看護婦二人が来て、上腕(じょうわん)に注射をしました。痛いと思った瞬間と共に腕全体が痺(しび)れ麻痺(まひ)して動かなくなりました。(本当の注射を打つ場所は、上腕三角筋内への筋肉注射)
僕が注射を打たれた場所は「手の五里」＝禁鍼穴(上腕神経)だったからです。
そして退院の日にも左腕が麻痺していました。しびれと痛みもあって、動かないこと告げると、薬を処方したのです。帰宅してから薬を飲みました。すると、吐き気や眩暈頭痛や身体のシビレ等が出てきて非常に苦しかったです。今思い当たるには、きっと抗生剤だったかも知れません。母は悔しがっておりました

㊂駄目だ！ 失った眼と救われた眼

㋐右眼球摘出

白内障の手術から六年目のことです。鍼灸院を初めて九ヶ月が過ぎた頃から、右眼が痛くなってきました。僕の鍼灸院に来る患者の合間を見計らって近所の眼科に行っておりました。
そこの眼科の治療内容と云うと、眼を赤外線で暖め軟膏を眼に入れるのです。
信じられますか？痛みは治らず疑いながらも三週間位通(かよ)った頃、ＴＩ大学病院に行ってくれとの事で紹介状をよこしました。早速と治療院を休みＴＩ病院に行きました。
診てくれたのが研修医だったのか、眼圧も的(まと)もに測れ無い人でした。また二日後に行きました。すると同じ研修医が、またしても眼圧を測る操作が的もに出来なかったのです。信じられますか？。二度とこの大学病院で診てもらう気になりませんでした。
兄も高校生の時 事故で大腿骨骨折手術を受けました。その時受けた輸血によってＣ型肝炎を患い四十代の頃より非常に苦しんで六十歳で逝きました。
後々(のちのち)解ったことですが、この大学病院の一人の医師が患者四人を治療していると言いながら殺すはめになったそうです。

痛みが強くなってきました。評判の眼科医院を辿り探りあて、やっとのことで診て貰いました。

医師の診断では、緑内障が悪化して眼球摘出手術が必要との事でした。

「手術は実行するが、入院は他の病院にするか自宅になるか」、との話しでした。診察と診断は納得致しました。手術も自信があると聞きました。しかし入院して医療を受けられないことを聞き躊躇しました。暫く考えました。そして他の病院を探す決心を固め、いちから出発です。

色々な病院を探して歩き、見付けた病院は、K病院です。

K病院のF眼科医師は、丁寧に良く診察してくれました。その結果「非常に悪い状態の緑内障である」と診断されました。「眼球摘出の手術をするしか方法がない」と言われました。

しかし入院日は、「一～二ヶ月後になります。電話で入院日を連絡するので待つようにと言われました。」母は亡くなり一人の生活だったので、とても心細く心配でしたが、どうにか入院も、一人で手続きを済ませました。

寒くなり始めた十月半ば頃でした。自宅には電話が無いので鍼灸院で寝泊まりして連絡を待ちました。

鍼灸院は、患者を受け入れ休まず営業して収入を得ていましたが、まもなくして、夜昼を問わず、間髪入れず、激痛が出てきました。　激痛は、右眼に〝焼き火箸〟を突き刺されて『ギヤー』と言う叫びがつい出てしまう程でした。患者を治療している時もずっとその激痛が出て苦痛でした。しかも患者を治療している時は、『ギヤー』と声を出せ無いので最高の苦痛でした。

それが二ヶ月も続くのかと頭が狂いそうで、入院許可の連絡をひたすら耐えて待っていました。

そして、出来るだけ早期に苦痛の根元である眼球摘出手術を受けたいと心より思っていました。

もちろん、眼が無くなるなんて恐ろしくもあり、複雑な気持ちがたまりませんでした。

耐えに耐え約一ヶ月、もう我慢出来ないと思い始めた師走の十日入院許可の電話がありました。

凄く喜びました・・・眼球が無くなっちゃうなんて・・・恐ろしさも感じていました。

K病院に入院致しました。

手術前の検査(心電図・血液検査)等を済ませ、明日の手術に向けて気持ちを落ち着かせる様に寝台に横たわって眼を閉じていました。　七年前の白内障手術のことを走馬燈の如く思い起こし

たのです、同じ十二月だったことを・・・。
手術は全身麻酔だったので、気が付いたら病室の寝台の上でした。
何か背中や腰が湿っぽく感じたのですが、両眼をガーゼで覆われているのか、様子が良く解りませんでした。隣の寝台の患者の奥様が、点滴が外れていると教えてくれました。
そこで背中や腰が湿っぽいことに合点がゆきましたが、その間看護婦が様子を看(み)にこなかったことに少し不満を覚えました。
手術は成功。眼球があったときには光が少し入るだけで換えって物を見るのに邪魔していたのが、逆に楽に見える気がしました。
しかし眼球摘出した右眼の周りは相当に長い間（五年程）しびれ痛み違和感がありました。
暫くして後(のち)、義眼を入れることになり、窪んだ眼窩が蘇(よみがえ)りました。他人には、気付かれない程度に回復いたしました。有難いことです。義眼を入れてもう三十年以上になります。
最近知ったのですが、十年毎(ごと)に取り替えるそうです。そう言えば目やにが出てそれが乾くと義

眼の瞼が閉じたままになって痛みも出て来ていたのです。それは、今から六年前のつい最近のことです。
ＭＲＩで頭部撮影を行(おこな)った時の事です。ノイズが出て撮影不可能になった事もありました。
ノイズの原因は、義眼の受け皿が金属のため磁気を妨害していたそうです。
僕は今後頭部に障害が起きてもＭＲＩでの撮影診断は不可能になりました。
でもレントゲンやＣＴ検査は可能です。

㋑ 救われた眼 約一ヶ月間のブラジル旅行

両側足底の踵(かかと)に〔魚の目〕があって歩くのにも覚束無(おぼつかな)い状態でしたが、思い切って妻に連れて行ってもらいました。
僕は学生の頃より少なからずブラジルに関心を持っていて、何故か結婚を決意させたのもブラジルの話題がきっかけでした。昭和五十九年七月七日結婚
そして、平成元年一月七日（この日が平成元年で昭和は六十四年一月六日迄の僅か六日でした）

に、日本から遙(はるか) 彼方 地球の裏側からしかも南半球ブラジルからのお客様(親戚)が、半年間我が家に滞在していました。

僕はブラジル旅行を決心したのです。

ブラジル旅行の食べ物、気候、風土、建物、交通、景色、自然・等色々お聞きしていました。

そして三年目の十二月二十七日 妻に連れて行って貰いました。

成田を夜七時出発の予定でジェット機に乗り込み待っていましたが、なんと二時間遅れの九時出発になってしまいました。珍しく大雪の為に滑走路が使えなくなり、除雪(じょせつ)していたそうです。

夕食は、八時頃に機内食で摂れると思い食べなかったので、もの凄くお腹が空(す)いて我慢していたのです。ようやく機内食がでたのは夜十時になりました。

でもサンパウロに到着する二十四時間の間に五回の食事はとても食べられませんでした。勘弁して欲しかったです。せめて三回に減らし内容を充実にしてもらうことに賛成でーすよ。

サンパウロに一泊し、ロンドリーナ空港に着きました。そこには叔父さん叔母さん 従姉妹の大

勢のブラジルの人々が歓迎してくれました。到着すると直ぐにブラジル料理「シュラスコ」に案内してもらい初めての経験です。

店内の中央には野菜を始め果物や色取り取りの総菜が並べてあり、珍しいものでは「パルミット=ココナツヤシの新芽」「ベテハーバ(ビーツ)=赤蕪の酢漬け」

「フェジャーダ=フェジョンまめ(日本のうずらまめ似)と肉を三日間煮たもの」をカレーライス風に御飯(本当はインディカ米)にかけて食べます。好き好きで小バナナやマンジョカ(毒抜き)の粉をかけて食べます。

それぞれ好きな物を皿に取り寄せ、席に着き食べ始めると一本の長い太い鉄棒にこれでもかと肉の固まりを付けた「エスペニート」を持ち歩くウエイターが近づいてきます。エスペニートには、色々な種類の肉やソーセージ チーズ焼きやパイナップル焼きやシナモンを付けた焼きパイナップルを好きなだけ食べることが出来ます。妻の大勢の親戚と大いに日本語で語らいました。

ところで、忘れておりました肝心の右眼の事をお話し致します。

ブラジルパラナ州 州都クリチーバの郊外に、それはそれは大きな自然動物園が有ります。

入場無料なので大勢の人々が楽しみに訪れます。

それでも目当てにしていた目的の動物(カピバラ=水豚=ねずみ)は、自然の中でゆっくりと観

ることが出来ます。

太陽が燦々と輝く大地では、僕のように白内障で水晶体が欠落している人は、サングラス(UVカット)を掛けないと網膜を損傷してしまいます。

それで僕は、サングラスをかけていました。

しかしブラジルの治安が悪下している為、特に日本人が狙われやすいと言われて僕は、サングラスを外してビデオ撮影していたのです。直接光線が眼に入った事を感じていたのですが、その夜は眼が疲れただけと思っていました。

本当は辛かったので、パラナグアへの旅行を一日遅らせました。

「パラナグア」は、クリチーバの駅から鉄道に乗って山を越えて行く大西洋の港町 バナナの主要生産地でもあります。 ここではポルトガルの町並みを髣髴させる雰囲気があり、景色がとても良かったです。

ポルトガル風ブラジル料理(フェジョン豆を煮込み、御飯に掛けてカレーライスのようにして食

べる料理)(豆の替わりに牛肉を使ったもの、マンジョカとバナナを入れたりします。実は日本に帰ってから自ら作ってみました。三日間煮込むことしか教えてもらいません、でも美味しくそっくりに出来ました)を食べました。

帰り路は妻の従兄弟の自家用車だったので見物しつつクリチーバに戻りました。

途中砂糖黍畑で絞り起てジュースを飲みました。ものすごく甘いかな?と思っていたのですが、仄かに甘くサッパリとした味でした。初体験の黍ジュースでした。

続いて旅行したのが次ぎに書いた所です。

巨石奇石群の「ビラベーラ」その側にあった巨大縦穴洞窟 直径百メートル・縦三十メートル(エレベーターで降りてゆく)を体験しました。

瀑布と虹の幻想美が二kmも続く「イグアスの滝」無数の滝には、虹また虹の花が咲きみだれ幻想の世界にタイムスリップしたようです。

滝壺の近くまで行く船に乗るはずだったのですが大人気のため乗れませんでした。とても残念でした。

しかし気を取り直してアルゼンチン側に行って裏側の「イグアスの滝」を眺めました。
アルゼンチンでは近くの町に行き入手出来るとは考えてもいなかった「カピパラの手袋を買うことが出来ました。何と運の良いことでしょう。
リオデジャネイロに小さな島の小高い山があります。ロープウェーでいきます。
「ボンジ・アスーカ」「コルコバードの丘」海抜七百十メートル絶壁の頂きにあるキリストの像。雄大でした。
「コパカパーナ」の海岸 ここでは椰子の実ジュースを飲む初体験しました。　石を砕いて敷き填めた幾何学模様の歩道と広々とした砂浜 砂浜には泳ぐ人 パラソルで顔を隠し日光浴をする人 ビーチバレーをする人がおりました。
正月には、親戚中の人が集まり新年を祝います。お肉や魚 野菜の総菜などテーブル全面に乗り切らない程のご馳走が並びます。ここでジュースを渡され飲み始めました。知らないとは云え廻し飲みする「カイピリーニャ」というカクテル(砂糖黍の焼酎=ピンガをライムと砂糖とレモンでシェイクする)でした。
クリチーバ・ロンドリーナ・アプカラナに 滞在して、親戚を廻り、日本には一ヶ月後に戻りました。　素晴らしい国ブラジルでした。

日本に帰ったその時、見える筈(はず)の左眼が霞んで光が入る程度の視力になってしまい盲目同然となってしまいました。
直ぐにK病院F医師に診てもらいました。
診察の結果、初めて診る症例で、視力はあまり戻らないだろうと言われました。
網膜に火傷(やけど)の後の水疱(すいほう)があって吸収不可能との診断でした。がっかりして、諦めかけましたが諦めませんでした。そこで僕は、思い切って漢方の猪苓湯(ちょれいとう)を処方して貰いました。そして自分独自(医師には知らせず)にブラジル産のプロポリスを一回二十滴と猪苓湯と共に一日三回飲用していました。二週目ごとに診て戴き三ヶ月が発ちました。
医師は驚き、「水疱(すいほう)が消えている」と申しておりビックリしておりました。
「やったぁー」　自分の処方で、これほどみごとに治癒するとは驚きでした。
眼科の診断結果は、次の通りです。

診断　右眼球癆（今の医学では元に戻せない状態　無眼球）

左人工的無水晶体眼（白内障手術でレンズを除去した状態）

続発緑内障

付記

平成十六年十一月二十五日拝見した結果、視力右光覚なし、左　裸眼0.01（矯正1.0）。眼圧は左20mmHg（正常値21mmHg以下で緑内障が進行しないと想定される眼圧は、14mmHg以下）高いと緑内障が進行しやすくなる。古い手術後であり散瞳不良でありますが、眼底は網膜血管動脈硬化の程度は軽度であり（SIHI KWI）．視神経乳頭の所見は、C/D比0.8（全体の八割以上の視神経乳頭が陥凹している＝傷害されている）でした。長期的に診ると左眼点眼内容を調整する必要があると考えます。

コールドマン視野については、平成十四年時と今回で左上方の視野障害（緑内障による）を認めますが、明らかな進行は認めないようです。ただし緑内障の悪化因子として、眼圧と加齢があり、治療できるのは前者ですので、先に述べたとおり、もう少し眼圧を下げる（薬を追加変更する）必要があるかもしれません。まず通院できる病院で二ヶ月毎程度の定期受診が必要です。将来は視野が少しずつ悪化する可能性は否定できませんが、眼圧が目標値以下に安定していれば、現在の

視機能は維持できると思います。との事です。

使用していた点眼薬は、

左眼に、サンピロ二％五ml一日四回点眼　効能；眼圧を下げる緑内障治療薬

右眼に、クラビット点眼薬　全二十ml一日四回点眼　効能；菌を殺し感染治療する。

平成十六年　当時

現在使用している点眼薬は、

両眼に、ヒヤレイン〇、一％五mlドライアイ改善

左眼に、サンピロ二％五ml一日四回点眼　効能；眼圧を下げる緑内障治療薬

右眼に、クラビット点眼薬　全二十ml一日四回点眼　効能；菌を殺し感染治療する。

平成二十年　現在

㊃鎖骨骨折

大学時代体育会系馬術部に属していました。馬場は神奈川県の六会にありました。小田急電鉄の六会で現在は日大六会前に名称が変わっているそうです。

農獣医学部（現　生物資源化学部）が序々に世田谷区上馬から転移を始めた頃六会校舎と農園実習

が行われる時上馬校舎に行かず六会に行っておりました。
六会校舎での授業や農園実習が終わった後には、江ノ島に友達何人かで行く機会がありました。
序々に六会校舎での授業が多くなるにつれ東京の自宅から通うのが大変になりました。そこで思い切って馬術部の合宿所に入所することになりました。
合宿所に入所すると十三頭の馬と何名かの先輩同輩の食事の世話を二年生まで行います。
僕の場合まったく苦になりません、むしろ嬉しい位でした。何故なら食事は得意ですし、馬がいつも側にいて世話を出来たからです。
時々彼女(高校時代の彼女と別)に電話して僕の様子や彼女の様子を確かめ合っていました。
合宿生活は、満ち足りていました。青草刈りに行ったり、馬術クラブの世話や馬の運動のための乗馬、馬事公苑の大会には、障害の設置やまた騎馬警察の馬房の掃除と運動のための乗馬そして、Mプロダクションの映画「**風林火山**」撮影に馬を連れて行ったりしました。
そんなある日の日曜日 馬場での練習中、やっと先頭を任され軽早足で走行中、大きな音に驚いた僕の乗っている馬が立ち上がり、僕は振り落とされてしまいました。
先輩から「たとえ落馬しても手綱を離すな」 と言われていました。

しかし僕は、手綱を離してしまいました「仕舞った」と思い咄嗟(とっさ)に手綱(たづな)を取りに行きましたが後の祭り、馬が回り込み後ろ足で蹴ったのです。
左腕の肘をまともに蹴られ、その弾みで左鎖骨にも衝撃が走った気がしました。
先輩・同輩・後輩が皆駆け寄って心配してくれました。
同輩の獣医科の友達は直ぐに「鎖骨が骨折している」と判断してくれました。
そのとき気が抜けていく不安な気持ちに駆(か)られました。
馬場の近所の病院に行きましたが、「骨折していない」などと言い、日曜日だったのか、レントゲンも撮らずに追い返されてしまったのです。
この時ほど”藪(やぶ)医者め“と思ったことはありません。
そして東京のN大学S病院に先輩が連れて行ってくれました。
しかしその日は、日曜日だったので入院が出来なかったのです。
仕方なくN接骨院に行きました。N接骨院では、鎖骨骨折に対して包帯を巻いてくれました。

次の日、N大学S病院に入院、研修医は、包帯の巻き方を解き研究しながら包帯交換をしてくれました。レントゲンも撮りました。

左鎖骨は複雑骨折だったので、手術は全身麻酔でやり、手術後は石膏で固定して五十日の入院でした。

入院中には、彼女のお見舞いが数回ありました。また杉並の自宅にも退院後お見舞いに来てくれて ずっとずっと 付き合いが出来るものと信じて疑いませんでした。

後の彼女とのお付き合いは、・・・

全身麻酔は全く初めての経験で、麻酔が醒(さ)めて暫く喉が痛かったのでお聞きすると、酸素と麻酔を注入する管の影響で痛くなったと聞かされました。

左肘はどうしたかと云(い)うとレントゲンを始め何の検査も行(おこな)わずそのままとなってしまいました。

後々の十三年経った六月頃、左肘が痛み膿(うみ)を持って潰瘍を起こしました。その年はどうにか乗り越えましたが、次の年の六月になってまた前年と同じ左肘が痛み膿を持ち潰瘍を起こしました。

数ケ所の整形外科や形成外科で診てもらいましたが埒(らち)が明(あ)かなかったのですが、T病院で診て貰ったときには、傷口の穴の中をセッシで探り、米粒大程の白い異物のような物を二つ見付けました。

僕は直感で、馬に蹴(け)られた時に欠(か)けた骨と思い医師に聞いたら、「そうでは無い」と言われました。

しかし一週間後、診てもらうと、「肘関節の欠けた骨だった」とのお言葉でした。ところが、膿が出たその穴は塞がりませんでした。仕方なく自分で患部を治療しました。

【糸状灸(しじょうきゅう) 半米粒大の灸(はんべいりゅうだい)を傷口の穴の中に二ヶ所・周りに五ヶ所各七壮ずつ一日二回三日間据え】完治させました。

更に左肘の悲劇は十二年後に続きます。

㊄馬の想い出

大学時代の馬との思い出は、Mプロダクションに大道具の馬係で制作スタッフに雇われ思うが

儘に四頭の馬を世話したことです。
相馬馬追に使っていた馬のようです、ＴＭさんからお聞きしました。
最初は触るにも汚（きたな）い汚（よご）れた馬だったので、掃除のブラシや蹄鉄の掃除のかぎ爪を買い求め馬全体水洗いしてホコリを取り除いておりました。
そんな様子を見ていたＭさんの奥様が皮の長靴（ちょうか）がビッショリ濡れているのを哀れに思ったのでしょうゴム長靴（ながぐつ）を買って下さいました。超嬉かょ（九州弁）
そしてその後スタッフと共にＭさんの自宅に呼んで戴きました。奥様手作りの中華料理に舌鼓を打ち、隣にはＴＭさんがいて、お酒を酌み交わし夢のような嬉しい日がありました。
御殿場ロケで僕は馬を一頭連れて撮影に行っているとき事件が起こったのです。
トラックに乗せておいたもう一頭が、寂しがって前足で音を発てていたのをうるさいと棒で叩こうと運転手がしたそうです。（これは他人から聞いた話なので真実は明白ではありません）馬が

立ち上がり下りた時に間羨望（ませんぼう）に左眼をぶつけて負傷しました。
ロケが終わる頃に雨が降り出し、馬が心配でトラックの後ろにいる馬を宥（なだ）めながら、自分もびしょぬれになって戻りました。
早速、先輩の獣医さんに来てもらい手当をしてもらいました。
先輩獣医さんは、夜を徹して引き馬を続けないと、馬は死ぬかも知れないと告げられました。
僕は自分のことはさておき兎に角引き馬を朝まで続けました。
その快あってか次の日に来てくれた先輩獣医さんは、僕をみて一回り逞しく成長したな と褒めてくれました。
そしてまたまた奥様の手作り弁当を僕のために料理して戴きしかも、ＴＭさんが自ら持って来てくれました。
そして正月元旦に長男である息子さんが馬房まで迎えに来てくれて、奥様手作りの元旦のお節料理を一緒に食べようと誘って下さいました。またまた夢のようで頬を抓（つね）り確かめたぐらいです。

嬉しくて嬉しくて人と人との出会いと交際が何と素晴らしいものかと知らされた期間でした。Mプロに居るときは、ロケに馬を連れていく仕事が主でしたが、映画やテレビでの馬に乗るスタントマンもやることになりました。

T制作の短編小説の映画化「地獄変」の時僕が、盗賊の一味に扮して馬に乗りお面を頭（かぶり）砂ホコリの中、刀を振り回し疾走るシーンでした。

僕は白馬に乗っていたので、判りやすく割と写っていました。

それとテレビでは、「五人の野武士」の女優さんが　“九の一”役で馬に乗るシーンがありまして、僕が鬘をかぶり女装して馬を疾走させることになりました。

世界のTMさんとの思い出は他に沢山あります。

Mさんが長靴を作る時一緒に作ることを進められて作りましたが、Mさんがお金を出してプレゼントしてくれました。このことは、他の人には経験出来ない僕にとっては一生涯忘れられない思い出になって皆んなに自慢出来る生活でした。

㈥鍼灸専門学校

昭和四十七年三月　日本大学農獣医学部を卒業しました。

かねてより独立採算性の筑波に新開設する牧場に分場長として就職が内定していました。しかし、母に内緒と言うわけではないにせよ事を進めるに当たり相談をしていなかったのです。

母に反対されました。母が申すには、学生時代両眼白内障になって手術をして一年休学したことが後々どの様に影響するか心配だったのでしょう。でも好きな道は、徹底的に好きな行動をさせてくれました。

今回は、一人の技術で生きていけるかどうかの一大決心です。受験日は刻一刻と近づいておりました。自問自答し僕も悩みました。

母は自分の寿命も長くないことを察していたのかも知れません。博之が一人前になって生きて行くことを考えての僕への最後の愛の指針であり、忠告だったと思われました。

目標や夢を描いていた動物や自然との生活から一転して、人物と都会の生活になることに、専門学校に通いながらも不満(牧場での生活が出来ない)の日々でした。

学校近くのアパートに引っ越しするときも、母は大変な身体の不具合を押してでも僕のために尽くして下さいました。感謝感激雨霰の気持ちです。

時が過ぎると共に、鍼灸師になることを意識し始めました。成績は、上の中ぐらいでした。

昭和四十九年に 按摩マッサージ指圧師の国家資格を取得 昭和五十年に鍼灸師国家資格を取得

資格を取得しても直ぐに患者の治療はとても難しくて病院勤務も先生に紹介してもらいましたが、行う治療(自分で考えて治す治療が出来ない)と給料の面で諦めました。

こうなったら鍼灸院を立ち上げるしか無いと結論づけました。それからと言うもの母は亡くなり一人で治療の勉強(臨床)は歯を食いしばって頑張りました。

昭和五十一年一月八日 鍼灸院の院長として出発しました。

鍼灸は、全科総合病院に資的するもので、何もかも一人で行うものです。このとき役にたったのが、中学の時より行って来たアルバイトの色々な経験でした。

専門学校時代貯め込んだお金を自分の勉強のために惜しげもなく使いました。

専門学校時代にも、文化祭があって一年の時は甘味処の喫茶店をやりました。

「ぜんざい」など甘味は生の小豆から仕込み総て手作りで出しました。

二年 三年は、二十五分の限られた時間の内で演じる演劇を作演出 演技指導で行いました。演劇の題名や内容は控えさせてもらいます。

高校時代の演劇部と大学時代のMプロのアルバイトが非常に役に立ちました。

㊐鍼灸の底力

此処に書いた鍼灸治療は、総て自分に対し自分で施したもののみで確実に成果を上げ実質的なものです。ただこれは局所治療(対症療法)に過ぎず、患者には望・聞・問・切・虚・実 を把握して「気」による補・寫を施す随証療法による全身治療を常とする内科治療です。

㋐右足首捻挫

槍温泉への登山を三日後に控えた夕方のことです。筋力運動のつもりでバーベルを持って階段の上り下りをしていたとき、最後の段を踏み外して足首をひねって捻挫をしてしまいました。

「仕舞った」と思いましたが後の祭りです、足を突いて歩くのもおぼつかないことになりました。約束した山に行けるかどうか心配でした。

でも、奮起一転。

自分の過失は自分の手で治すことにしました。まずは、自発痛 運動痛 圧痛を調べる。

【自発痛(複数)と運動痛(複数)圧痛(複数)に、寸三の鍼管(しんかん)と寸三のステンレス鍼を使い一発で弾入(だんにゅう)し、切皮程度で置鍼(ちしん)する (複数)。

続いて、切皮程度に置鍼した鍼を一本ずつ深く刺し入れ、響きがでたら止め置く。鍼を抜き、次に、鍼を打ったその場所(穴)に、半米粒大糸状灸を三壮ずつ据える。
治療のあと患部を氷で冷やし、治療は一日一回　2日で治しました。】
無事に何事も無く登山して来ました。紅葉の山は美しく何事にも代え難い経験です。
日本一高い所に位置する露天風呂にもゆったりと浸かり、登山の疲れを癒しました。
本日で今期最後の山小屋の朝に壮大な景色を眺めました。　［**閉山尾　暁雲海　茜色**］

㋑膝関節　またやってしまった

高円寺で鍼灸院を開設している時に、夜遅くなって暗がりの帰り道で、何かに引っかけて自転車ごとヒックリ返りました。
左膝を強打（十四年前と同じ患部）して、やはり暫く動けませんでした。
周りを見渡すと、オートバイが道幅半分を覆い、さらにバックミラーが突き出していました。
正にそのバックミラーにぶつかり倒れたのでしょう。
やっとのことで起きあがり、自転車に乗りました。

激しい痛みの左膝を庇いながら自転車を走らせて、雨の降る中やっとのことで倒れ込むように自宅に辿り着きました。
疲労困憊していましたが直ぐに、鍼灸（捻挫と同一治療）を自ら施し氷で冷やしながら寝たのです。ところが寝ることは愚か酷い寒気と全身に痙攣が出て来ました。牙関緊急は初めての経験でした。

㋒タクシーに追突

また翌年に、某タクシーに追突されてボンネットに打ち上げられてそして横に落ちその時も暫く身体が硬直して動けませんでした。
左膝と頭を軽く打っていたのです。すぐに救急車で病院に行きました。
直ぐに頭部レントゲンを撮りましたが、医師は遠くで話しを聞くだけで、けして僕を触りもしません。診察もしません。塗り薬と貼り薬だけをよこしました。

二年後には膝への疲労の蓄積で後遺症を起こし、血が滲み出るように真っ赤に腫れ上がり激痛でした。

早速 自分で鍼灸(前述した捻挫＝打撲と同一)治療と氷で冷やす方法を施しました。鍼灸治療の仕事は休まず頑張り通しました。

この時は、膝を氷で冷やしながら患者に応対していたので、治癒を遅らせたのか、三日間掛かって治癒させました。

㋓膝関節打撲二度あることは三度ある

左膝打撲は数え切れない程あって恥ずかしいのですが、覚えている限り列記したいと思います。

高円寺でのことです。鍼灸院で治療を終えて帰る途中、ザァ々降りの豪雨の中自転車を走らせておりましたところ、細い露地から急に突風に煽(あお)られ倒れてしまいました。

幸い軽い打撲でしたが、自転車のハンドルがひん曲がり、パンクをしてしまいました。

仕方なく壊れた自転車を引きずり雨の中を帰宅致しました。(この時も同じ打撲治療)治療を施しました。

第四章　母は逝く

僕が鍼灸の専門学校に通(かよ)っている時期です。この時は、一人離れてアパートで暮らしていました。土曜日や日曜日は時々実家の母の元に帰っていました。

母が、勝手口の段差一段を足が上がらず(激痛だったと思います)苦労していたのを僕は目撃したのです。

聞いてみると、整形外科では、坐骨神経痛で痛み止めと湿布薬を渡され、鍼灸院に通(かよ)っていて何時(いつ)も何処(どこ)でも坐骨神経痛と言われて治療していました。僕が診ると、ラセグ徴候は、陰性でした。実は、母は二年前に子宮癌の手術を行(おこな)っていました。

以前僕は医学に無知でしたが、今回は違います。

色々調べた結果では、骨盤の骨髄への転移(骨腫瘍)だった事をハッキリ知ることが出来ました。

医師に聞いた訳ではありません。
母は術後一ヶ月毎二年間、経過を診てもらっていながら医者は、何故転移の予測を怠ったのか、昭和四十九年当時の癌医療(O癌研の医者)はそんな程度の技術だったのでしょうか。
二年前の手術では、初期の一段階なので取り去れば問題は無いと言っていながら後二回も手術している。
そしてコバルト(放射線)を照射している。癌の治療薬も呑んでいた。
何故二年間も様子を診ていたのでしょうか?ただ研究していたとしか思えないです。
抗癌剤やコバルトによる副作用で白血球の減少やあらゆる臓器への悪影響もあったと予測しました。僕は、骨腫瘍(こつしゅよう)と告げられて、愕然(がくぜん)としました。
母は「此の病院は嫌　看護婦も意地悪」と初めて弱音を吐きました。
長女(僕の姉)は意を組みJ医大病院に入院を決めてくれました。
昭和四十八年　年の瀬十二月二十四日の事です。
部屋は中地下の個室で、患者の寝台と三畳の畳部屋がありました。
僕は一週に四日程病院に泊まり込み、母が食べることの出来無い病院食を食べ、母には食べた

い物を作って上たり、五月頃には西瓜が食べたくなったのか、やっと見付けて食べさせることが出来ました。
母の介護に当たりました。
僕にとって最初で最後の親孝行(もっと違った孝行であれば良かった)をしたと思いますが、自己満足だったと思います。
母は、北海道の江別(えべつ)で生まれ十八歳で東京に嫁いだのです。
十九歳で長女を産み、三十歳で四人目の子供である僕、末子の次男を産みました。東京に嫁に来て以来一度も北海道には帰っていません。
僕は鍼灸専門学校に通いながら働いてお金を貯めました。
母を北海道に連れて行きたかったからです。しかし計画し実行の矢先に入院しました。僕は悔やみ残念でたまりませんでした。
僕の二十七歳まで、とことん優しい母でした。何が何でも僕の言うことやること総て受け止めて下さいました。
それでもただ甘やかすだけではなくきちっと方向性をもって、時には厳しく進路を指し示して

くれました。

今日(こんにち)僕がこの様に過ごせてもらっているのも母の御陰です。

僕にとっては愛の深い慈母であります。非常に気丈な人でした。

三月が山と言われたその月に、母の母(僕の祖母)の十三回忌に山梨に行くと言い出し十人程で出かけました。

しかしお寺に行く山道は、往復とも次女の夫(義兄)が背負ってくれました。

有難く思っております無事戻って感謝しています。

そして五月が山、七月が山、と言われ三回の山を越した母の生命力には敬服致しました。

母の優しさ・強さ・人生観総てが大好きでした。

毎日お尻に注射をしていました。

僕はタオルを温めお尻に当て、按摩を施していました。そして看護婦さんに注射をして貰う様に頼みに行っていました。

後に婦長から褒められ有難かったと言われました。お尻でも一部分しか注射出来ないので、他の人は、打つところに困っていたそうですが、母は大丈夫で良かったです。

ところが一度だけこんな事がありました。

そして母は、酸素吸入を始めました。ふと吸入器を見ると、水が無くなっていたので看護婦に告げると、食事を食べていたのか、口一杯に物を頬張りむしゃむしゃとしながら病室に入ると、水道水を入れ立ち去りました。

間もなく母は、「臭い臭(くさくさ)い」と訴えたのです。

僕は直ぐに気が付いて看護婦に知らせました。

それでもなお看護婦は不服そうにしてやっと、蒸留水に取り替えました。

いよいよ母は、モルヒネを点滴することになってしまいました。

どんなにか激しい痛みにも耐えに耐えていたのだと思います。

しなくても良い我慢をしていたと考えました。

しかしこんな事もありました。

僕は母の手を握り感傷的になって少し涙ぐんだ時に母は「何だ女々(なんめめ)しい」と怒りました。

そして、よほど苦しくて痛みが耐えられ無かったのだと推測したのは、母が、紐をおくれ(欲し

い)と言った時です。僕は直ぐに気が付き、でも咄嗟(とっさ)に、何の事だか解らないと惚(とぼ)けましたが、母は自分の首を絞める仕種(しぐさ)をしたのです。僕は涙を堪(こら)えました。

そして一週間後は、義姉と病院に泊まり込む日でした。

夕方病室の畳部屋で夕食を食べようとしていましたが、ふと母を見たとき、僕は眼を疑いました。母の胸が上下に動いていないのに気が付いたのです。義姉に確かめて貰い驚愕(きょうがく)しました。直ぐ看護婦に知らせました。

医師も駆けつけ心臓マッサージを行い、手の平で心臓部を叩き、そして機械のカウンターショックを与えその間五分程でした。

母は、深呼吸をしたのか溜息をしたのか判りませんが息を吹かえしました。でも喜びは一瞬だった気がしました。

医師は心電図を取り付けました。義姉は、母危篤の知らせを関係者に伝えるため一時的に病院を離れ僕一人になりました。

僕はゆっくりと語らい懺悔(ざんげ)しました。そして夜遅く知らせを受けた兄姉が駆けつけました。

母は最後に皆に会いたい為か一夜の大きな山を乗り越えました。

次の日の十時に部長回診で、ぞろぞろと医師や看護婦十三人程の人数が母の部屋に入って来ました。

部長医師は、「まだ三日は大丈夫」と言う話を出入り口で喋っているのを僕は聞きました。

ところが、その日の十一時四十分頃 俄(にわか)に様態が悪くなりました。

そして五分後 昭和四十九年九月六日 天国に召されました。

僕は、涙も・・・声も・・・出ませんでした。

僕は、母が此の世から居なくなる事すら信じられませんでした。

しかも僕の前から居なくなんて、喋ったり、喜び合って共に観て聞いて楽しく笑い合う事が出来なくなったのです。

僕は、暫くの間放心状態になったのか食欲が無くなり相当に痩せて「骨皮筋衛門(ほねかわすじえもん)」になりまし

た。

涙が湧き出て暫く止まらなかったのは、三日後のお通夜の十二時過ぎでした。

お通夜はお線香を絶やさず上げるので、例に従い母の前に畏(かしこ)まり母に話かけました。その瞬間悲しくて、遣(や)る瀬(せな)無くて、涙が込み上げてどっと流れて暫く止まりませんでした。

［ **生きるとも　母の分をも　逞(たくま)しく　懐かし想う　仲秋の月** ］

僕自身が母が逝った五十七歳五ヶ月六日を過ぎても『生かされ』、兄が逝った六十歳を過ぎても『生かされ』ております。

やはり、僕にはこの文章を書く使命が『生かされている』理由(わけ)が何となく解りました。

母を語ることそれが母への一番の供養であり、母が癌を患い悔しい思いで逝ったそれと同じ病の癌を患う僕も手術を断念して、母の居る花薗への近道を選びました。

第五章　病因の発見

㊀　声を失う

鍼灸院を始めて三年目の夏頃、どうも声が出なくなってきたのを薄々自分でも感じておりました。

でも、仕事の疲れとか友達と鍼灸の勉強会の後食事を食べアルコールを飲んで(僕はほんの少し)夜遅くまで治療法の討議を大いに交わして(声が掠(かす)れ出なくなっていた、眼も霞(かすみ)見えづらくなっていた)疲れたと帰宅していたが、その様なことが数回ありました。

某大学病院の耳鼻科に紹介して戴き診てもらいましたが、埒(らち)があかず、色々な病院で診て貰いそしてT病院の耳鼻咽喉科で診て貰いました。

医師は直ぐに『声帯麻痺』と診断したのです。

その時声は殆ど出ませんでした。

麻痺して痩せた声帯にシリコンを注入する手術を受けました。一回目のこの手術は、全身麻酔で

手術療養し約一週間の入院をしました。　そして医師は替わらないのですがＳＫ病院に転院して三回手術をしました。全部で四回手術を受けました。

ＳＴリハビリも受け少しずつ声が出る様になって来ました。

㈡ やっと判った病因

その間Ｔ病院の泌尿器科で診て貰うことになり、検査入院をすることになりました。

どんな検査をするか聞かされておりませんでした。取り敢えず肝臓が悪いと言うことにして入院しました。その頃その時も家族や知り合いも付いては来ませんので、総て自分で行動致しましたが、その頃から両足の踵（かかと）に魚の目が発症し始め、歩くのに辛くなっていました。

さて入院中は、血液検査やレントゲン検査数ヶ所を数回やりました、

それからとても恥ずかしかったのは、丸裸になって写真撮影をされたことでした。

そして睾丸（こうがん）の生検（バイオプシー）をやりました。あんな痛くて恐ろしい検査（手術と同じ）はもうご免被（めんこうむ）りたいです。

しかし二十日間も入院検査をしていながら、退院する日にやっとのことで研修医から『ウェルナー症候群』と打ち明けられたのです。検査結果のデーターは、貰っていません。

僕は始め何の事を言われたのかはっきりと解りませんでした。

退院して自宅に帰り、医学大事典の『ウェルナー症候群』の項目を読みました。まさか自分がこの様な病気たったとは残念無念です。

母は既に他界して打ち明ける人もいません。父に打ち明けても性格から否定もするし怒鳴り散らすと思いました。僕は孤独を感じていました。でも絶対に病気に負けたくありません。

退院して 次の日から僕の患者には何もなかった如く接し全身全霊を傾けて鍼灸治療にあたりました。

そんなある日、Ｙ新聞に『ウェルナー症候群』の事を書いた記事が記載されていました。

読むと、遺伝子関係の病気で、五十歳前後で天国に召される『早老症』の事だと解りました。

（ワシントンの老齢研究所　日本人女性研究員）

僕はその事が解って逆に、楽天的に居直りました。

いっそ、五十年の命ならその間に出来るだけ、見たり聞いたり体験したり貪欲に総て何でも吸収して悔いの無い人生を過ごそうと思いました。

そして、思い当たったのが次の事柄、次の心境です。

織田信長が桶狭間において多勢に無勢にも関わらず今川義元を討ち果たす直前、敦盛を舞い謡うのです。

「人生五十年、下天の内をくらぶれば夢まぼろしのごとくなり、

一度生をうけ滅せぬ者のあるべきか　滅せぬ者のあるべきか　」

僕は、映画やテレビで織田信長の桶狭間の合戦前のシーンに何回も深く感銘を受けました。　やれるだけのことはやって　死ぬなら死ぬ　前進あるのみ　と居直って生活するようになったのです。

母も何回かの山を越え『発つ鳥水を濁さず』の　諺（ことわざ）　にあるように、母の母　僕にとってはお祖母さんの十三回忌を入院中にも拘わらず一泊二日で山梨に行ったのです。

気力ですね　僕も母のように生きられるだけ強くしっかりと生きていきたいと願っています。

㊂痛い足を引きずり歩く

㋐　魚（うお）の目（め）が痛む

皮膚科医院に診てもらうと、親切にして戴きましたが、此処では治す事が出来ないので整形外科を紹介致しますから其処へ行って下さいと言われました。

紹介された整形外科医院に予約をして赴き、診て戴くと、当院では手に負えないのでO病院を紹介すると言われました。

早速O病院整形外科に行きまして、W医師に診察をして戴きました。『ウェルナー症候群』である事も正直にお話致しました。

その時医師は、KG大学病院でも患者一人を知っていた　と言い、その人は足の指を部分的に切断手術したが温存療法は実らず等々（とうとう）下肢を切断したとの事でした。

僕は、両足の　踵（かかと）　に出来た「魚の目」が五百円玉大になって歩けなくなっていたので削る処置を施し、歩行時と入浴時に利用する防護具を作ってくれました。

調子良く具合よく一週間に一回通院しておりました。

そして二週間後に近所のお寺にお参りに行きましたが、帰り路に一歩境内から出た途端、台車に鉄材を運んでいた人がよそ見をしながら僕の右下肢の内果にぶつかりました。
僕はぶつかった事を告げたのですが、「何を言っているのか」 と言う顔で、逆に怒った顔して通り過ぎて行きました。僕は傷害を受けました。

勿論痛みがあったのですが、ズボンの裾(すそ)を捲(めく)り靴下を下げて痛い所を見ると、ざっくり切れて出血していました。
傷の手当ては自分でやったのですが、O病院整形外科でも診て戴き処置してもらいました。

病院には足繁く通いましたがなかなか治らず、やっと三ヶ月後には瘡蓋(かさぶた)が形成されました。

㋑大腿四頭筋断裂

平成十一年三月十三日　土曜日だったのですが、O病院に診察に行っての帰り、自宅で昼食のつもりでした。
しかし妻が買い物に行ったのか不在だったので、近所のお寺の縁日を観るのと同時に参拝をするつもりで、寄り道をしないで祖師堂に向かいました。

左右に阿吽(あうん)の仁王様が配されている山門を潜(くぐ)り正面を眺めると、祖師堂の改築も終わり秀麗な姿が現れます。僕は見とれながら僅か三段の階段を踏み外してしまったのです。

瞬間脳裏に「仕舞った」と云う思いが過(よ)ぎりました。踏み外した足が地面に着地した瞬間『ばきーん』と強烈な音がして倒れ込みました。激痛で身動き出来なく一瞬気絶したかも知れません。
気が付くと周りに人がいて、『ばきーん と音が聞こえ倒れた』と露天商の女性がお喋りしているのが微かに聞こえていました。それから救急車を呼んだ事を告げられ痛みに堪え待っていました。十五分或いは二十分だったのでしょうか、僕の感覚では一時間も石畳に横たわっていた気がしました。
縁日で救急車が近づけないとの事で、駐車場に止めて、担架で移送するように来てくれました。
僕はO病院に行ってくれるように頼みましたが、それから救急車の中で受け入れ確認の交信で待つ事十分間、とても苦しかったです。救急車はO病院に十五分で到着しました。
早速　外来処置室に運ばれました。そこにはY主治医おりました。
Y医師は、僕が気に入っていたジーパンズボンをジョキジョキと切り去り膝を丸出しにして、

診て下さりました。
すると、膝を専門としているA医師が主治医になることを告げられました。
レントゲンを撮り病室に入ると「手術承諾書」を渡され、更に現在入院した経過や今までの既往歴・家族歴を聞かれ「手術を受ける方へ」の書類を渡されました。
手術の日程が決まるまでの五日間、内科病棟である心臓病の大勢いる病室に入り過ごしました。が、カーテンが閉じられ暗くて陰険な感じで恐ろしくなっておりました。
そして、手術の前日整形外科病棟に移りました。
そこは六人部屋で左右三人ずつの右の真ん中でしたが明るくてとても嬉しかったのです。
担当看護婦が訪れ「入院診療計画書」を持参すると共に、病歴や要望を聞かれました。
僕は食事に五月蠅(うるさ)い方なので、食べない物や食べられない物、食べてはいけない物を厳格に説明致しました。
そもそも東洋医学では『医食同源』が基本で、病気にならない事も、病気になる事も、病気を治す事も食事の良し悪しに総てのしかかっていると言っても過言ではないのであーる。
食べる物・食べる量・食べる時間(朝昼夕三食)・食べ方(良く噛んで)など。など!

まず僕は、卵・牛乳・魚卵類・練り物(ハム・ウインナーソーセージ・サラミ・蒲鉾・薩摩揚げなど要するに添加物の混入している物)や鶏の皮・油のある肉=さし(赤身肉は喰す)・糖分糖質の制限・塩分の制限(特に塩化ナトリウムは不可)等々を食べないことを入院中も実行したかったのです。
残念ですが病院の九十%以上が落第です。達成出来ない病院が多くあり、良くここまでやってくれて有難いと感謝感激した病院もありました。
その頃、糖尿病予備軍と言われており、自分では、絶対に患いたくない病気の筆頭でした。
自分の患者には治療はもとより食事療法も指導していたのに、我が身が糖尿病になるなんて、ミイラ取りがミイラになった心境でした。
でも僕の病気『ウェルナー症候群=早老症』は、普通の人の倍以上に老化を進める不備な遺伝子を持つとされている。
そしてあらゆる臓器・器官の老化を進行させ身体を崩壊させる恐ろしい病気なのです。どんなに自分が節制しても、無理のようです。
そして我が身を自分の患者と見立てあらゆる方法で臨床実験治療を行(おこな)ってきました。その結果

五十歳を過ぎても生きています。

母の年齢五十七歳五ヶ月と六日を生き抜く所存です。これから先、思うが儘(まま)に生きていくつもりです。妻や僕に関係する人達にとってはさぞかしご迷惑の事と思います。

またその人々に支えられて、生(い)かされている事も重々承知しております。しかし敢(あ)えて我が儘(まま)を通して参ります。ごめんなさい 誤ります許して下さい。

なんと・・・ 話が途中下車で横道に逸れて仕舞いましたので、本題に戻ります。

さて入院して手術日前日です。

抗生物質の適応試験（RBテスト）で陰性か陽性か判定を出す事と、点滴用に留置針を注入する事、麻酔医がベッドサイドにいらして手術前の麻酔についての説明がある事。

手術部位の剃毛と入浴。夕食はふだん通り食べるが、夜八時から九時にかけて浣腸をして九時に入眠しました。

ちなみに僕は剃毛(ていもう)もなし、風呂も入れてもらえず、不清潔不衛生のまま手術になった次第です。

後々(のちのち)知ったのですが、麻酔で眠ると、ごしごし手術部位を洗うそうです。

さて手術当日は、 **［ 恐怖心 隠せぬOPの 時間待ち ］**

朝から点滴が始まり、手術へ行く時もやりながら行きます。手術前一時間になると、術着に着替えT字帯を付けて待ちます。

そして三十分前になると麻酔前投薬として腕の三角筋に筋肉注射をします。

ストレッチャーに乗って手術室に向かいます。手術室前の廊下で入室を待つ時の気持ちは、とても言葉に言い表せません。手術室に入室を呼ばれストレッチャーから手術台に移されました。

マスクを鼻と口に当てて麻酔と酸素を送ります。麻酔医の数える、いち・にい・さーんで僕は気を失いました。

気が付いたら、ベッドの上で酸素マスクをしていて勿論点滴もしていました。

身動きが出来なかったですが、痛みが感じられないのでよかったと 自分も安心していました。

妻も心配していました。

病室に戻り二時間が過ぎた頃左足がむず痒い様な痛い様な、正座した後に痺(しび)れたかの様でもあ

り麻酔が切れて来るのが感じられました。三時間半経過した頃、相当に痛みを感じて来ました。
看護婦を呼んでもらって痛み止めを頼むことにしました。

看護婦は来るには来ましたが、手術後六時間経過しないと痛み止めが使用出来ないとのことでした。

あと二時間半我慢する事になり、夜十時になってしまいます。

妻は痛み止めを打ってもらったことを確認してから帰ると言って帰りませんでした。

三月半ば過ぎても夜中の冷え込みは大変なことで、風邪を引いて具合が悪くならないようにと願うばかりですが、僕は願いながらも少しでも側にいてほしいと 甘えた気持ちがあったのは確かです。

手術一週間後、ＣＰＭ(持続受(他)動運動(訓練)=連続受(他)動運動)を始めました。

初日は膝屈曲四十度だったので、らくちん と思っていました。

二日目域なり六十度になり、ちょっと辛かったです。三日目になると七十度になって耐えられなくなりました。

看護婦に告げると、指持表に書いてあるから、それに従っただけだと望みを聞いてくれません。

あまりにつっけんどうで融通が聞かないので、喧嘩になってしまいました。

そして十日で百二十度屈曲させなければいけない と 言うのです。

僕は後七日で達成する計画を作成しました。作成した以上は実行しなければ男が廃ります。

そして、「やったぁ」 計画は達成されました。しかし僕は骨折でない、しかも人工靭帯なのに？と疑問を持ちました。

手術後三週間経過しました。普通は二週間で「抜糸」なのですが、僕は筋肉の盛り上がりが悪く一週間様子を見たのです。

そして「抜糸」とドレーン（血抜きするパイプ）を抜きました。

けれど一週間経っても傷口が塞がりません。Ａ医師はもう一度傷口を縫う処置を決断してくれ

ました。局部麻酔をして七針縫いました。
そしてリハビリを始めて一週間経った頃、歯の金冠が外れて噛み会わせが悪くなり、食事を良く噛んで食べる事が、ずさんになって痛みも出てきました。
これではいけないと思い日曜日に自宅近所の歯医者に行きたいので外出許可を貰うことに致しました。
ただし、一週間で全体重を掛けられる松葉杖の使い方を習得しなさいとの事で僕は頑張り、一週間目に歯医者に行く事が出来ました。
また二週間が経ちA医師と婦長がいらして何やら話し始めました。
最初意味が通じなくて二度聞きしました。どうやら内科病棟に移ってほしい との事でした。
僕は自然に涙が出て泣いてしまいました。入院して六日ほど居た暗い病棟を思い出したからです。でも宥(なだ)め空かされ、入院当初と違う病室だと言い聞かされひとまず安心ました。
内科病棟では呑み薬による糖尿病治療が始まりました。
食事療法やそれなりの運動療法(リハビリは実施)はやりませんでした。

二週間が経過していよいよ退院になりました。二ヶ月半が経過しました。
当日髭を剃り、顔を洗って頭髪を整えて病室に戻ろうとすると部屋の前で主治医のA医師が待っていました。
僕は心ならずも松葉杖を突かずに小走りに走ってしまいました。治った証拠かも知れません。
A医師に慌てて止められましたが、その様に良くなって退院の日を迎えました。
CPMを使用したのは間違いだったと気づきました。
それは、人工靭帯手術の耐用年数は、十年と言われました。しかし僕は二年で悪くなり始め三年目で大腿上部切断したのです。CPMは、骨折に対しては有効な方法ですが、手術した人工靭帯だったからです。僕には有効な治療法ではなかったようです。

㊃あわや切断か

㋐左足内果緑膿菌汚染

退院して我が家に戻りました。
まずは、風呂(実際はシャワー)に入る事にしました。七十五日ぶりです。
入院中は蒸しタオルで拭いてくれました(清拭)が、垢までは払拭出来ませんね。

身体を擦(こす)り、妻も背中を流してくれました。溜まった垢は大袈裟(おおげさ)かもしれませんが洗面器一杯出ました。ところが、大変な失敗をしてしまいました。

ちょうど三ヶ月程前に左内果を怪我した事(前に記述)がありました。

そこがやっと瘡蓋(かさぶた)になって固まっていたのを、すっかり忘れて垢を取るつもりで擦ってしまいました。そこが剥がれ落ちて後は、ジュクジュクになってしまい、またO病院に通う結果となりました。

週に二回程通いましたが結果は悪くなるばかりで、ついに緑膿菌(りょくのう)（鮮やかな緑色で臭いがあります・グラム陰性の通性嫌気性桿菌）に犯されてしまいました。

年が明けても一向に治らないので、医師は手術を進めてくれましたが、手術が恐ろしくて、入院しても処置を毎日続けることで治るものと甘い考えになってしまいました。

㋑無駄な入院

O病院W医師に相談したところ、KRM病院を紹介して戴きました。この病院は、手術せずに治すと評判だったからです。

E医師の外来で診て戴き、一日二回の処置をすると言われ、三月十三日の入院が決定しました。

手術をしないで治るならと心に言い聞かせておりました。

その時は左内果(緑膿菌に侵された)の痛みも去ることながら、両側の踵(かかと)の魚(うお)の目が痛くて松葉杖を突いても、歩くのに不自由でした。

入院当日松葉杖を突いて危なっかそうに歩いている僕を見て、婦長は直ぐに車椅子にしなさい と言ってくれました。

その日から現在に至るまで車椅子生活になりました。

一番期待していた処置と包交（包帯交換）は、がっかりしました。一日一回の処置はなく、それも一回の処置がめちゃくちゃで日を追うごとに患部が悪くなっていくのです。

レントゲン（X線）・CT（コンピューター・トモグラフィー＝コンピューター断層撮影法）

ＭＲＩ（磁気共鳴映像法＝断層撮影装置）等の総ての撮影診断を一切行ってくれませんでした。
空しく四ヶ月の日々が過ぎていきました。
一向に良く治らないのに加え、左足の中指にも潰瘍が出来て緑濃菌に感染されてしまいました。
血糖値は毎朝前七時に測ると、百前後でたまに百二十程度の安定した数値に収まっていました。
血圧は百二十から百五十を行ったり来たりの幅がありました。
食事はと言うと、酷く味付けが悪く不味くて毎日毎回食べられませんでした。
糖尿病には善いと言われているものの、蕪の煮付けばかりで食欲が出ません。
ＰＴリハビリでも無視され、車椅子の事でも練習をさせてもらえませんでした。新しく自分の車椅子を作りたいと言うと、訳解らずに人前で辱をかかされ、怒鳴られてしまいました。
僕もつい「貴方に何が解るのか」とリハビリ科の医師（その時には、知らない人でした）に怒鳴ってしまいました。

それからと言うもの、リハビリも停止に追い込まれてストレスと共に尿が出なくなりました。
僕は此処に入院していては、精神的や患部の潰瘍に対しても駄目だと感じたのです。
早速Ｏ病院Ｗ医師に相談致しました。八月も末に近い頃です。Ｗ医師は外来に来て状態を診せてくれ と申しておりました。
左足の内果は潰瘍で抉られ、中指も潰瘍になって緑濃菌で汚染されていました。
Ｗ医師は、「これは酷い」 と言って、右下肢切断手術のつもりで入院しなさい と申しました。
処置は消毒剤ヒビテン・グルコネード＝クワルヘキシジンをお湯で薄めた液体に十五分間足を浸し洗ってくれました。ぼろぼろ と垢が落ち洗面器一杯になった程です。本当です。
ＫＲＭ病院のＩ医師はどの様なつもりで僕を入院させておいたのでしょうか疑問です。
手術をしなくてもじっくり時間をかければ治るとの事で入院も決めたし、一日二回の消毒処置をする と言う取り決めをしたはずです。
患部も治す事もせず、しかも中指に潰瘍を起こさせておいて出ていけみたいな態度には納得し

ませんでした。Ｉ医師に直接問うと、ここではこれしか出来ない自分も充分にやった と申しておりました。五ヶ月間も入院してこれでは医療過誤だと思っています。

㋒足内果削除と左足中指切断手術

八月三十一日退院 一旦自宅に戻り、六日後にＴ病院に入院しました。

初日は重症病室に入ったのか、二日間眠る事が出来ず降参です。

次の日の夜になって病室が替わりましたが、二人部屋だったので車椅子は入らなくて、しかもとてもお金が払えません、申し訳なかったのですが仕方なく、また部屋を替えてもらったのです。

とても汚い六人部屋の廊下側の左側でした。

それでも僕の空間は、車椅子が自由に出入りできて、荷物も置く事が出来ました。

それから二ヶ月、菌を押さえる処置と検査によって切断か温存療法かの経過観察を行っておりました。

そんなある日妻と姉が呼ばれて、僕も同席してＷ主治医による手術の説明がありました。

「左足中指の切断はあるものの、内果は削除だけで温存療法を取り入れた」 との事でした。

入院一ヶ月目に注文しておいた待望の車椅子が届いたのです。

ＫＲＭ病院に入院している時は、リハビリで車椅子の操作を教わりませんでしたが、Ｔ病院に

入院中、新しく注文した車椅子が来てからキャスター上げなど車椅子の操作を教わりました。

一週間でキャスター上げも出来る様になりました。

さて、手術はと言うと、全身麻酔で十月半ば頃受けました。

説明もはっきりお聞きしていたので恐怖心も無く、術後も痛みも少なく嬉しい限りでした。ところが食事はマイナスランクでした。

十二月二十四日のクリスマスの夕飯に出てきた鶏肉は、生焼きのピンク色でしたがいやいやでも半分程食べてしまいました。その夜、腹痛と共に下痢や嘔吐を起こし散々の目にあいました。

再三看護婦に言って、やっと栄養士がやって来たのですが、様子を聞くだけで、帰ってしまうのです。看護婦に言っても医師に伝わっていないのでしょう。

医療日誌の記入や引き継ぎのときの申し送りが不適正だったと思います。

僕は、下痢を起こすと程度によって一～二回の絶食を基本としていました。

カーテンを閉めて静かに過ごしていたのです。ところが事情の解らない助手さんは、罵声（ばせい）を浴びせながら引き裂くようにカーテンを開けたのです。

次の日栄養士がやってきて謝りました。

けれども医師との話をしていないのか一時的にも食事を替える様子はありませんでした。
僕は丸二日絶食していたのです。一つには、下痢を良くすること、二つには、機敏な臨機応変な対応の悪さに抗議したつもりです。
それから微熱が続き頭痛が出るようになりホットフラッシュも起こす様になりました。
ストレスが引き金のホルモンバランスの崩壊による男性の『更年期』になったのです。そして更に、足の両側親指や左足外側・右足アキレス腱等に潰瘍の兆しが出てきたのです。
退院して自宅療養の必要有りと言う事で、介護保険を申請しました。
僕は「特殊疾病」に当たるので介護度二が受けられました。
五ヶ月間の長い入院でしたが、一月二十六日に退院することになりました。
しかし、自宅ではバリアフリー化の工事が大幅に遅れ、自宅には五日程戻り約一ヶ月間のO病院への入院が決まりました。O病院では消毒と包帯交換の医療でした。

㊤両足親指切断手術

平成十三年三月三日　約一年振りの自宅での生活が始まったのです。訪問看護とヘルパーさんに来て貰う事になりました。
訪問看護婦には、火曜と木曜の昼間一週間に二回看護を受けました。

ヘルパーには、月曜と金曜の二回夕食作りと掃除に来て貰っていました。
朝食は勿論妻が用意してくれます。
そして月曜から金曜の昼食と火曜・水曜・木曜の夕食は予めメニューを作っておくと、近所の総菜屋さんが作って届けてくれるので大助かりでした。
そんなこんな事しているうちに一ヶ月が過ぎた頃には、両足の親指と左足小指側側面の潰瘍が深く大きく広がり、激痛で夜も眠れず、起きていないと（実際は朝までベッドに腰掛け我慢して眠れませんでした）過ごせない日々が続き睡眠不足です。
昼間は、頭痛や眩暈（めまい）吐き気なども患い食欲も減退する有様でした。
T病院W医師に診て貰って検査して更に何回か診て貰うと二週間後に入院手術という段取りになりました。退院して二ヶ月目の事です。
両足親指切断手術は入院して間もなく行われました。
T病院への入院は二回目なので、W主治医にも気が知れておりましたので、その点安心でした。
しかし、思わぬ落とし穴がありました。
前回六人部屋だったのですが、今回は病棟が替わり四人部屋になりました。

窓側で明るくて嬉しかったのですが、差額ベッド料を一日二千円支払う事になりました。
確か平成十二年度から六人部屋を廃し、四人部屋は差額ベッド料を徴収しない事になったはずなのですが？
ま・・・それはさておいて、手術の手順は前回の様子と一緒でしたが、不安がなかった訳ではありません。
全身麻酔の事、手術後の痛みの事、看護婦の対応について等々、あ そぅだ、食事についても不安がありました。前回入院中の食事で生焼きの鶏肉事件を思い出したのです。
そんな不安の中、前日の夜八時に浣腸をして水も飲めない絶食となります。
さて手術当日　十五時に手術室に向かう事を告げられていました。
午前中から手術中もずっと続ける点滴が始まりました。
そして十四時三十分頃に看護婦が慌（あわ）ててやって来て「これから手術室に行くから早く仕度しなさい」と言うのです。
僕は慌てました。急に言われたので、気が動転しました。手術着に着替えて静かに待っているはずでしたのに・・・。

慌てて真っ裸になり、T字体を付け、手術着に着替えました。
すぐにストレッチャーに乗せられました。
それから麻酔前投薬（筋肉注射）をやり、血圧を測ったのです。
聞くと「収縮期血圧が１８０mmHgを超え、拡張期血圧も９０mmHgを超えている」と言っているにもかかわらず手術室への遂行をしたのです。
この様に落ち着かない状態で手術に望むのが気掛かりでしたが、看護婦は指図の通りノルマを達成することなのでしょう。
僕は何も処置しないのが疑問で不安でした。
手術後気が付くと、病室のベッドに仰向けで寝ており酸素マスクをしていました。
痛みはまだ無く良かったのですが、痛みが出てきた時の事を思い出し脳裏を過（よ）ぎるとまた、恐ろしかったです。
妻は会社を休み朝から夜十時頃まで居てくれました。帰ったのは、まだ底冷えのするしかも夜中です。

バスは最終にも勿論間に合わなかったと思います。どの様にして帰ったかは、次の日の土曜日僕には何も弱音を吐きませんでした。済まないと思っています。

そしてその日の夜事件が起きました。

準麻薬系の痛み止め（ソセゴン十五mg＋アタラックスP五十mg＋生食百mℓ）を留置針（サーフロー）２４G（ゲージ）にて点滴をしました。

看護婦さんには、一分間十六滴（１cc）お願い致しました。

以前に僕と隣のベッドの患者が早い滴数で苦しくなった事がありました。

その為僕は点滴数を、痛み止めに関してだけ自分に会わせた滴数でやって貰う事にしていたのです。

夜九時頃になって順繰りに患者を巡り、僕の所にまいりました。

僕は痛み止めと安眠不安剤の点滴です。

滴数は前記した通りにやってもらったつもりでした。

しかし痛みが消えて行くのと同時に心臓がバクバクとしてきて呼吸が困難になり、身体に重圧が掛けられたように、指も動かすことが出来なくなって、ナースコールは愚か声も出す事が叶いませんでした。

このまま僕は死ぬかと思い覚悟しました。

色々な想いが走馬燈のように巡り、藻掻（もが）き苦しんでいました。

幸い死ぬ事はなかったものの、看護婦は当たり前の振る舞いで何事も無かったように点滴を外し持ち帰りました。

その時僕は声も出せず身体全体が痺（しび）れで、表現が出来なかったのです。恐ろしかったです。

その後は神経質になり点滴の滴数は自分で管理する事にしました。

看護婦にしてみれば、一番嫌な患者と写ったに違いありません。

しかし僕も及ばずながら医療従事者です、個人に即した医療こそが最前最大の医療と今でも思い、自分を守る為の信念は替える気はありません。

そして三日程たった同じ看護婦の夜勤の時、急に吐き気と同時に下痢気味となり助けを求めたのですが、対処を何もせず横に立ってただ見ているだけなのです。

僕は直ぐにトイレに行きたい事を告げて、痛い足を庇（かば）いながら必死で車椅子に乗りました。押

して誘導もしてくれません。
自分で車椅子を走らせ下痢で汚れるのを必死で堪えて便器に座り込みました。
パジャマとブリーフを取り除いたその時、看護婦が現れました。
ブリーフを持ち去りトイレから出て行っただけなのです。
僕は下痢と同時に吐きました。
普通であれば便器の外に吐物が飛び散り、回りが汚くなると僕は考えました。
股の間から便器の中に上手に吐いて事は済みました。
看護婦はその時やっとガーグルベースと「少し汚れただけ」と言ってブリーフをトイレに持って来ました。事が総て終わってからの事です。
ベッドには一人で戻りましたが、後の事です。お下拭きも持ってきません。
この病院のシステムは、リースとして身体拭きとお下拭きタオルを提供して貰っているのです。
僕も当然リースに申し込んでいたのです、なのに申し込んでいたのを確かめずにナースステーションに戻り、冷たくなったお下拭きを持って来て渡されただけです。
その後の土曜日、朝から眩暈（めまい）が起こり顔も動かす事が出来なくなりました。

朝食は食べる気もありませんでした。訴えたのに何も対処してくれません、主治医に連絡を取って貰ったのですがそれも無しの飛礫（つぶて）です。
昼食には妻が来てくれました。哀れなほど少ししか食べられませんでした。
夕食も妻に世話になりました。
次の日の日曜日の朝食は、妻がおにぎりを作っておいてくれたのを食べました。昼夜と、病院で世話をしてくれて、居てくれました。
また朝のおにぎりを作っておいてくれました。
僕も食べないといけないと思い、やっとのことでおにぎりを食べていました。
月曜の朝　主治医が来てくれました。
頭が動くとまだ吐き気がするのです。
そのことを伝えると、昼から点滴（メイロン＝炭酸水素ナトリウム）が始まりました。
その直前にリハビリの先生が心配してベッドサイドに来てくれてお喋りをしていました。
点滴が始まり暫くすると身体が痺れ呼吸困難に陥りました。

直ぐに妻に伝えました。

看護婦がやって来たので、点滴の滴数を緩(ゆる)やかにしてもらい、その後三日間は、落ち着いて点滴を受けることが出来ました。

でも楽になったものの、その週の土曜日まで寝たままで過ごしました。

起きあがる事が出来なかったのです。食事や水を飲むのも、お通じやお小水もベッド上でした。

看護婦の処置もずさんで、殆ど妻がやってくれました。

㋔左足親指再切断と左足外側削除手術

毎日手術部位を消毒（超酸性水）（イソジン）（イソジンゲル）などを施し包帯交換をしていました。そして手術後一ヶ月過ぎた頃切断した左の親指が黒く変色してきたのを自分で発見し主治医に診てもらいました。

始めは大丈夫だとのお言葉でしたが、次の日慌てて診察して再手術が決定したのです。

また全身麻酔で手術かと、がっかりしました。

ストレスも頂点に達し微熱が続きホットフラッシュがあって、頭も狂いそうでした。手術そのものに望む気持ちは平気なのですが、手術後の激痛を思うと、やはり恐ろしいと思いました。

手術が無事終わり、激痛も乗り越え正常心を取り戻しリハビリに励みました。

しかしリハビリで歩く練習もしたのですが、歩くまで回復しませんでした。

血糖値はと言うと、二百を超えているのに何の手立ても有りません。

肝炎はノイロピン点滴を使用していました。

㋕左人工靱帯の破損

ベッド上では足部に直接布団が当たらない様に［リヒカ］を利用していました。

ところが病院で貸してくれたリヒカは、真ん中の所の金属が剥き出しになっており、僕も初めて使わせてもらったので様子が解りませんでした。左膝に傷を受け初めて解ったのです。

大腿四頭筋断裂の手術の方法は、人工靱帯を膝蓋骨下部の周りを巡り残存した左右の四頭筋に縫い合わせたそうです。

膝蓋骨の中央部に小さな傷が有り、回りが薄紫に変色していました。

僕は薄々感じていました。A医師は、「十年間位人工靱帯は持つかな」と申しておりましたが、僕の人工靱帯は、二年の寿命でした。

病気でも怪我でもそれに至った経過や条件が二つないし三つ或いは多重に重なり合って発症するものです。

睡眠は、一日八時間寝むれば良いと思い込んでいる人間が多い。
しかし本当の睡眠時間は、夜十時から朝六時までの八時間が一番人間生理的に適当なのである。ただし三十分以内の昼寝はリフレッシュします。
それはまず自律神経の交感神経と副交感神経のバランスを整える事にある。この時間内に睡眠することで、脳の活動に休息を与え、昼間衝撃を受けた免疫力低下の回復をさせ、ストレス要因(ストレスに移行)を防ぎ、体内時計二十五時間を二十四時間に補正修正する。
睡眠のメカニズムは、二十二時をもって副交感神経の働きとなって睡眠を促す。睡眠はレム睡眠(身体を休息させる浅い眠り)とノンレム睡眠(脳を休息させる深い眠り)を繰り返し暫時時間が多くなり三回目で九十分の頂点に達し暫時減少して八時間目の朝六時にレム睡眠の時 交換神経となり覚醒する。
これが病人あるいは健康体に関わらず身体に取って基本的な健康的な睡眠姿勢である。
煙草を吸わない人や家族が肺癌や咽頭癌になるのは最も気の毒であるが、煙草を吸わない人でも、周りで吸っている人の、復流煙や紫流煙を多量に吸い込む事で患うことがある。恐ろしいことです。もう一つ「癌」に関しては、活性酸素が非常に深く関(かか)わっています。

少し横道に逸れたので本題に戻ります。
さて僕の場合、人工靭帯が大腿四頭筋の萎縮によって膝蓋骨中央部に引き上げられてこんもりした所に、リヒカの剥き出しの金属部にぶつけて傷を受けたのです。W主治医に診て貰ったら大丈夫だと言われました。が、後日診て貰うとW医師は、やはり膝は変だと言って、左膝の小さな傷口から人工靭帯をセッシ(ピンセット)で引っぱり出し 鋏(はさみ) でジョキジョキと切除し始めたのです。僕はビックリしたのですが、曜日により、一日一回、つも三回程引っ張り出しては切除しました。(実にジョキジョキ切るのが好きな医師で、楽しそうでした)
傷口は当然広がりました。そしてその傷口に消毒をしないでフィブラストスプレーを一カ所二回噴霧しました。退院までに同じ医療行為を三回程やりました。
もっとも消毒は自分の持っていた超酸性水(PH 2) の機械を持ち込み医師の承諾を受けて毎日の包帯交換の時にヒビテン浴の替わりに使用していました。
フィブラストスプレーとは、
「薬の作用・使用法=皮膚潰瘍を治療するスフレータイプのお薬で、患部をふき取り、消毒後に

潰瘍面から約五cm離して、一カ所に五回噴霧（ふんむ）します」と書かれてありました。

僕の場合足の指の切断部位（両足の親指）や削除部位（左足の外側・右足の内果とアキレス腱潰瘍部）と右膝の六カ所に噴霧していたので、多量に必要なのか五回噴霧のところ二回噴霧でした。

多分高価な新薬品だった所為もあり、僕に初めて試験的に使用しますと主治医が言っておりました。

入院してから六ヶ月が経過し、膝は治らぬまま十月一日に退院となりました。

W医師は、フィブラストスプレーを使用するとき自分は他の消毒や薬品を併用するのが嫌なのでしないことに決めている と言っていました。

フィブラストスプレーを使用するまでは、ヒビテン十五分足浴を実施していましたが、超酸性水十五分足浴に替えていました。

また、傷口に塗っていたのは、消毒薬として、イソジン消毒のイソジンゲルやユーパスタ(イソジンシュガー)とソフラチュールを使用しておりました。

その他にプロスタンディン(プロスタグランディンE1＝褥創・皮膚潰瘍治療剤)を使用しておりました。消毒もしないで菌のある傷口にフィブラストスプレーだけで良いものか？疑問を持ち退院後も自宅で妻や訪問看護婦にやってもらい、週一回は通っていました。

第六章　糖尿病

㈠ 診てくれ無い科

自宅よりハンディキャブ自動車に乗って一時間要します。

退院後もT病院の整形外科（一週に一回）・内科，漢方（二週に一回）の外来に通い診て貰っていました。　整形外来では、超酸性水を持参していました。フィブラストスプレーも冷やしを持続したまま持参して、使用しておりました。シルキーポアドレッシングも持参です。

治療は、超酸性浴とフィブラストスプレーを吹きかけ滅菌ガーゼで覆い包帯を渡されました。包帯もしないで処置室から追い出され、外に出て自分で包帯を巻く有様でした。

内科では、糖尿に関して入院中から訴えていたにもかかわらず適切な指示や診療がありませんでした。やっと血液検査をしてもらいました。

結果は食後四時間目で血糖値二百四十二・ヘモクロビンＡ１Ｃ 八.五でした。

外来に通うようになってから初めて、「ベイスン」と言う糖尿病の錠薬を渡されました。

自宅に帰り、朝夕の二回の処方だったので、その日の夕食後一錠服用しました。ところが服用して数時間後に、吐き気や眩暈耳鳴りが出て具合が悪くなってしまいました。

朝にはどうにか収まったのですが、後は薬を呑む気になりませんでした。

そして一週間後に整形外来と共に内科も受診し、「ベイスン」が僕の身体に合わない事を医師に告げました。ところがその日渡された薬は、他の薬では無く「ベイスン」だったのです。自宅に戻ってから気が付いたので仕方ありませんでした。

それから三日程して訪問看護を受けたとき、血糖値が朝食後四時間たっていたにもかかわらず、四百十三の高い数値に訪問看護婦も驚き、その場で内科の医師に電話連絡をしてくれました。

医師の答えは、「水でも飲ませておけ」だったそうです。訪問看護婦も僕も非常に驚きました。

次の週　内科外来に受診したとき医師に入院を希望しました。

しかし、満員で空きベッドが無いと一蹴されました。

僕は血糖値が高いときの電話対応を思い出したのでしょうか、つい「頼りにならん」と語尾を荒げた言葉を出してしまいました。

その日の整形外来の受診の時にも主治医に左膝を含め入院させて欲しいと頼みましたが、内科で言われた通り空きベッドが無いと言われました。

そして左膝にも激痛か有り、僕でもハッキリ解るような緑濃菌の特徴である緑色と特徴的な臭いを告げても「違う、黄色葡萄球菌だ」と言いはり、かと言って菌検査もしないし、「緑濃菌だ

ったら抗生剤で直ぐ治る」と言ったきり何もしないのです。包帯を巻くのも廊下に出て自分で巻きました。

次の週　整形外来で待っている時、身体が痺(しび)れ空腹感と冷や汗を感じました。直ぐに整形外来受付に告げると、此処には血糖検査の器具が無いと言われ、しかも内科でも測れないと軽くあしらわれてしまいました。

何故にどうして　と考えてしまいました。パニックに陥り頭が混乱したのです。兎(と)に角(かく)血糖値を測らねばと思い調剤薬局に行きました。事情を話し測って貰いました。

血糖値は八十五で低血糖には、なっていなかったのですが、飴をなめさせてくれました。

少し落ち着いたら、診察券を返して貰う事を思い出しました。

病院に戻って受付に告げ待っていると、慌てた様子の看護婦が僕に近づき診察を受けるように進めてくれました。僕は素直に整形の診察を受けました。

しかしその時も外来の看護婦は、僕を追い立てる様に廊下に出したのです。結局自分で両足の包帯を巻く事になりました。

また、傷口を覆(おお)うシルキーポアドレッシングも自前で揃え、足浴しているときに何カ所かの傷口に合う様に鋏(はさみ)で切り揃えておりました。なのに、僕に何で冷たく当たるのでしょうか、解りません。自宅に戻り主治医に電話をしました。

「左膝に菌の進入と激痛で耐えられなくなりました。血糖値上昇も気になります。膝の切断も覚悟していますどうか入院させて下さい駄目ですか」と頼みました。

暫くして・・・「うぅん」と否定的な小声に聞こえました。

僕は奈落(ならく)の底で藁(わら)をも掴(つか)む気持ちでおりましたのに・・・

㈡ 自分で見付けた病院

天から蜘蛛が糸を垂らしてくれました。僕はその蜘蛛の糸に捕まり誘われるがままにE病院に吸い込まれて行ったのです。

E病院には以前鍼灸の勉強会で講義を受けたM医師がおられました。　内科のM医師は清く僕を受け入れて下さいました。

検査をして入院日を決めてくれました。平成十年(一九九九)十二月三日のことです。
検査の結果は朝食前血糖が百八十九・ヘモクロビンA1C九・一と高かったのです。
十二月二十八日 午前十時に入院しました。特に食事のことを聞かれました。
糖尿病であるがゆえに、治療食としての食事に気を付けねばなりません。
僕は自分の仕事として医療に従事していた事を踏まえ、改めて自分が勉強をするつもりでいました。このE病院は、玄米菜食を基として一切の肉・魚の類は食べさせない所なのです。
僕に取っては好都合の食事療法です。後述しますが四国の医院の徹底した漢方医療に及びませんが食事療法だけは他の病院も見習う価値のある病院かと心得ました。赤字なく正規に経営しています。
更に驚いたのは、正月三が日の献立表です。料亭か旅館並の献立でした。
糖尿病食の千六百キロカロリーですが、一部鶏卵や牛乳を使った食品は他の物に代替してくれます。
主治医の診察後、看護師・栄養師が訪れ説明を受けました。
昼食前(十一時半)血糖値二百四十五ありました。インスリンは打ちませんでした。
さて初めての食事は、食撞DM Diet 千六百kcal

主菜 キャベツの重ね焼き 副菜 胡麻和え 主食 飯 百六十五グラム 漬物 果物りんご
主食の飯は、平成十四年四月から一単位五十五グラムから五十グラムになりました。ですからこのときの単位は、二十一単位の千六百八十kcalを摂っていた計算になります。
そして、肉や魚は大豆の粉アペックスソラー(リンケッチ)や小麦の粉グルテン
《麩は小麦粉も含む》を加工して焼き肉やハンバーグの挽肉、そぼろあん、はたまたソーセージ・ハム・えびなどそっくりに加工料理して病院食に出てくるのです。
夕食前(十七時十分)の血糖値三百六十九でした。
糖尿病は、内分泌疾患であり遺伝的素因が非常に大きい。膵臓の膵尾(ランゲルハンス島)から分泌されるインスリンとグルカゴンが血糖の量を調節する機能に深く係わっている。
病態は、インスリン依存型をI型と言い、インスリンの分泌が全く認められない症状である。II型は、インスリン非依存型と言って、生活習慣の悪さが基で肥満(標準体重より十パーセント以上脂肪が増える)になり絶対量の不足によって起こる事が多い。
その他では、インスリン分泌量は正常なのに、インスリン濃度の低下や働きの悪い状態や分泌量の少なさで発症する場合もある。
ちなみに血糖値が高くなる事(食後二時間の血糖値百四十以上)で発見されるが、沈黙の病と言

われているように、かなり悪くなるまで自分は大丈夫と多寡(たか)を括(くく)っている糖尿病前症(糖尿病予備軍)の人が巷に横行している。医師も本人の強い訴えが無いかぎり検査をしないのが現実です。

僕の糖尿病は、インスリン非依存性の糖尿病です。

僕が使用しているインスリン製剤は、・・・・・三十R注です。

R注(regular rabbit)透明な製剤で速効型三十%と

N注(normal temperature and pressure)白く濁った懸濁製剤中間型の一体型。

インスリンは、普通であれば、膵臓の内分泌腺として分泌されるものであるから生きて行けます。しかし、分泌されない或いは働きが悪い所謂(いわゆる)「糖尿病患者」に使用するヒトインスリン(遺伝子組換え)z製剤が開発されました。始めは牛や豚から注出していました。そして豚が人とアミノ酸配列がほぼ同じなのですが、現在は、パンのイースト菌が人のアミノ酸配列が同じで副作用が少ないので今は定着しているようです。

生まれて初めて血糖チェックとインスリン(イノレット三十R)注入を教わり、インスリンを腹部に六単位注入致しました。

夜九時の血糖値は二百九十でした。

『朝食前血糖値＝朝前血糖に、昼食前血糖値＝昼前血糖に、夕食前血糖値＝夕前血糖　二十一時血糖値＝夜　包帯交換＝包交とします。Kキロカロリー＝kcalに置き替えます。』

一月十九日　この日から二十五日の退院当日まで収縮期血圧が百九十以上二百二十までが続き毎日一回・朝か夕にアダラート(血圧降下舌下剤)を使用していました。

この血圧上昇は、高インスリン血漿による高血圧症でした。　血糖値は、低血糖の五十から二百八十を行ったりきたりの、のらりくらり状態でした。一日のインスリン量九十四単位

一月二十三日退院前日　眼底検査に於いて、細動脈狭窄　プラス二

視神経陥没　緑内障疑　硬化像　プラス

点状出血　斑状出血　小血管瘤　新生血管　網膜症はいずれもマイナス

インスリンは、一日二回で八十八単位が続き、退院日から朝二十四単位・昼二十四単位夕三十二単位の三回で一日八十単位注入となりました。

一月二十四日午後一時半S病院を退院　自宅に帰っても色々戸惑いがあって、物事がうまく捗(はかど)らず、落ち着かなかった。居場所や食事しかり・・・

㊂ 一時（ひととき）の安らぎ

入院中のストレスから解放されたのでしょうか、血圧も低く抑えられていました。血糖値は、三月十日にＴＴＯ病院に入院するまでの朝前血糖は、百前後で落ち着いていました。昼前血糖は、六十以下の低血糖が十一回も有り、一番低い時は、二十九になった事も有りました。やはりお腹が空いて気分が悪くなり身体全体が小刻みにふるえ冷や汗が出ました。

さて僕はＥ病院で看護学生と知り合いになりました。お聞すると、「ウェルナー症候群」のことを知りたくて実習に僕を選んだそうです。

僕も自分の病気である「ウェルナー症候群」を知りたかったのです。

そんなある日看護学生がホームページの「ウェルナー症候群」を選びプリントアウトして持ってきて下さいました。

僕は退院してから十八日後の二月十二日に、Ｒ研究所に辿（たど）り着きやっとの事でＳ主任に連絡することが出来ました。

Ｓ主任は早速『老化と遺伝子』の著書を送って下さいました。

有り難う御座いました。この場を借りて御礼申し上げます。

そして医療に関しては、ＴＴＯ病院のリウマチ膠原病科のＧ医師を紹介して戴きました。

早速Ｇ医師に直接電話でお話をしたところ、来週の月曜日(十八日)に外来に来なさいとの事でした。

今日は、天気が良く気分が良かったので、シャワーを浴びました。午後 妻が、善福寺川の川添を大宮公園に散歩に連れて行ってくれました。ひょうたん池で、翡翠（かわせみ）の写真を撮っている十数名の方々に出会いました。僕達もその瞬間を見たいと思い待つこと三十分。魚を捕りに来た翡翠（かわせみ）が飛んで来ました。枝に止まるやいなや次の瞬間、魚を捕らえて枝に止まりました。僕は、その瞬間を間のあたりにしました。彩りと言い素早い華麗な動作と言い大感激致しました。

そして、カメラマンから自分で写した翡翠（かわせみ）の写真だと言って頂戴し感激致しました。

［ 翡翠（かわせみ）の 魚（うお）捕り姿 佳麗（かれい）哉 ］

今日はＴＴＯ病院の外来に行くので仕度をしていました。七時五分にインスリン二十四単位注入しました。八時にハンディキャブのリフト車が迎えに来ました。気分が優れなかったのですが、そのまま出かけました。ＴＴＯ病院Ｇ医師の診察を受けました。ウェルナー症候群の事・左膝切断の事、事細かく聞いて戴きました。Ｇ医師も承諾して三月十一日に入院するようにと指示されました。

胸レントゲン・採決・採尿を指示され、順番にレントゲンを終え採血を待っていて気分が悪くなりました。

随分我慢したのですが、車椅子に乗ったまま下腹部から膝全体に吐いてしまいました。

採血を中止して点滴のためにＧ医師に呼ばれました。医療ベッドで待つ間にまた吐いてしまいました。

その時のＧ医師は親切でした。三時間程で点滴が終わり、トイレに行ったら下痢をしました。

ハンディキャブが迎えに来て貰えるまで待合室のソファーに横になって休んでおりました。

帰りのハンディキャブの車の中でも吐いてしまいました。

自宅に戻りベッドで休みました。夕食は、二十時におかゆを食べましたが、インスリンは注入しませんでした。この日のヘモクロビンＡ１ｃ七 五　ＣＲＰ二 二三でした。

その後三月十一日にＴＴＯ病院に入院するまでの血圧はアダラート一回使用しただけでプロプレス４を呑んで対処しておりました。

二月十九日以降の血糖値は、四十九の低血糖から二百二十九の高い時まで上下の幅がありまして、一定ではありませんでした。インスリンの一日の量は、八十単位でした。

両足の痛みは、激痛の時や痺れの時などがありまして、これも一定しませんでした。

他に頭痛や眩暈・動悸(胸部の痛み)も出ました。

㊃期待

朝食は食欲が無く食べる事が出来なかった。しかし、既にインスリン二十二単位を打たれていたので食欲が湧くまで静かに横になっていました。

暫くして看護婦がやって来て、声も掛けずにカーテン越しに手を伸ばし黙ってお膳を持って行ってしまいました。お膳には手をつけていないので食べていないことが判っていたはずです。

「食べていないけれど、どうしたのか？」と声を掛けてほしかったです。その時微かに感じていたのですが僕は声を出せませんでした。その後きっと僕は低血糖で気を失ったのだと思いました。微かに何かを感じた時、女医の先生が僕に馬乗りになり胸を押したり叩いたりしているのを

虚ろ(うつ)ながら感じました。でも感覚が無いのです。声も出ません動くことも出来ませんでした。

後に判ったのですが、ＣＴスキャンに行ったと思います。

痛みの感覚も無く意思表示も出来ませんでした。

気が付いて声を出せるようになったのは、「ストレッチャー」に乗って部屋に戻ってくると、妻が声をかけてくれたので気が付きました。

直後点滴が始まりました。十八日の朝まで点滴が続きました。

微熱が続き、一日中 右足と左膝の痛みが続き嫌な日でした。

しかし嬉しいことがあったのです。大学時代の友達がお見舞いに来てくれました。めぐるめく話に花が咲きました。

お見舞いに自作の花瓶と花束を戴きました。早速花瓶に花束を生けてくれ、飾ってくれました。とても嬉かったです。しかし包帯交換時間になり、続いてＭＲＩに呼ばれました。充分に話しが進まなく残念でした。

ＭＲＩのある地下に一緒に行く間に少しお話することが出来ました。でも不思議に友達とお会いしている時は痛みを忘れていました。

ＭＲＩは、ノイズを起こし映像にならなかったようです。僕は義眼を外して準備したのです。技師が言うには、「義眼の下(内部)の受け皿として金属が埋め込まれてあり、それが邪魔をしたのであろう」との結論でした。

インスリン注入量は朝昼共に二十二単位は変更ならず、今夕から二十二単位を注入する指示が出ました。つまり一日六十六単位です。

痛みは相変わらず激痛が有ります。インダシン坐薬と皮下注射をしました。

眠れ無い為に睡眠薬のデパス・ベンザリン・ハルシオンを投薬して貰っています。睡眠はほぼ保たれています。血糖値は下が九十四から高いのは、二百五十五でした。

午前中アイソトープ(放射性同位体＝ＲＩ)撮影検査の為造影剤を注射。

午後二時四十分頃アイソトープ検査に呼ばれました。

アイソトープとは、全身を撮影して骨のどの部分が多いか少ないかを調べる検査のようですが、これ以上の詳しい話しはありませんでした。ちなみに、僕の検査結果は、左膝関節部から、そうとう上部に骨の欠損が判ったそうです。両足の痛みは常に有り特に左膝が痛み浮腫が有り我慢も限界を感じる。体温三十.六℃　低体温症で死を覚悟する体温です。

突然転院をして欲しいとの通告がありました。僕は呆(あき)れました。

入院前の診察において約束したはずです。「ウェルナー症候群」の事、左膝上部切断手術の事承諾の上入院を許可したはずです。

膝に菌が進入して腐りかけている緊急を要する患者に対して、何故、処置を施(ほどこ)さ無いのでしょうかね。疑問です。痛みは、相変わらず激痛が続いていたのでインダシン坐薬とアタラックスPを注射していました。

便通は下痢状態が多かつたのですが、時々出ない日があるとか、コロコロ状態で便秘薬を呑み下痢をする事の繰り返しでした。二度ほど血便が出たと知らせて、見せたのですが、看護婦がもみ消して医師には連絡されなかったようです。

お小水は、一日五百cc程でした。夕よりインスリン二十六単位になりました。

転院先となるO病院整形外科の外来へ診察に行きました。

指示書やレントゲンやアイソトープなど借りる形で渡され、診察に行きました。十四時TTO病院に帰院。返答の指示書をもらって来ました。当日の朝下痢便だったので心配していたのですが、

昼食もO病院の食堂で食べて大丈夫でした。左膝の激痛に襲われました。

アタラックスP(一㎖cc)筋注　採血(CRP炎症反応検査 入院時二・三㎎/dℓ 前回二・二㎎/dℓ)今回二・〇三㎎/dℓ 白血球数八千　抗生剤皮内反応検査=RBテストを受ける。抗生剤ファーストシン点滴開始　五月七日退院転院日まで、朝夕の二回、留置針にて点滴を続ける。

下痢も続き体重三十七kg。腹部エコー(肝・胃・大腸・小腸・膀胱)を検査する。

体温は、三十八℃に上がり僕にとっては高高熱が続きました。この頃より食事も喉に通りづらくなり、食欲も減退していました。錠剤も喉にひっかかり嚥下困難が起こるようになって咳き込む事が屡々(しばしば)繰り返されました。

トランスファーも時々失敗しました。トイレで便座から床に落ちて這(は)いずり、看護婦に連絡するナースコールのスイッチに届かず大変だった事がありました。その事故があったときも汚れたパジャマも取り替えてもらえずベッドに置き去りにされ介護をしてもらえませんでした。

具合が悪くても自分でやるしかない病院です。

リハビリも午前OTと午後PTに行っておりました。身体の具合も良い日もあったのです。

しかし、十一日午前中のリハビリの帰りエレベーターの中にたった一人で閉じこめられてショックを受けました。

七階が最上階ですが、七階で止まらずに何故か上まで行くと、エレベーターが急にドスンと落ちたのです。一瞬何が起きたか判りませんでした。

眼が良く見えないので、手探りで緊急通報のボタンを押しました。警備に連絡がとれ「ライト」が点いているか聞かれましたので、「点いていると」こたえました。

連絡が取れてから十分か十五分位待ちました。エレベーターの扉を外からこじ開けてもらいましたが、床から四十cm程上に停止した状態の中から助け出してもらいました。

その夜　胸が苦しみ　左の大腿鼠径部から膝をまとい足部全体まで激痛と痺(しび)れでとても耐えられませんでした。心電図には異常無しでした。

自分で記録メモが書けず二日間看護婦さんにメモしてもらいました。

四月十九日十八時頃より胸が締め付けられる痛みが出始め、十八時十五分に血圧を測ると百七十九／八十三なので、看護婦は舌下剤を入れるかどうするを決めかね、結局十五分後に百八十五／九十五になり血圧降下舌下剤ヘルラートを利用することになりました。

その後主治医が見えられ胸の事を聞かれました。

「胸全体が締め付けられる痛みがある」と答えると　十九時からニトロール（ニトログリセリン）点滴を開始する事になりました。四月二十一日　十一時ニトロール点滴が中止になるまで絶食でした。夕方Y医師がお出でになり、「O病院に五月七日に転院が決まり五月九日に左大腿部切断手術が決定しました」と告げられました。

五月一日は、午前二時に足の激痛から始まりアタラックスP五十mgプラス生食五十mℓを点滴するパターンが多くなりました。

後は、痛みと痛み止めを打てる時間間隔によってアタラックスP二十五mg筋注かインダシン坐薬を併用しておりました。鳩尾(みぞおち)に突き上げるような重い痛みと腹部が張って痛むので、食欲が無くなり実際に食事も食べられませんでした。

左肘関節が痛み、腕全体がしびれ動かなくなっても、食事介助も何もありませんでした。

僕は心身共に疲れ自分を自分で哀れに想い、いっそ『死にたい』と考え思い願うようになっていました。

腹部エコー（超音波）で胆石が見つかりCRP炎症反応は一・二mg／dℓありました。

第七章　両側下肢切断

㈠　左大腿部切断

奇しくも五月七日は、僕の五十五歳の誕生日でした。とても良いこと良い年になるかなーと想い描いておりました。

午前十時にO病院に入院手続きを済ませましたが、さにあらんや病棟に行くのも病室に行くのも総て口先案内だけなので自分で行く有様でした。

車椅子からベッドに移動する事の出来ない狭い場所でした。看護婦が来ません。

僕も何か落ち着かなくてベッドに横になれませんでした。車椅子に乗って部屋の前で待っていました。そして十六時三十分になってやっと主治医のI医師が来られ、処置室に来るようにと言われました。　まず五月九日の手術を十七日に延期したことを告げられました。

そして包帯交換をしながら傷口を診て薬を添付しました。十七時過ぎになってやっと看護婦が入院調書を取りに来ました。昼食は兎も角としても、夕食から糖尿病食や食べない物だとかを聞いて内科医も栄養士も来て説明すべきだと思いました。

内科医がベッドサイドに来たのは、入院一週間後の十四日でした。再三看護婦に来てもらう様に頼んでおいたのです。病室の他の患者の所には来ていたのも解っていました。声を掛けた事もありましたが僕の所には来なかったのです。

入院した五月七日より三日間は抗生剤のファーストシンを点滴していました。

そして十日よりモダシンに替わりました。医師に尋ねるとファーストシンが三日分で在庫が無くなったとのお言葉で、内容が全く同じですが、メーカーの違いだけですとの事でした。

でも実際僕の身体への影響はとても苦しくなりました。食欲は益々減退し、下痢が続き悲惨なものでした。それに加え点滴用の針は、翼状針(トンボ針＝抜き差し)を朝・夕・寝る前の三回刺していました。いつも一度で針を刺せれば何とか良かったのですが、一回に三度から四度と刺されたのではたまったものではありません。

ちなみにTTO病院では、医師が留置針を刺しており、看護婦は、点滴瓶を取り替えに来ておりました。そしてペパリン(血液凝固を防ぐ一％溶液)を前後に注入しておりました。

五月八日からパルクス1A・生食百㎖(慢性動脈閉塞症における四肢潰瘍・安静時疼痛の改善・糖尿病における皮膚潰瘍の改善)の点滴を受けておりました。

五月十日から二十七日までアタラックスP五十㎎1A生食百㎖点滴を続けました。

手術前日の処置は普通では、剃毛し風呂に入り、麻酔科の医師の訪問があるはずです。が僕のところには来ませんでした。医師が来たのは、手術の為の留置針注入の医師と看護婦の手術前説明だけでした。夕食は普通に食べて夜八時から九時に浣腸をして寝ます。

五月十七日　手術当日朝よりモダシン・パルクス・アタP・ラクテック点滴注入　ラクテック五百mℓは電解質(ミネラルイオン＝ナトリウム・カルシウム・カリウム・乳酸イオン・クロールイオン等々)は手術に行く時にも注入しながら往きました。

手術三十分前には、下着を脱ぎT字帯を付け手術着に着替えます。

手術室から呼ばれると麻酔前投薬として筋肉注射(硫酸アトロピン１A＋アタラックスP二十五１A)を行います。ストレッチャーに乗って手術室へ行きます。

左大腿切断手術は、後程主治医にお聞きした事を要約しますと、まず大腿の切断部五cm上部に出血を止める為ゴムで充分に締め付け皮膚を一部残して、医療用のチェンソーで切断したそうです。僕の場合も規定通り行ったのですが、切断してからまだ五cm上部まで腐っていて、再び上部五cmを切断したそうです。

僕は、入院して一週間延期したには慎重の上にも慎重を重ねたものと解釈しておりました。

しかしそれにしてはと思い、ＭＲＩ撮影を希望したにもかかわらず、撮影はしませんでした。

何という不手際だったと考えました。悔しかったです。

手術中の点滴は、ラクテック・ザンタック・プリンペラン・ソセゴンをしていたそうです。

気が付いて眼が醒めると薄暗い部屋におりました。窓も無いし何処に居るのかと周りを見渡すと妻を見付けてひと安心いたしました。酸素マスクをして心電図が取り付けられておりました。

酸素を測る器具(サチュレーション＝酸素飽和度モニター)も人差し指にずっと挟(はさ)めてありまして、とても痛かったです。そして二十時間後に心電図を測る為に胸部に取り付けて置いた胸部電極(ゴム性の吸盤)を外しました。すると胸部の皮膚が剥がれ火傷のようになって痛みがあって、二週間程治りませんでした。四肢(僕は下肢がないので上肢だけ)をはさんだ電極も痛かったです。

総て過敏状態に陥っていたと推測されます。

妻は、僕が気付いたのを確かめると、ドット疲れが出たのでしょう休憩室のテーブルに手枕をして寝て居たのだと言っておりました。

その間に僕は胸苦しさと共に切断部位に激痛が出てきました。ナースコールをしましょうとボタンスイッチを(右手は点滴をしているので動かせません)左手で手探りして探しましたが見つかりません。声も出ないので知らせる事が叶いませんでした。(ナースコールボタンは、結局無かっ

たのです）

夜に妻が帰宅してから心不足もあってか、痛みも一段と激しくなり、一向に緩和されないままでした。そして顔が火照（ほて）り頭も重く熱（ねつ）があるように感じました。思い出したのは、自前で自分専用に預けておいたソフトアイスノン二個でした。一つ持って来てもらいました。ところが、暫くしてアイスノンの当っている頭部が痛くなって気が付いたのは、堅いアイスノンだったのです。自分のソフトアイスノンを持って来てもらうように頼んだのですが聞き入れられませんでした。

手術後に居た場所は、ナースステーションの入り口脇の処置室兼薬置き場だったのです。

病室としての機能は殆ど無い所でした。集中治療室では全くありません。

大手術を行（おこな）った人を何故ホットケ様なのでしょうか疑問です？。看護婦を呼ぶのに介助バーを揺らして音を出し、暫くして気が付いてもらいました。看護婦の言い訳では、「まだ冷えていない」との事でした。僕は嘘だと疑い感じました。きっと他人に貸したのではと勘繰りました。

次の日、ガス（おなら）が出たら朝食（普通はお粥）が食べられるので、期待していました。

看護婦は「ガスが出ましたか」と聞いてくれました。僕は「出た」と答えると食事を持ってき

てくれました。しかし手の届かない遠くに置いたまま九時になっても来てくれません。見かねて担当では無い男性の看護師が食べさせてくれました。三十八時間経っての食事です。有難く嬉しく思いました。その日に病室の定位置に戻り落ち着きました。

激痛にはソセゴン（準麻薬系痛み止め）を一日三本三日間利用しても良いとの事で使用させてもらいました。それでも激痛は我慢出来ないくらい辛かったです。五月二十四日　術後一週間目の体重三十九kgでした。（大腿部膝上十八cm七kg切断したからです）

ヘモクロビンA１c九　四　γGTP百五十三　GPT百八十二　GOT六十一　蓄尿中CPR百十四μg／日

四日程して起きて食事を摂るようにベッド上に座る事にしました。まだ身体のバランスが取れないので背中にマットを沢山置いて座って食事を食べました。

食欲がなく何時も胸がムカムカ吐きそうで下痢も続きました。

そして自分でも驚いたのですが、子供のころ覚えていた「俳句」を思い出し手本として、頭に浮かぶまま書いてみたのです。勿論正式に習っていないので全くの我流です。いままで所々に乗せてその時の気持ちを詠いました。　全く初めての俳句です。

［ 風神（ふうじん）は　口笛上手（うま）し　春一番 ］

Ｏ病院に入院して切断手術翌日十八日からインスリン朝夕のみ注入となりました。
その日から、朝の血糖値が百七十一にまで高くなりましたが、二十五日からインスリンの量がイノレット三十Ｒ二十単位になりました。昼・夕・夜も血糖の最高値が三百になりました。
食欲が無くて食べることが少ないのに、六月四日頃まで続きました。
その後、血糖・血圧・食欲も徐々に回復傾向にあり、体調も良くなってきました。
しかし気になり出したのは、右足のアキレス腱部位の潰瘍です。
アキレス腱がハッキリと丸見えになり、脛骨（けい）や腓骨（ひ）まで見える鍾乳洞のようになっていました。
その右脚について、医師に伺いますと「回復は無理」ですと告げられました。
二日程悩み苦しみましたが、右脚の切断手術を決断したのです。この頃より起き上がるのに両肘を使って寝起きしていました。後に手術を受ける大惨事を引き起こします。

㈡ 右膝下部切断

右足切断を自分自身決断させたのは幾つかの要因が在りました。最大の要因は、時期との戦いでは無いと思いました。痛みを一生背負って感染の恐怖に戦（おのの）き生きていかねばならない事は普通

ではとても耐えられないと考えました。大きな決断に直面したのは八回目です。
本来五体満足に生体を持ち合わせているものが失われて機能しなくなることは恐ろしいことです。今でも車椅子生活には違いが無いが、総て両足が無くなる事に苛立（いらだ）ちを隠せませんでした。
今回切断を決断しなければ何時になるか全く見当がつきません。それに加え体調も良くなっているので、今を逃しては最悪になると思いました。
六月十一日の血液検査は、γＧＴＰ八十五・ＧＯＴ三十五・ＧＰＴ百三・ＣＲＰ ○ 三　血糖値百五十四
尿糖（尿に糖が排泄されているかどうか）＋　で良い方に回復していると思い、手術の意思を伝えました。
二日程して主治医は、「手術が六月二十一日右膝下切断」と決定した事を告げに来ました。
僕自身にとってもその日に向けて万全な体調に標準を合わせ頑張るぞ　と心に誓いました。
医師に「幻肢痛（げんしつう）」のことを尋ねました。
すると、「切断前の痛み特に長期に渡って感じている場合に、脳が痛みを記録しインプットされてしまい、誰にも理解されず、誰にも治せない。ただ自分の気持ちをコントロールすることで痛みが軽減すると思う。」と話してくれました。

その後新聞に、『幻肢痛とは、失った躰の一部分があたかも存在するような幻肢覚とともに痛みを感じる状態を指す。幻肢痛の発症早期には、帯状疱疹後の神経痛と同じ仕組みによって痛みを生じるが、さらに痛みが長期に及び加えて、切断手術を受けるまでの間に強い痛みを感じていたほうが、幻肢痛を生じやすい。』（近畿大麻酔科講師・祐斎堂森本クリニック医師＝森本昌宏）から新聞文章を引用させて戴きました。正にその通りなのです。

六月十五日　朝食は延食になり、大腿動脈への像影検査がありました。

像影検査は、手術とほぼ同じ方法の段取りで行われました。

硫酸アトロピン１Ａ筋肉注射をして、ラクテック五百㎖を点滴しながら手術室に向かいました。

ところが、六階から二階へのエレベーターの中で気分が悪くなり吐き気がしてきました。そのことを告げると、早速血圧を測りました。血圧値は百八十以上ありましたので、ちょくちょく測り一時間程落ち着くまで待つことになりました。

いよいよ鼠径動脈への像影剤の注入です。その前に麻酔剤は部分麻酔と脊髄麻酔もやって痛みはありませんでした。

意識はハッキリしていたので総て覚えています。

ただ、不思議に思ったのは、右足部の撮影に対して左鼠径動脈を狙って刺入を試みたのでしょうが、五回失敗して像影剤刺入が上手く出来ませんでした。

そして右の鼠径部に麻酔をして動脈を探り二回目の刺入で成功しました。

撮影をして病棟に戻りました。ベッドでの安静は六時間と聞かされました。

僕は微動だにせず六時間おりました。

塩酸ペチジン１Ａ　ホスミシン１ｇＴＮ　ラクテック五百㎖点滴。

六月十八日に主治医に呼ばれました。像影撮影の結果でした。

膝下十㎝での切断とのお言葉でしたが、僕はなるたけ多く残して欲しいとお願いしました。けれども像影撮影の結果では、血行条件からすると、膝下十㎝が限度だと言われました。従いました。

血糖値はいくらかの上下があるものの比較的安定しています。

血圧も悪くありません。手術決行の条件が整いました。　［**残り足　切断覚悟　梅雨の入り**］

六月二十一日　手術当日になりました。

朝からラクテック五百㎖の点滴を始める。午後三時に手術室から呼ばれました。アタラックスＰ二十五㎎１Ａ硫酸アトロピン○・五Ａを筋肉(三角筋)に注入してストレッチャーにて手術室に行きました。

手術中の点滴は、ソセゴン十五㎎に生食百㎖　ザンタック(百)１Ａに生食百㎖

ホスミシン１ｇＴＮ　ラクテック五百㎖三本を注入していました。

手術は、右膝下十㎝切断（一・五kg）　此の度は手術後病室に戻してもらうように頼んでおきました。

目が醒めた時、妻がおりました。とても安心しました。しかしその後の三日間激痛があって、痛み止めのソセゴンを朝昼夜の三回点滴していました。

抗生剤ホスミシンは三日間　パルクス（血管拡張作用）は退院日まで続ける。

しかしながら毎日の点滴針の方法は、抜き差し＝とんぼ針でした。やられる患者（僕）は一回で刺入出来れば良かったと思うのですが、三回四回と刺されると痛いし時間もかかります。

特に夕食時に影響することが屡々（しばしば）ありまして、そのようなことが繰替しありました。

右も左も正中は、ずたずたになって堅くなりました。

留置針＝サーフロー針にして欲しいと頼みましたが受け入れてくれませんでした。看護婦で刺せる人がいなかったようです。

体重も九　五kgも減って小さくなったので、僕から千五百二十kcalにしてもらいました。

インスリンは朝三十Ｒ二十単位　夕三十Ｒ二十単位になりました。一日五十単位

血糖値は、七月中の記録によると、朝食前血糖は百四十を越えたのは七回

昼前血糖は、十六回　低血糖は二回　内一回は二十に下がったことがありました。

夕前血糖は、九回で最高値は　二百七十二

百前後でも低血糖症状が出てインスリンを注入しないことが連続六日続きました。夜血糖は食後二時間半なので、百四十以上が二十六回その内二百以上が十六回、

最高値は三百十五でした。

八月に入ると朝夕のインスリン量を日によって替えて注入しました。九十以下はインスリンを注入しない様に頼んでおきましたので注入しませんでしたが、医師は十単位から十二単位・十六単位・二十単位を注入して検査していたようです。

八月十四日　Ｏ病院を午前中に退院ＴＴＯ病院に十時に転院の運びとなりました。

㊂　リハビリ病院に転院

ＴＴＯ病院では食事の事や看護婦・医師の対応に不満を持っていましたが、この度はリハビリ科なので違う雰囲気かと思い入院を承諾しました。

入院をするに於いては、Ｏ病院から三回程外来診察に行きました。

その内の一回は、まだ身体のバランスも不安定な時でした。

僕は具合が悪いので断って他の期日に変更してほしかったのですが、押し切られ行くことになりました。

案の定ＴＴＯ病院に着いても胸がムカムカして吐きそうでお腹は張るし、眩暈や頭痛も発症して大変でした。

Ｏ病院に戻ると血圧は、百八十を超え血糖値も三百を超えていました。

夜勤のアルバイト看護婦は血圧降下剤のアダラートもしっかり押し出すことも出来ないし、気持ちが悪くて吐きそうになっているのでプリンペラン静脈注射をお願いしました。

医師からの指示も出ているにも係わらず「夜中の十二時まで待ちなさい」等と言って取り繕(つくろ)いしません。具合が悪いので何回かお願いしました。でも対処してくれないのです。苦しさに堪(た)えに耐えてとうとうナースコールをしました。

すると交代した泊まりの看護婦さんが来て様子を知ると直ぐにプリンペラン静脈注射をやってくれました。横に伏せているとき嘔吐しても大丈夫のようにビニール袋を吐きたいときのために用意しておりました。

プリンペラン静脈注射の後急に吐きたくなったので、必死の思いで腰掛けました。すると同時に嘔吐しました。ナースコールで看護婦を呼ぶと背中を指すってくれ、口を濯ぐための水とガーグルベースを用意してくれました。優しい看護婦さんで助かりました。

そして一週間後、前々より頼んでおいた(ストレスから来る胃潰瘍を心配して)胃カメラ検査をお願いしていたのがやっと実施してもらえることになりました。

以前にもやったことがあるので様子は判っていたのですが、両側の足が無いのでバランスが取れない状況下では予想以上に苦しい検査でした。

検査の結果は、その場で直ぐに教えて下さいました。実際の映像や写真を見る様に言われましたが、視覚が悪いので見ることが出来ませんでした。

結果は、胃潰瘍にはなっていないにしても、糜爛性(びらんせい)点状出血が見付かりました。

それにリハビリ科では傷口が閉じないで処置を施す時には入院させないのが原則となっているそうです。

Ｏ病院からＴＴＯ病院への転院許可のため、以来二回ＴＴＯ病院の外来に行きました。何れも手術後の傷口を確かめる為です。

さて、入院した当日の夕方主治医と担当医が診察に来て傷口を診ると、「これは駄目だ傷口が塞がっていない」と言うのです。

僕はO病院での処置は全く判りませんでした。傷口を見せてくれた訳でも教えてくれた訳でも無かったので治ったものと信じてO病院を退院してTTO病院に入院したのです。

八月十五日の検査は次の通りです。ヘモクロビンA1c7.1%・総コレステロール二百七十八・HDLコレステロール四十四・尿糖卄・GOT四十七・GPT百十五・γGTP九十九　CRP〇.三三

入院中の生活は、悲惨なものでした。そして入院三日位してから妻や姉二人を呼び寄せて(僕も同席)退院を迫るのです。僕は愕然としました。が、傷口がバックリ開いた状態で退院しろとは何事か医者にあるまじき言動であると思い、傷口が治る状態になるまで入院させて欲しいと反論致しました。その事で一時的に承諾して貰い、リハビリはOTとPTをやっていました。

食事は糖尿食を考えていない酷(ひど)いものでした。

それに加え看護婦の横暴さ、医師の態度に一刻も早く退院したいと思わずにいられませんでした。そこがTTO病院リハビリ科の狙いだったかもしれません。

ストレスも頂点に達していました。そして悲劇が起きました。まず左手が肘を中心に上下に痺

れ痛み動かなくなりました。声帯麻痺を起こした時のように声も出なくなってしまいました。

食欲も無くなり、また手が痛み動かない為に起き上がって食事を摂ることも困難になりました。なのに看護婦は、僕の事を、物臭で甘えているのだと誤解をして優しくないのです。食事の時も、ベッドの背中を上げて座る形にして、お膳だけ置いて帰りました。両足が無いのに手も悪くバランスも整えられないのに強行過ぎると思いました。

眩暈を起こしてきました。言葉も上手く喋れないので意思が通じません。

僕もパニックになって、看護婦に対して『鬼』と言う悪態の言葉を絞り出すようにやっと声を出すと、反発を受けました。

それは九月六日午後からその状態が始まりました。

左肘関節を中心に熱があり、上部は肩関節 下部は全指の先まで自発痛と運動痛(指を少し、動かしても)がありました。レントゲンを撮りましたが異常なしでおしまいになって、その先どうして悪くなったのか何処が悪いのか追求してくれませんでした。西洋医学への不満と不安と不審が改めて募るばかりでした。

今までの入院で色々な病院で共通していることが判りました。それは入院時病棟で担当した看護婦の調書によって(勿論担当医の指示あってのこと)患者への看護のランク付け判断がなされ臨

機応変に対応しないシステムとなっています。僕はそのシステムの犠牲になった気分でした。
六日から痛みが出て左腕が動かなくなりましたが、右手がまだ少し動ごかせたので七日より自分で鍼と灸の治療をしました。八日・九日・十日と血糖値 血圧 体温の測定結果や日記を書いておらず、白紙でした。八日の昼と夕食を食べていなかった事がメモされていました。
九月十三日　血液検査の結果は ヘモクロビンＡ１ｃ七 〇　ＧＯＴ四十四 ＧＰＴ百十 ＣＲＰ〇 八七でした。
退院日程が九月二十一日に決まり自宅療養についてケースワーカーさんには大変お世話になりました。退院しても右足切断部の傷は塞がっていないので、消毒や処置が大変だと思いました。そして左の肘も気になります。
ここで、僕の経歴を話します。幸か不幸か、僕は、人間嫌いで動物や自然を相手に暮らせる獣医師に成ろうと頑張りました。でも残念ながら受験に失敗して次の年、畜産を学べる拓殖学科に入学しました。僕は獣医科の繁殖学の先生に付きまとい学びました。牛とか馬の大動物相手に充実した日々を送っていました。
しかし先般述べた通り両眼白内障を患い挫折を経験しました。でもこれではいけない自分を見失うな！と言い聞かせ、それを母も全力で支援してくれました。その御陰で一年の休学の後復帰して卒業論文も繁殖学の実験も取り入れ㊙を戴き卒業もしました。

独立採算性の自分一人で立ち向かう牧場に就職も決まり万歳三唱でした。
しかし最愛なる母の忠言に耳を傾けない訳がありません。僕は母の意向を汲み従いました。
自分からもその道で生きて行く方法が良いと最終判断を致しました。それが東洋医学の『鍼灸』の世界です。結局は医学に戻った形になりました。何故人間嫌いの僕が人間を診るなんて・・・と最初は悩みました。何故ならば東洋医学は、プライマルケアそのものなのです。
しかし考えると何(いず)れは年を取ってから面倒を見て貰う事になる可能性は大いにあり得ると思いました。そんな時牛や馬に面倒見て貰う訳けにはいきませんね、やはり人間です。
嫌って意地を張っているのは得策ではありません。そこで気持ちや考えを百八十度回転させ徹底的に人間に尽くそうと思いました。その様な頃、片目を失い失望のどん底にいましたが、気持ちの上で僕を救ってくれた患者の家族もありました。意外と家族中で僕の治療を受けて、お付き合いしていた家族が多く安らぎを感じて嬉しかったです。

第八章　両肘潰瘍・皮膚筋移植手術

㊀ 訪問看護と在宅医療

自宅に戻り最高に嬉しかったのですが、帰宅した夜九時頃、何が何だか判らなかったのです。

下腹部から両股（りょうもも）と車椅子のマットにかけて全面ベトベトに濡れているのに気が付きました。

始め食事の野菜スープをこぼして濡れたかと思っていました。

でも左肘に痛みを感じて探って視（み）ると、左肘の皮膚にポッカリと穴が開いて多分潰瘍が出現してそこから膿（うみ）或いは滑液（かつえき）が多量に噴出して濡れたことが判りました。

その夜から左手が痛みと共に動かなくなって、妻に車椅子からベッドへの移動やトイレの時のトランスファーも総てやってもらい食事を食べさせて薬も呑ませてもらう有様でした。

一週間程は自宅の生活リズムを取り戻すのに苦労しました。

ＳＡＢＭ病院から月に一回在宅医療でＳ医師の診察を受け、週に二回訪問看護師が来て手当をしてくれました。平日の昼には総菜屋さんのお弁当 夕食は(水・金曜)にヘルパーさんが来てくれることになりました。朝と水金以外の他の曜日の夕食は妻が作ってくれます。

インスリン量は、朝夕二回 三十Ｒ各二十単位注入は替わりません。

血糖値は十一月三日まで一日三回測っていました。血糖値は百前後の時も偶（たま）にありますが、百四十から二百前後の値が多くありました。

相変わらず左肘潰瘍の傷口が治らないのです。起き上がることもシャワー浴も出来ません。

その内右肘を使って起き上がろうとしていました、自分でも気が付かなかったのでしょうか、右肘にも潰瘍の傷が出来てしまいました。

しばらく全くの達磨状態になり、トイレや食事もままならない日々が続きました。

でもリハビリのつもりで頑張ってパソコン教室に行くことにしました。十月十二日(土)から一週間に一回の割で行くことになりました。とても楽しくて嬉しかったです。

それから一ヶ月後の十一月十日(日)より陶芸教室に通うことにいたしました。

これもリハビリＯＴのつもりです。それに外に出て空気を吸い日光を浴び閉じこもりがちな平日の気晴らしにもなると思いました。楽しくて元気が出てきました。

十一月四日より血糖値測定が朝夕二回となりましたが、インスリン量に変化はありません。
血糖値は百四十以上二百前後や二百五十以上の事もあり高めが続いております。
やはり食事の内容でハッキリ違うと感じました。制限したカロリーの中で如何にして五大栄養素のバランスを徹底するかで克服しようかと思いました。
しかし病院の外来に行った時の食事に困惑しています。時間に食べなくてはとか、栄養バランスやカロリーの事で悩んでいます。
病院の食堂で糖尿病食を考えている所は在りません。気を付けて半分程に減らして食べても必ず二百五十を超える血糖値になります。やはりストレス要因が深く関わっていると思います。
さて十一月十九日の血液検査の結果はつぎの通りです。
朝食後三時間血糖百八十九　ヘモクロビンＡ１ｃ六　九　総コレステロール百八十六　ＨＤＬコレステロール三十九
中性脂肪二百七十八　白血球（ＷＢＣ）七千百　ＣＲＰ一　四八　の数値を診る限り、細菌やウイルスによる炎症は間違いないと思われる。
身体的には、両肘の潰瘍に菌に侵されていて激しい痛みを伴っていた。　ＳＡＢＭ病院内科の在宅医療で診療を受けていましたが、整形に関しては病院に行くことになり、診てもらいました。
僕はＭＲＩかＣＴ撮影を希望したのですが、必要無いと打ち消されました。

主治医の内科医師も整形外科医師に同調したのです。　それから一ヶ月痛みと闘い十二月十六日Ｏ病院整形外科のＥ医師（足の切断手術の主治医）に両肘の様子を診て貰い、早速ＭＲＩ撮影をしました。結果は、肘関節の骨まで侵蝕されており手術が必要であるとのことで、肘関節への皮膚移植手術をする為に新たにＯ医師が主治医になりました。
入院手術日はまだ決定していませんが、手術方法を教えてくれました。その話しによると、移植の皮膚を鼠径部から持ってくるとのことでした。僕は頭をハンマーで殴られたようなショックを受けました。そして次の外来診察は、平成十五年一月六日午前中に来る様にと言われました。
それからずっと鼠径部から皮膚と筋肉移植の事が気掛かりで、思い切ってセカンドオピニオンで意見を聞きたいと思いました。
一月四日　ＳＡＢＭ病院整形外科にセカンドオピニオンとして行って来ました。
話しを伺うと、やはり鼠径部からが妥当だと申しておりました。僕は腑に落ちない気持ちです。諦めた訳ではありません。その日の血液検査の結果は次の通りでした。
朝食後三時間血糖値二百一　ヘモクロビンＡ１ｃ七　五％
白血球（ＷＢＣ）一万二千九百　ＣＲＰ　〇　八五　と炎症が増強しています。
この検査結果は一週間後に明らかになったことです。二日後（一月六日）にＯ病院での診察の時

には判らなかった検査結果です。
僕自身は、かなり身体の具合が悪かったと感じていました。医療的処置は何もないままでした。
それでも気力なのか、バレェ観賞に行って夜帰る事もありました。また日曜日には陶芸教室に行っていました。パソコン教室は先生が自宅に来てくれたので大助かりでした。
さて血糖値はと言うと、朝夕共に百五十を超えている日がほとんどでした。一月十七日からインスリンの量が朝二十四単位・夕十六単位に変更されましたが、一日のインスリン量は四十単位で替わりません。
一月二十日にO病院整形外科O医師に診察を受けました。
両肘の傷を診てイソジン消毒とイソジンゲル(これも消毒剤)を塗付して外来看護師によって包帯交換しました。肘関節なので可動域を考えガーゼでくるみ伸縮性のあるテープで止めて欲しかったのですが、意気なり包帯で巻きだしたのです。こうして下さいと言ったのですが聞き入れません。当然の如く巻き終わった時点で、直ぐにズレて外れました。また最初からやり直しです。時間と手間暇を無駄に使っているのです。最後に止めたテープは伸び縮みしない紙テープでした。お聞きするとそれしかないとのことでした。
仕方なくそのまま自宅に戻りましたが、帰る途中でズレて傷口保護の役目が立ちませんでした。

毎回そうでした。それからは、伸縮のあるテープを自分で持参する事に致しました。
入院日と手術日をお聞きしました。
入院は二月十二日 手術は二月十八日と決まった事を告げられました。
また二月五日に診察に来るようにと言われました。
二月五日O病院整形外科で診察を受けると、両肘の傷口を診て終わりでした。
僕としては、右肘もＭＲＩ撮影をして手術の方向性を確認して貰いたかったのです。
十二月十六日に左肘のＭＲＩ撮影だけで手術が決まりました。でも納得が出来ません、両肘手術なのに右肘の確認も無く不安が残りました。そして入院日も十二日から十五日に変更を告げられました。僕としては入院の為の準備の一環として、ハンディキャブに車椅子対応の車両を予約しておりました。それも予約変更を行い、付き添いの妻の都合も確かめなくてはいけません。
医師は自分の立場だけで物事を決め、弱い立場の患者と話し会う事をしないのです。話し合う機会も全く作りません。三分医療の悪評は改善の見込みが無いままです。
コミュニケーションがありません。一方通行を逆送して自分が正しいと言っているみたいです。
患者は言われた通りに行動しなくてはいけない立場なので弱いものです。従うまでです。

㈡ だるまさん

二月十五日午前中O病院に入院 個室を用意してくれました。

両肘同時の手術なので、両脚に加え両手が当然使え無くなり食事は基よりナースコールも出来ないと予測されます。

婦長(部長)の話しによると、妻に、病室に泊まり込んで三度の食事の介助を行うことで差額ベッド料を徴収しない条件を提示されたようです。妻は仕事を休めないので、姉二人と兄嫁と友達に朝昼夕の食事介助をお願い致しました。会社には、病院から通いました。三週間みっちりローテーションを組んで食事介助に来て下さいました。本当に助かりました。感謝しております。

気になる体温は入院三日前には三十四 六℃と低体温でしたが手術前日になって、三十八 二℃まで上がり手術を延期する事態にまでなりました・・・。

入院当日午後に、外科の医師が訪れました。いきなり(その様な事を聞いていましたが急に本日とは驚きです)右の頸部に点滴用にと、針を注入しました。あッという間の出来事で考える暇を与えない考慮だと感じました。

これＩＶＨ［中心静脈栄養(高カロリー輸液)］は、カテーテル(点滴用の細い管)で鎖骨下部から挿入して上大静脈に留置する方法。

二月十八日手術当日となりました。両足を切断したことで最後の手術と思っておりました。まさか両肘の手術をするなんてまったくの計算外でした。

これまでの手術は十四回、今回で十五回目となり、全身麻酔での手術は十回目となりました。自分で数えて呆れました。

よくもまぁー へこたられず(本当は死にたいと思う事が何度かありました)頑張ったと自分で自分を褒めます。(何処かで聞いたことあるかな?)今回は、手も足も出ない「だるまさん」になります。午前中から点滴が始まりました。(トリフリード五百㎖・ラクテック五百㎖・エクサシン１Ａ+生食百㎖・スルペラゾン１ｇキット)を手術室に行きながら注入を続けます。

いよいよ三十分前に手術室に行くことを告げられると、裸になってＴ字帯を装着し、術衣を着てオペキャップをかぶり、ストレッチャーに乗せてもらいました。

そして麻酔前投薬として筋肉注射(硫酸アトロピン１Ａ・アタラックスＰ１Ａ)を注入、手術室に移送してもらいました。点滴は注入したままの状態で手術室の前で待ちました。

手術室に入ると、そこには大きな円形のオペライトか輝いていた。

周りには執刀医と他の医師・麻酔医・手術室専門の看護師の方々がそれぞれに立ち働いていました。

僕は手術台から伸びて来た板(暖かい)に背中を支えられ、乗っていたストレッチャーから手術台に移りました。手術台では寒くて小刻みに震えていたのです。術衣を脱がせられ、T字体を外し真っ裸になりました。これぞ 真名板鯉ですね。

氏名を聞かれ、答える。体温を測り、血圧計を付ける。

僕は多分右足の大腿部に取り付けたと思います。心電図を取り付ける。酸素マスクを鼻と口に被せる。これで全身麻酔による手術準備が整いました。まだ周囲には準備の人々がいるのを感じていました。麻酔医が、「深呼吸して」と言いました。僕は深呼吸を始めると、麻酔医が数え始めました。「いち・にい・さーん・・・じゅうさーん　随分数えて僕は意識が無くなりました。

手術中の点滴(ラクテック五百㎖・二十%グルコース)を注入したそうです。

術後、手術室を出て麻酔が覚醒されるまで廊下で待機していたようです。

僕は気が付いたら、ストレッチャーに横になり酸素マスクをしていたのです。その時両肘は痛くないと感じていました。術後の点滴(ソセゴン十五㎎+アタラックスP五十㎎+生食(生理食塩水)百㎖・スルペラゾン1gキット・パルクス1A+生食百㎖・エクサシン1A+生食百㎖・トリフリード五百㎖・ラクテック五百㎖)を注入していました。

ところがどっこい 二時間程過ぎた頃に痛み出したのです。

序々に痛みが強くなってきました。我慢出来なくなって看護師を呼ぶと、もう少し待ちなさいとの返事でした。　麻酔の効力が無くなると途端に痛みを感じる様になります。

僕はこの体験を何度となく経験し、何度となく恐ろしさを体験してきました。

今度で最後と思ってきました。本当に最後の体験になればと頑張っています。

もう嫌です。勘弁して下さい。　血糖値チェック 体温 インスリンは総て看護師が注入してくれました。ノートへの記入もして貰いました。残念ながら日記を書くことが出来ませんでした。

体温は、僕(三十四・二～五 四℃)にとっては、普通微熱と言われる三十六～七℃が続き高熱があるのと同じホットフラッシュを起こしました。

昼間でも夜でも絞り出せる位に、下着を三回から四回取り替える有様でした。

手術一週間目に、両肘のコルセットを作りました。二日程装着しておりました所、汗をかき蒸れて手術患部に悪影響する事に気が付いて、早速通気性の素材に替えて作り替えてもらいました。

㊂ 転院療養

三週間が立ちました。肘は、完治したと主治医は言いました。

僕は右肘に不安が残っていましたが、心太式（ところてん）に押し出し退院です。

三月八日 昼食後O病院退院からSABM病院へ当日転院致しました。

転院先の病院は、 昨年十一月に新築された病院です。五ヶ月経った今も綺麗で良いなと思いました。老人専門病院だった事を先にお断り致します。

僕は手も足も出ない達磨（だるま）状態の身体でした。しかし入院した当日、申し送りが為されなかったと推測しましたが、夕食前の血糖値測定の時、「耳で測ります」と言われました。

本当は何時も指先なので、はてなと思いましたが、「指先でお願い致します」と言うと指先にもの凄い痛みが走りました。どうなったのかと確かめると、血糖チェック用の機器では無くて注射器用の針そのものだったのです。そしてチェック用の機器が無いと言うのです。

仕方なく耳でやりました。刺した時には、さほど刺激痛が無かったのですが、血を絞り出すのに力一杯押さえるので痛くて悲鳴を上げました。

それでも測れないと言ってもう一度同じ事を実行するので痛くてたまりませんでした。

そしてインスリンを注入したのです。その時すでに僕は食欲が無くなり食べる事が出来ませんしかも手が使えません。眼も視力が〇．〇二なので見えません。

そのような患者を見ても、唯（ただ）食べろ食べろと言い、インスリンを注入前に言わなかったと怒るだけです。食べられないことだけで医師を呼び、処置には、栄養の点滴を二日間続けました。

そして三日目から食事が出たのですが、食事を口に運ぶ行為や、勿論薬も呑めません。

この時嚥解困難もありました。充分に看護や介護をやって貰えなくてこの先心配で眠れませんでした。それでも救われたのは、妻や兄姉が来てくれたからです。また訪問看護師さんも時々顔を見せ話しに来てくれましたので、相当に心が癒されました。

三月末になって右肘に痛みが出始め徐々に動かなくなりました。毎日整形外来で処置をしてもらっていました。痛くて手が動かない様子を告げても「大丈夫だから」と言うだけで、しっかり診てくれません。O病院で手術する前と同じ事（診察する事や処置する事が出来ない医師）の繰り返しでした。四月十四日とうとう我慢出来なくなってO病院整形外来に診察に行きました。

診察の結果 右肘の縫合が外れ（僕は肉の盛り上がりが非常に悪い）穴が開いて細菌に侵蝕されていました。

「また縫合しなくてはならないので、ＳＡＢＭ病院で入院を続けて抗生剤点滴を二週間受けて下さい」との事でした。「二週間後の二十八日に縫合の為、来院して下さい」と告げられました。

炎症反応もたった二日の抗生剤点滴で収まった感があります。

二十八日午前中　Ｏ病院に向かいました。Ｏ病院外来診察室に入りベッドに横になりました。

縫合手術は右肘の周りにイソジン消毒をして局所麻酔を施し、手術は痛みが無くなっているのを確かめて四針（よんはり）縫いました。その後痛みは感じませんでしたが、手術後のトラブルは今回で五回目です。いい加減うんざりしています。「手術同意承諾書」を一方的に取り付け手術そのものや手術後の処置に関しては患者に言い分を認めていないのが現実であります。そして罪の擦り（なすり）会いか、或いは黙視をしてタブーしするのが通常です。

体重は四十kgと少々太りました。両足切断部の八 五kgを加えると四十八 五kgと言う計算になり確かに太った事になります。

そもそも食事は生きる為に在ります。身体を維持する為でもあり病を治す為でもあります。特に病院では最高の気を使って調理してほしい。必ず管理栄養士がいるはずです。

五大栄養素（蛋白質・糖質・脂質・ビタミン・ミネラル）を一日のトータルで摂れば良いのでは無く、朝・昼・夕の三食各食に五大栄養素のバランスを整えカロリーを調節する事が最も有効と思われる。食事は朝食にパンを食べ昼夕とお粥にしていました。それは食欲が無いので、流し込むつもりで食べたいのと、手が使え無い為に頼みました。

病院食は野菜が極めて少なく全く野菜の出ない時もありました。塩分や糖分の多い佃煮が多かったのです。果物に関してはシロップ付けの缶詰が殆どでした。

総菜に関して例えば、じゃがいもが半分皮付きの煮えて無い生のまま出て来たり、混ぜ御飯の時（卵は食べない事を伝えてある）五目ちらしをそのままおじやで出たり、菜っ葉の混ぜ御飯の時には固まりの塩が（僕は高血圧で塩分制限）入っていました。

朝のパン食の時にも塩分の多いチーズだったので栄養士に注意しました。

他の製品と取引が無いので現在ある物しか出せませんと言う返事でした。

つまり患者の身体を良くする為の食事（食事療法＝治療食）を全く考慮していない病院だと思いました。勿論この病院だけを責めている訳では在りません、今まで入院した病院（Ｅ病院以外・Ｏ病院はそれなりに）は総て失格です。

僕は鍼灸院を経営していた関係で四国に勉強会に毎年参加していた時に、講義を受けた医院を

経営する院長と知り合いました。是非医院を見学させて下さいと申し込みました。
院長は快く承諾してくれました。早速訪ねたのです。僕も白衣に着替え診察法を見学しました。
（十五年前のことです）東洋医学の望・聞・問・切・腹診・鍼灸治療・漢方処方・入院患者の食事においては、玄米粥菜食を徹底しております。
僕にも試食として患者と同じ昼食を出して戴きました。
総ての野菜は無農薬で院内の敷地で作り、玄米は無農薬の契約栽培で作っているそうです。
院内食の作り手はまだまだ若い管理栄養士で、献立作成から調理まで一人でこなしていました。
そして外来での治療は奥様の鍼灸師が受け持っていました。その他「禅・瞑想室」での精神修養所がありました。また「笑い」が病気を自分から直す一番良い方法として取り入れ、病に立ち向かっておりました。
手術室も有るにはありましたが、先生は、一年に一回程度使うと申しておりました。
十九床の医院なので医師を含め三人で運営をしているのでしょうか?。看護師は見かけませんでした。収入は、西洋医学医院の三分の一くらいらしいです。それでも病人の為フル活動していると申しておりました。
昼食も美味しかったので言う訳ではありませんが、誰もが尊敬しあこがれる医師と医院でした。

さて話しを元に戻します。
退院が決まり、完全に治っての退院では無いので僕自身本当は厳しく大変だと覚悟を感じていました。
看護師さん達も無理じゃないかと引き留めましたが、僕の強い退院の意志は変わりませんでした。

㊃退院後の日々

平成十五年五月十日（土）　ＳＡＢＭ病院を午後退院自宅に戻りました。土曜から自宅療養が始まりました。まだ両手が使えませんので、食事や薬そしてベッドから車椅子への乗り降りやトイレへの乗り降り総て妻にやって貰いました。
御飯も美味しいし、おかずも美味しいのでついつい食べてしまいました。従って血糖値や血圧も高めになりました。
月曜日にはヘルパーさん　ケアマネさん　看護師さんが来てくれました。それから三週間程食事やトイレの面倒を看てもらいました。
退院後一ヶ月の間に血圧が百八十を越え胸が締め付けられるような痛みが出たのでアダラート舌下剤を三回使用しました。
在宅医療の主治医がお出でなりましたので報告すると、六月十日より血圧降下剤を呑むように

と薬を処方して下さりました。
血圧の方は、約一ヶ月間は 百四十／八十前後が続き 二ヶ月後には百三十／八十になってきました。時々百四十～百五十のこともありましたが食事の方も気を付ける様にしました。
一方血糖値は 八月中まで、二百を超えた夕前血糖は、八回ありましたが、だいたい百五十前後でした。朝前血糖は 百二十～百五十前後の、ばらつきのある値でした。インスリン量として一日三十二単位は替わりません。
八月九日 昼頃になって左足に激痛が起きました。我慢出来なくなって、痛み止めを呑み楽になりましたが、夜八時になって再び激痛が出たので、また痛み止めを呑みました。
この頃には既に睡眠障害不眠が起きており、デパス錠とベンザリン錠を服用して睡眠を取っておりました。
九月に入り退院して四ヶ月が経過しました。血圧 血糖値 身体の具合共に安定してきました。
そこで旅行に行って外の空気を充分に吸って来ようと思いました。
九月五日～七日までの二泊三日で妻と二人で福井・金沢・能登にいってきました。小松空港に降り立つと、金沢から移動サービスのハートいしかわの車椅子車両が迎えに来てくれました。
雄島では、島には真っ赤な欄干のある橋を渡りながら海を覗きました。澄み渡る海には魚が泳

ぐ姿を観ることができました。感激です。
そして東尋坊では雄壮な断崖絶壁を眼のあたりに眺めました。昼食は雄島を遠望にしてゆっくりと食べました。そして越前海岸を車窓から眺めつつ永平寺に向かいました。
永平寺では車椅子で中に入ることが出来ないので、いつも観たことのない寺の周りを眺めることができました。
そして車に乗り、一路金沢目指して走りました。山路を進んで、山里の風景 一面すすきの野原白山の登山口など車窓から眺めながら金沢(片町)で泊まりました。
二日目は、ＮＰＯ法人の「まいどさん」に観光案内をお願いして、車椅子で市内観光に向かいました。この日は朝から雨模様で少しがっかりしていましたが、カッパを着て出かけました。
兼六園まで行く道すがら「九谷焼」の店や「輪島塗」の店に立ち寄りお土産を買いました。
兼六園の真弓坂口から坂を登り、林を抜けると茶室の『時雨亭(しぐれてい)』の玄関の前に着きました。正にそのとき雨が降り出しました。［**秋雨(あきさめ)かこれも好し哉 時雨亭(しぐれてい)**］不思議な体験をしました。
僕自身 〝晴れ男〟 だと思っていましたにも係わらずその時だけ雨でした。

霞ケ池の唐崎松を観る頃には雨が上がり、明治紀念之標を巡り眺望台から医王山を眺めました。
黄門橋(青戸室石の一枚石を二枚重ね石に立体感を持たせて細工してある)の後ろ右横に徽軫(ことじろう)灯籠(琴柱に見立て)を見ることが出来ました。
最後に噴水(霞ケ池の高低差よる日本最古の自然噴水)を見て江戸町通りを通って石川橋に向かいました。石川門から金沢城公園を見て天神橋を渡りひがし茶屋街に行きました。
予約しておいた茶屋(兎夢(とむ))でお昼を食べて街を巡りました。そして浅野川大橋を渡って大手堀を見ながら、尾崎神社と尾山神社を見学してホテルに帰りました。
夕食はかねて電話で予約しておりました居酒屋「源左ェ門」に行きました。
時期はずれなので『岩牡蛎』が食べられないと思っていたのです。ところが店の女将さんが、「今朝河岸で見付けたので入手しましたので生牡蠣で召し上がりますか」と尋ねてくれました。僕は早速頼んで食べました。嬉しくて夢の様でした。
三日目の朝は、八時半に車が迎えに来てくれました。
今日は十五時半 能登空港発の飛行機に乗る予定です。強行軍ですが、能登半島をぐるり回る予定

です。千里浜海岸のなぎさドライブウェーを走り、輪島の朝市に着きました。
もう十一時になろうとしていた時刻なので、ゆっくり見て回る時間が無い中で昼食を摂り、十二時には禄剛崎を目差し車に乗りました。
途中段々畑の景観を楽しみ、塩田を見たり日本海を車窓からずっと眺めながら走りました。
禄剛崎灯台に行くには相当な急坂を登る事になりましたが ハートいしかわ のドライバーさんが二人で来てくれたのでお手伝いを戴き、ゆっくりと日本海の大海原を満喫致しました。爽やかな海風(うみかぜ)を肌に感じ美味しい空気を胸一杯に吸って忘れられない想い出の旅でした。
ハートいしかわの皆さん 金沢のまいどさん 有り難う御座いました。お礼申しあげます。
両肘手術後六ヶ月目の初めての車椅子の大旅行は、健康も維持して大成功に終わり無事我が家に戻ることが出来ました。
インスリン注入に関しては、入院中は食前三十分前が規定で朝二十単位・夕十二単位を注入していました。五月十日退院して自宅療養になってからヘルパーさんが食事を作る事になりました。
昼・夕・曜日によって来てくれるヘルパーさんが違います。時間もまちまちになる可能性がありました。

僕は、食前三十分前のインスリン注入を食直前に換えました。勿論主治医には許可済みです。
ところが十月になってのある日、ヘルパーさんが、食事が出来ましたと言うので食卓に着いてインスリンを注入して食べようとすると、「お酢の物」を頼んだはずなのですが、（毎日の献立をメモに書いてあります）それなのにただ刻んだ野菜に、お酢のシークワーサーを冷蔵庫から取り出し食卓の上で振りかけそのまま食べろと言わんばかりの態度でした。
僕は急に食欲が無くなり低血糖を起こしたのか気持ちが悪くなってベッドに横になりました。
事務所に連絡が取れたのか、責任者が来て献立通りの夕食を作ってくれました。
僕は食べました。その事件があってからインスリンを食後注入する事にしました。
主治医にも連絡して了解を得ております。前述した、病院での入院中の低血糖失神事件を思い出したからです。
当然血糖値が高くなる或いは高いのが続く場合に恐ろしい病気を引き起こす事は間違いありません、食事や運動が血糖コントロールに絶対必要です。
でも一度糖尿病になるとインスリン注入による、血糖コントロールになり、加えて食事療法や運動療法（僕は車椅子なので充分出来ません）が不可欠です。量的なことは、その人によって様々に違います。適量が決まるまで数ヶ月から一年の経過が必要てす。

僕も一年かかりました。またこれからどの様に変化するか余談を許せません。
さて、僕はリハビリと運動や日光浴を兼ねて、土曜日は、パソコン教室に午後十二時半に出掛け四時に帰ります。
日曜には陶芸教室に行っていました。「行っていました」と言うのは、陶芸教室の事です。
往復二時間の道程にハンディキャブの車椅子対応車両を利用していました。
お金も大変ですが、五時間以上尿を出さない事が多く、つまりトイレに行かない我慢をしていたのです。あまり良くないことだと判っていましたが、水を飲まないで過ごしていたのです。それは全くと言ってよい程、悪い習慣になっていたのです。
金沢旅行から七ヶ月が経過した翌年四月に、千葉県の木更津に日帰り旅行に行って来ました。
此処には大学時代の友人が陶芸の窯を開いていました。元々は養豚所を経営していたのですが、途中牛肉生産農家もやっていたそうですが、ふと思うところがあって 上総焼窯元 『久遠窯』 を開きました。赤松を 薪（たきぎ） に使用する本格派の登窯です。
僕は、実際に本物を見るのが初めてなのでわくわくしました。
行く日程や何人で行くかなど連絡を取り合い、そして大学時代の仲間を誘って行くことになり、

妻も同行しました。
当日の天気は、風もなく快晴でした。ドライブ日和と言うのか、最高です。
途中で「海ほたる」に立ち寄り、海を眺めて気分爽快になりました。窯には十時頃着く予定にしていたのですが、着いたのは昼になってしまました。
友達は待ちくたびれた様子でした。申し訳なく思っています。　早速友達八名でテーブルを囲み［ミニ同窓会］となった次第です。
その後 陶芸教室で陶芸を教わり、皆それぞれ作品を仕上げておりました。一番慣れていると思っていた僕が、なるたけ薄く作りたいと手こずってしまい一番遅くなってしまいました。
「焼成法はどうします」と聞かれたので、「焼き締め」とすかさず答えました。やはり、せっかく登窯で焼成してもらえるのでしたら、焼き締めが憧れでした。
広々とした、見える限りの土地を所有し、とても眺めの素晴らしい所でした。
お土産に友達自らの作品(掘り出し)抹茶茶碗を戴きました。
自宅に戻ったのは、午後七時になってしまいました。でも本当に楽しい一日でした。
その後の体調はすこぶる良好で酷(ひど)く悪くなることはありませんでした。

ただ両足の断端部の痺(しび)れとチリチリする痛みが常にありますが、時々幻肢痛の酷(ひど)い激痛になることがあります。
毎朝六時から六時半頃に起床してコップ一杯の温い白湯かほうじ茶麦茶を飲みます。
お小水をして血糖値を測ります。そしてパイロゲン一杯。
そして朝食は、六時半から七時にフランスパンを一切れ、温野菜(ブロッコリー・人参・パプリカ)と蛋白質(魚か肉)それにタンポポコーヒー一杯です。
昨年の十一月十七日より僕の希望でインスリンを朝食後二十単位 夕食後十単位注入することになりました。食前に何故インスリンを注入するのですか判りません。生体では、食事を食べると分泌されるものです。
僕は、食前にインスリンを注入していた後は、食欲が無くなることがあり、低血糖を起こしたことが多々ありました。そこで、食後にインスリンを注入することで食欲不振と低血糖を防いでおりました。
食事は、朝 六時半・昼 十二時・夕 六時の三回で、一食五百kcal前後で一日千五百kcalにしております。

以前は、カロリーを気にして良いとしても、ビタミンやミネラルの不足が心配なのでサプリメントを利用しています。ところが下痢が続きお粥や煮込みのうどんそしておじやなどを食し、或いは一食抜くこともありました。そこでサプリメントを点検してみました。

基本的に僕は、大粒の錠剤が嚥解困難なので、小粒か、噛み砕けるか、粉末状のものでした。

錠剤になっているものの中には多くの「結晶セルロース」を混入して凝固させておりました。それだと感じた僕は殆ど栄養素百％の粉末状に替えました。

それから間もなくしてＫＧ大学病院の漢方クリニックに通い現在は、漢方生薬(煎じ湯液)を処方して貰っています。

一回目は、煎じ薬を取りに行けなくてツムラの顆粒(黄耆建中湯)をもらって一ヶ月呑みましたが効果はありません相変わらず腹部が痛み下痢が続きました。

そして二ヶ月目(四週間後)曜日が変更になったので主治医がＷ医師に替わりました。やっと煎じ薬をもらいました。

今回は(黄嗜建中湯加当帰)で当帰という生薬が加えられました。

冷えやお腹もだいぶ安定してきました。

三ヶ月目はウチダの附子を一加投与して戴きました。この頃には、下痢も治まり冷えも解消に向かっていました。

四ヶ月目は、附子を二倍に増やし冷えを解消する処方を強化してくれました。

後に判ったことは、附子は毒性が強く僕は腸が弱いため下痢をする可能性が高いため、包附子を使うことを漢方薬専門店で教えてもらいました。

冬になると足がとても冷え痛むので、通常のゴム性の湯たんぽとパイロゲンの紙パック二個を利用した湯たんぽを入れて貰います。

頭部ＣＴの検査結果は、脳外科の専門家に内科医が聞いた話として、僕の六番目(中心線)の写真を見て、「硬膜の変形石灰化と脳室の拡大によって脳萎縮があり、更に松果体の石灰化が認められている。」との診断結果のお話でした。

医療機関では、一週(月・木)に訪問看護 とリハビリ(火・金)に来て貰っています。そして月一回の訪問医療の診療と二ヶ月に一回の血液検査を受けています。

ヘルパーさんには、月曜日から金曜日まで、昼と夕の食事調理など生活援助と身体介護で来て貰っています。

あとは、一日中車椅子に座っていることが多くなって褥瘡（じょくそう）が発症しました。

最初は、低反発マットを使っていたのですが、何時も臀部に当たる所が凹んだ儘（まま）になって使えなくなりました。そこでゲル状のシリコンマット（アクションパッド）にしてみました。二十丸ではないのですが、こんなところかなと思って使っています。

はーい 今は、パソコンのワードで此の文章書いています。

㊄叔母さん従姉妹へ逢いに札幌に

また 七月中旬に北海道（札幌・函館）へ四泊五日の大旅行を計画しました。紹介致します。なにせ車椅子なので、空路の予約・ホテルの設備（トイレ・風呂）や受け入れ体制 移動介助 移動中の食事・トイレ そして僕自身の体調 血糖測定 インスリン注入（朝夕二回）・薬・サプリメント等々楽しんで日程作成に取り組みました。

計画には札幌の従兄弟と従姉妹の四人が知恵を与えてくれたので、スムーズに実行の運びとなりました。

当日は、羽田発八時 新千歳九時半着の航路で妻と二人で向かいました。

新千歳空港には、従兄弟の二人が迎えに来てくれまして、久しぶりに会えて嬉しかったです。従兄弟の車は、八人乗の大きな車でした。僕を助手席に担ぎ入れてくれると、後部座席を倒して車椅子を入れてくれました。早速「支笏湖」に向け出発しました。途中眺めの良いところで降りておんぶして写真を撮ったりして楽しみました。

支笏湖は、二回目ですが、以前は静かな湖畔のイメージだったのですが、今回はガヤガヤして五月蠅（うるさ）くて ガッカリしました。

昼食には休暇村のレストランで、ゆったりした気持ちになって、従兄弟の二人はそれぞれの好きな物を食べ、我々二人は煮込みうどんを食べました。

北海道での第一食目、とても美味しかったです。

その後、支笏湖全体と奥の山並みが見渡せる展望台へ背負って連れて行ってくれました。従兄弟の優しさと同じ目線で眺めた雄大な景色が目に焼き付いて忘れられません嬉しかったです。

今日泊まる予定の札幌のホテルにチェックインをしました。ホテルの喫茶店でコーヒーを飲みながらしばし休息を取りました。夕食までの多少の時間を話し合っている時、ふと思いたち相談すると、チョト厳しいかも知れないけれど、行きましょうと言ってくれました。

それは従兄弟の家です。どうしても叔父の仏前に来た事の報告をしてお線香を上げたかったからです。願いが叶って嬉かったです。涙が自然に溢れました。

予約してくれた夕食の店には遅くなりましたが、従姉妹の姉も駆けつけて戴き「焼き蟹」を中心に夕食を囲み、尽きない話で時間を忘れました。

次の日は大イベントが待ち構えております。消灯。

第二日目　起床　体調は頗(すこぶ)る良好　今日は、叔母とお会い出来ます。

叔母も体調が悪かったら会うことが出来なかったのですが、良いので安心しました。

今日は、雲一つ無い晴天　叔母と従姉妹と従兄弟の五人に僕と妻の七人で「積丹半島」にドライブ旅行へ行ってきます。

目的？ウーンそれは雄大な日本海の景色でしょう。

それにもう一つ、「ウニ丼」もかな？ま・・・楽しんで来ます。

積丹岬へ向けて出発進行　積丹半島と言ってもとても広大で目的地にひたすら走る事になります。右手に日本海を眺めながら走る(この道路は台風の高波で大きく崩れ寸断しました)と色々な形をした自然岩石の波の彫刻に驚き楽しく観ることが出来ます。

一路島武意(シマムイ)海岸を目差します。

此処は「鰊(にしん)」の猟場で大漁が続きました。浜から鰊を運ぶために、三十メートルのトンネルが明治二十八年に完成しました。

今は、観光に使われています。トンネルは「くの字」に曲がっているため懐中電灯が欲しいくらい真っ暗です。

トンネルを抜けると其処は、「雪国」だったでは無く「日本の渚」百選に選ばれた「シャコタンブルーの海」岩石が程良く配置され、贅沢な眺めです。

誰もが行ってみたいでしょう。ところが僕は行きました。

雲一つ無い快晴の青い空そしてシャコタンブルーの海の色。

その自然の美しさは言葉で言い表せません。絶対に一度は脳裏に焼き付けて置きたい大自然の光景だと思いました。

昼食は、七人そろって「うに丼」と「ホッケ」を食べました。さすが本場の食材は、新鮮で美味しかったです。

積丹からの帰り道、小さな動物が道路に横たわっていました。びくともしません。キツネなのかタヌキなのかはっきりしませんでした。

従兄弟は車を降りて確かめると子供のタヌキだと言うのです。血も流れていないのですが、車に撥(は)ねられた様子でした。せめても「狸寝入り」だったら良いのに・・・と心で合掌。

思い出すと今回僕が従姉妹に、丹誠込めて作陶した「狸の人形」の置きものに入れ替わった気がしないでもありませんでした。

三日目の今日は、午後三時の列車で札幌を発ち大沼に行く予定にしています。

午前中は、厚別の森林公園と開拓の村に行きました。

開拓の村では、明治・大正の道内に現存していた建物や生活様式が細部に渡り移築再現されていました。あたかも自分がタイムスリップしたかの様です。

レールの上を馬が引く「馬車鉄道」が走っています。乗ることが出来なかったので残念でした。

雪のある冬では、「馬ぞり」になるそうです。

途中歩いていると、昔懐かしい「茱萸(ぐみ)」の実が熟して食べ頃に実っていました。従姉妹の姉が

採ってくれましたので食べてみました。僕が知っていたグミの実よりも大きく立派なものでした。

その他開拓の村には、農家や酪農畜舎・写真館・理髪店・巡査派出所・炭焼小屋・そば屋・旅館・新聞社・酒屋等々見る所はとても多くて、観て回る時間を充分に取る必要があります。

酒屋では、抹茶とお菓子を振る舞って戴きこの上ない喜びを味わいました。

そして母の故郷江別に行きました。

江別には、従姉妹の姉が住んで居るところでもあります。

昼食には、山小屋風のお洒落な造りで、花のいっぱい咲いている店に誘って下さいました。二階なので、従兄弟がおんぶして昇ってくれました。

食事の仕度が出来る間にこんなことがありました。従姉妹の姉の計らいです。

妻も従姉妹も一生懸命シャボン玉を楽しんでいました。

シャボン玉で思い出しました。

クイズ形式のテレビ番組でタイ国の小学校低学年が、学校に行くとき持ち歩くものは何でしょう?。という答えに「自然のシャボン玉の木(ヤトルファ・カルカス)」があることを初めて知って観て驚いたことがあったのです。

さて札幌から列車に乗り三時間で大沼公園駅に到着しました。

駅には、ＮＰＯ法人の「さわやか」さんの三人が車二台で向かいに来てくれていました。今回の介護責任者の友人の駅長さんが歓迎してくれました。挨拶を交わして早速車に乗り込みました。

大沼・小沼公園をドライブしながらホテルに到着。

元気一杯だったので直ぐに温泉に入れてくれました。湯船には、責任者が僕を抱いて一緒に入ってくれました。

もう一人の介護人が身体を石鹸で洗ってくれました。そして二回目の湯船です。

何と気持ちの良いものか夢気分かな・・・六年降りに浸かる湯船しかも温泉。

超―嬉しい 超―気持ち良かったでーす。最高な気分でした。

そして旅行の日程としては、四日目の朝がやって来ました。

天気は晴天　身体も快調でーす。さて今日は、僕が学生時代に牧場実習で何度となく通(かよ)った牧場に、懐かしい昔の想いを掘り起こしに行きたいと思っています。

また「森」の有名な いかめし を買って昼食に食べようと思います。

ホテルには、朝八時半に「さわやか」さんで車を二台連ねてきてくれました。

今日は車椅子から助手席に座らせてもらいました。

眺めも良くて快適です。牧場に到着 想い出深い事務所の建物は、大方そのまま残って使用している様子でした。

当時の僕を知っている人がいると嬉しいと思いました。

しかし事務所の人も一番古くからいる人でも僕を知る人も、僕が知っている人もおりませんでした。

牧場を眺めると嘗(かつ)て牛舎だったところは押し潰れ見る影もありません。宿舎も跡形もありません。只今は、乗馬用の馬が十二頭とシャロレー牛の牡と雌に今年生まれた仔牛の三頭が放牧地にいる と言うことで実際に観ることが出来なくて残念でしかたありません。何故か夢破れ、がっかりして 気 が抜ける様でした。

さて、気 を取り直して旅行は続けます。森町で いかめし を買いました。

太平洋の海岸線を左手に眺めながら函館へ行きます。途中茅部町で間歇泉(かんけつせん)を見物しました。

もの凄い勢いで吹き上がる熱泉は、たった一分程ですが、自然の力は偉大でビックリしました。

南茅部町の「道の駅」でトイレ休憩を取って、海を眺めながら昼食の いかめし を芝生の上で円(縁)になって食べました。作り経(た)てでまだ温かく、とても美味しかったです。海の景色と空気も何よりのスバラシイ調味料だったと思いました。

最後の目的地 トラピスチヌ修道院へ行きました。

僕は函館に何回となく訪れていたのですが、トラピスチヌ修道院は初めてでした。今は完全に観光地化されて荘厳(そうごん)さは、伺(うかが)えませんでした。それにクッキーが有名なので買い求めましたが、神戸の修道院で作った物だと聞かされてとても残念に思いました。

今日の最後の見学地「五稜郭」に行きました。此処も僕にとっては初めてだったので大変に興味がありました。

星型の城郭の全体像を見る事が出来ませんでしたが、何となく感じ取ることがあり、歴史を垣間(かいま)

見ることが出来て満足しました。旅館に到着と同時に雨が降り出しました。

玄関には歓迎ムードで大勢の従業員が出迎えてくれました。

身に余る歓待で頭の中が真っ白になってしまい、はっきりと思い出せないくらいでした。

そして部屋に通されると、車椅子のまま部屋に入れるようにスロープが置かれ、畳部屋でも車椅子が入る必要な部分を板の間に替えてベッドが置かれていました。不自由の無いように配慮してくれました。早速露天風呂に入れてもらいました。昨日と同様に抱き上げて湯船に浸かりました。ファファと身体が浮いて宇宙遊泳している様です。何と気持ちの良いことを経験したことでしょう。「さわやか」さんありがとうございました。

夕食は、半分も食べることが出来ないくらい数のおかずが食卓に上り、気が遠くなってしまいました。睡眠はゆっくり取れました。

旅行は天気も上々、身体も上々素晴らしい五日目の朝を迎えました。朝食には、本場ならではの「烏賊(いか)ソーメン」が食卓にあって、それは最高のご馳走を味わいました。

旅館の皆さんは、バリアを感じさせない親切さと丁寧さに心身共に癒される扱いをして戴きました。有り難うございました。感謝申し上げます。

朝八時半「さわやか」さんが迎えに来てくれました。
早速想い出の「函館の朝市」に行きました。昔とすっかり様子が変わって、全く新しい朝市に来た感がありました。
呼び込みの掛け声に少しうんざりしましたが、気を取り直し、見て参りました。蟹専門店では、若い店員さんが、蟹の一番脚足をご馳走してくれました。
とても美味しかったです。記念に蟹を抱えた写真をデジカメで撮って送りました。
それから函館山や外人墓地などの函館市内を巡り、海を眺めました。

（後にこの津軽海峡では、台風に襲われ間近の家が海に浚（さら）われたそうです。僕が見たのが最後になりましたが、脳裏に焼き付いています。）
昼食は、海の見えるホテルにて「五穀粥」を食べ、「さわやか」さんの事務所に寄ってスタッフの皆さんと笑談しました。
皆さんの介護に掛ける意気込みを感じました。やはり、トップの介護と障害福祉に対する心情が介護を受ける人の心を和ませてくれます。感謝致します。
本日の帰路は、函館空港発十九時四十分です。まだ時間はたっぷりあるので、普通の観光では

あまり行かない「雨降り山」に行くことになりました。この山は晴れたことが非常に少なく不思議な山です。晴れていると、周り三百六十度の見晴らしがあって素晴らしい景色が期待できます。
いよいよ登り始めました。ところが途中から霧が瓦斯（がす）ってきました。真っ白で視界はゼロです。頂上の見晴台では霧に混じり雨も降っています。残念ですが下るしかありません。
ところが、下る途中霧が晴れると、放牧中の牛（褐毛）の群れが悠然と牧草を噛んでいました。とても嬉しい光景を眺めたのが想い出になりました。
その後「さわやか」さんは函館空港に送ってくれました。想い出を山ほど作り、美味しいものも沢山食べました。健康も維持することが出来て東京へは無事戻りました。
その後の東京の生活は、浅草の仲見世見物と人力車へ乗る経験をしました。
上野の森美術館では、「兵馬俑展」を観ました。ついでに動物園に行って、ゴリラを目的に観て回りました。楽しかったです。
しかし残念なのは、陶芸教室を止めたことです。
教室に行くには往復の時間とトイレに大変な努力が必要でした。
教室でトイレに入ると三十分は係ますので我慢していました。身体の調子を悪くして気力が失

われていたことは確かです。
陶芸を体験する事で色々と学びました。僕の生き甲斐の一つでもあったので非常に残念に思っています。
その後の日曜日は、自宅で過ごしたり、新宿花園神社境内の骨董市に出掛け、ついでに末広亭で漫才落語を観て過ごしていました。
「アレグリア２」のサーカスを観に行きました。お目当てのブラジルから出演していた人に、花束を差し上げることが出来てとても嬉しい想い出になりました。
今後も食事時間を一定に保つように心懸けて、食事のカロリーと栄養のバランスを考えて血糖値の安定を保たせて行きたいと思っております。インスリン注入器は、ノボ・ノルデスクでイノレット30 R 注を使用しています。血糖チェック(グルコース測定)は、簡易血糖測定器アキュチェックコンパクト容器試験紙ドラムⅡで測定しています。そして漢方薬(煎じ薬)を利用しています。
なるべく「ストレッサー」の内で解消に努め「ストレス」病に侵されない生活を志していくつもりでおり、どんな事にも前向き進むことを考え現在を頑張って生きております。
僕のように、五体五感不満足の人物でも「夢」と「希望」と「好奇心」を忘れずに生活しております。どんな事にでも挑戦して「気力」で頑張りましょう。

㈥故郷鹿児島指宿

二〇〇六年大型連休が明けた五月七日(五十九歳の誕生日)に宿泊(指宿白水館)と指宿ＮＰＯ法人・鹿児島ＮＰＯ法人に移動をお願いして助けて戴き鹿児島旅行を実現することが出来ました。
妻と二人鹿児島県民の心の温かさ豊かさに触れ、海・山・空気の偉大さ新鮮さに心を打たれました。もちろん食卓の美味さは、云うまでもありません。
僕にとって、今回の旅行は人生最後のつもりで最大限楽しみました。
一番新しい九州鹿児島指宿を紹介致します。
平成十八年五月九日から十四日の五泊六日の大旅行でした。
旅行日程は総て僕が計画致しました。宿泊ホテルや介護車と介護人をパソコンで探索します。
希望の条件が有る程度整えば電話で直接応対の反応をお聞きして善ければ宿泊の予定日と泊数そして希望を伝え、自分の障害程度を伝えて承知してもらいます。勿論障害者の車椅子室が見付かればそれに超したことは御座いません。お尋ねすることは、車椅子で利用可能な部屋を見付けてもらいます。
まずトイレに入れますか?引き戸巾六十㎝か開き戸巾七十㎝ 段差は無いでしょうか・シャワー椅子はありますか段差はどうですかなどをホテルに尋ねます。

これぞと思われるホテルに十ヶ所程電話で尋ねました。応対はそれぞれ違いました。一番大きいとされるホテルでも鮸膠（にべ）もなく断られたケースが殆どでした。車椅子対応の部屋がほとんど皆無なのです。市役所観光課 社会福祉協議会その他もろもろ探してみましたが、最後に 指宿白水館 を紹介されました。早速電話で希望を述べて予約にこぎつけました。

そして指宿では有名な砂蒸し温泉があると言うことで、話してみると従業員が抱きかかえて入れて下さるとの御返事ますます気に入り希望がもてました。

指宿では、ＮＰＯ法人ライフケアネットワークの所長 天野巧様が指宿に居る間は心配なく観光させるから大船に乗った気持ちで安心して来て下さいと嬉しいお言葉でした。

鹿児島市内の泊まりは、自治会館で身障者室を二日泊まることにしました。

入浴介護と移動介助は、訪問介護事業所ぱれっと（いきいき介護人材紹介所）の所長 桑畑チカエ様 有り難うございました。さて、旅行中の出来事やお会いしてお世話になった人のことを書いてみたいと思います。

自宅から羽田空港までは、毎回利用している介護タクシーに来てもらいました。車椅子障害者は出発一時間前に発券カウンターに来るようにと言われます。八時五分発鹿児島行きなので自宅

を六時に出発すれば七時頃に羽田空港に着きます。

鹿児島には九時五十五分着となっています。ところが霧島上空に差し掛かって下降するのを感じたのですが、また上昇したのでびっくりしました。そして機長のインフォメーションが聞こえました。どうも鹿児島空港に霧が濃いため着陸を見合わせた様子です。

それから三十分程鹿児島県上空を旋回して十時半頃着陸に成功しました。空港では多分福祉タクシーの方がしびれをきらして待っていたと思われます。十一時になって大変申し訳なく思っています。タクシーの方は大変親切な穏和で優しい人でした。空港を出発すると高速に乗り左手に鹿児島市内を眺めつつ走って行きました。

お昼御飯は、奥様の手作り弁当を持参して戴き、妻と僕と三人でテーブルのある公園で青空の下で食べました。感謝しております。

食後高速道路を降りて平川町の烏帽子山（えぼしさん） 最福寺（さいふくじ）を一番初めに見学地として参拝しました。本堂の中には、世界最大の木造仏である高さ十八ｍの座像「弁財天」が本仏として奉られていました。

七福神の一神（いちじん）であります。その他の神は、弁財天の後ろに飾られておりました。此のたびの旅

行安全と病気進行を遅らせ元気で過ごせるように御札に祈願して旅の始めとしました。
次に池田湖で大うなぎを見ようと行きましたが、車椅子では入れることが叶いませんでした。また開聞岳(薩摩富士)も雲に隠れ壮美な姿を観ることが出来ませんでした。残念です。
気を取り直して砂州の見える魚見岳に行きました。その時間砂州を見える時間では無かったのですが、撮影に程良いアングルを見付けるために行きました。結果善い所が見付かり安心しました。本日宿泊する指宿白水館は目と鼻の先の直ぐ近くにありました。到着すると、従業員の方々が出迎えて下さりとても嬉しかったです。
部屋に案内され、早速浴衣に着替え僕を抱き抱えて、砂むし温泉に入れて貰いました。十cm程掘り起こした場所に枕が添えてありました
鍬のような器具で身体の上に砂を掛けていきます。掛かる砂の重さは五kgのようで身動き出来ません。温度五十度ですが、熱いとは感ぜず程良い暖かさで背筋がピンと伸びます。十分から十五分すると汗が滲み身体の隅々まで温かくなってとても気持ちがよかったです。砂を払い落とし

露天風呂に行きました。総て抱いて移動して戴き、三日間同じことをして戴き大感激でした。
さて翌日の朝 ＮＰＯ法人のライフケアネットワークの天野巧様と工房てたか の樋高悦子様がボランティアで来てくれました。曇りがちで、開聞岳も見えません。そこでフラワーバークかごしまに行きました。
早速カートに乗り移り園内を走りました。さすがはフラワーバークですね、庭園のいたるところに花花花これぞとばかり、写真撮影に時間も忘れました。
そうです忘れていましたが、毎月違う花の味のソフトクリームを(半分)食べました。五月は薔薇味のピンク色で心に残る味でした。
お昼は、樋高様のご存じのハーブ園のレストランに案内してくれました。
そこでは、お薦めメニューの一品の『とまとのおじや』を食べました。美味しかったです。それから海側を走り開聞岳を撮影しようと試みましたが雲が邪魔して顔を見せてくれません。恥ずかしいのかなぁー それとも薩摩にはまた来なさいよ と言っているのかも知れません。また行きます。帰路は、霧に霞む幻想的とも思えるお茶畑を眺めながら進みましたが、一メートル先も見えない霧に覆われ走る道路は怖い感じでした。

【微笑みて　生きる喜びボランティア　霧の茶畑　知林ヶ島の砂州】

でも無事に白水館に戻れました。天野様 樋高様ありがとうございました。

ホテルには、明日案内して戴ける加藤様が天野様の御手配にて待っておりました。何と！加藤健様は、東京から自然と空気の素晴らしい指宿に夫婦共々移住して、福祉ボランティアグループの「太助会」の会長をしています。　三日目の朝 十時に加藤様が迎えに来てくれました。今日は、晴天に恵まれ砂州も表れる事でしょう。かねてよりアングルを決めた魚見岳に向かいました。定位置に車両を付けて戴き、車椅子に乗せてもらいました。観ると驚きです。イメージした通りの光景が目の当たりに広がり知林ヶ島への砂州を眺めました、僕は何と運の善いことかと思いました。一心にビデオカメラとデジタルカメラに撮り修めました。

砂州を歩く予定で、近くまで行ったのですが、そこに待って居て下された方は、飯伏俊英様でした。僕を負んぶして砂州を歩いて楽しませて下さる予定でした。僕は何故か、負ぶってもらい砂州を歩きませんでした。悪いからと思いはじめ、来年来たときにと何か複雑な気持ちでした。

でも日光浴して波の音を聞き青空を満喫しました。

妻は一人で砂州を知林ヶ島に向かい半分程歩いたそうです。聞くと 巾五メートル程の道が続き両

端が波打ち際なので不思議な気持ちだったそうです。　白水館に戻ると早速砂蒸し風呂に入れてくれました。三日目の晩です　のんびりと過ごしました。そして夕食の後には中国の楽器演奏を聴きました。中国服を着た三人の女性が、二胡（にこ） 杢琴（もくきん） 琵琶（びわ） の三種の楽器の演奏を、続けて一時間やったので聴きました。ビデオカメラにも修め大変楽しかったです。

時々パソコンに入れた演奏の映像を楽しんでおります。

旅行も四日目となりました。今日指宿を発ち鹿児島市に向かいます。

指宿駅発鹿児島中央駅行きは十四時三分発です。十三時に加藤様が迎えに来てくれることになっています。それまで白水館でのんびり過ごしました。

妻はプールサイドのリクライニングチェアーに横たわり潮風とさざ波の心地善い音を聞きながらすやすやとねむっていました。僕は相変わらずカメラで鳶（とび）を撮ろうとしていました。

鹿児島中央駅には、『ＮＰＯ法人生活支援サービスいきいき』の桒畑チカエ所長が迎えてくれました。早速本日の宿泊先の自治会館に案内して戴き、温泉にも入れてもらいました。（のちほど知ったことですが、桑畑様は癌手術三ヶ月でした驚きと悪かった気持ちで涙がでました。感謝致し

ております)夕食は、妻の友達に自治会館のレストランでおごって貰い得した気持ち。
五日目は、水族館と厳仙園(磯邸園)を見物しました。自治会館に戻ると直ぐに温泉に入れて貰いました。夕食は、またもや妻の友達と息子さんと一緒に自治会館のレストランで食べました。
またもやおごって貰い得した気持ちでーす「ごっつうま」ご馳走さま。
六日目 本日は、東京に帰る日です。朝食中に樋高様から自治会館にお別れに会いに来ると連絡がありました。駐車場で待つこと三分 桑畑所長様が車で迎えに来ました。
僕は車に乗り込み 暫(しばら)くすると樋高様がおいでになり会うことが出来ました。母の日ということで、生でも枯れないブーケを妻にと、持ってきて下さいました。
本当に有り難うございました。また桑畑所長様と樋高様の出会いも喜ばしいことと思っています。一路鹿児島空港へ・・・カーフェリーで桜島へ渡り錦江湾を左手に眺め垂水に着きました。垂水「道の駅」で買い物したり、桑畑所長様手作り弁当を一緒に食べました。
妻と桑畑所長様は、足湯に浸かりご満悦の様子でした。桜島は雲に隠れ優美な姿は望めず残念です。その後鹿児島空港まで送って戴きお別れいたしました。六日間の旅は無事東京へ戻り終わ

りました。

【南薩に 出会いの旅も 五月晴れ】

旅行中のことが切っ掛けで両脚の無いことに、新たに不自由を感じました。僕は、とても義足が欲しくなったのです。藁(わら)にも縋(すが)る思いで、リハビリテーション科に行きましたが、とても耐え難い屈辱的な扱いを受けました。そこで切断した病院にも相談して東京の義足を専門としているリハビリ福祉センターを紹介してもらうこととなりました。でも行くことはありませんでした。

【歩きたい 義足叶わぬ 水無月よ】

僕にとって、今回の旅行は人生最後のつもりで最大限楽しみました。
ところが地元のＮＰＯ法人の人々の「来年また会いましょう」との優しい言葉に応え自分自身も故郷のように想うことが出来ました。
何のためらいもなく「また来年帰省します」と自然に言葉になったのです。

第九章　ウェルナー症候群の診療医師との出会い

㊀検査入院

退院後の日々より、二年過ぎし日　Aテレビ局でウェルナー症候群を取り上げるニュース番組の取材に応じてほしいとの依頼がありました。

僕はウェルナー症候群の現実を多くの人々に知って貰うため　と難病指定にして戴く気持ちもあって、承諾いたしました。

取材を受ける中で、E大学医学部医師M教授と電話で会話する機会を得ることが出来ました。お話の中で診察の申し込みを依頼したところ、東京からでは遠すぎるので、C大学医学部代謝内科を紹介されました。

早速電話で問い合わせしたところ、医師と話すことができました。

平成十八年八月十八日(金曜)　C大学医学部付属病院へ診察に行って来ました。

三十八年間の念願が叶い溜飲が下がる思いです。

『ウェルナー症候群』の総てをチームを組んで精査入院して診て戴くことに決定し、九月四日に入院の運びとなりました。

入院中の精査及び処置や医師と看護師や介護の在り方について受けた自分自身の体験を語ります。

入院当日に主治医が見えられ、今まで呑んでいた薬とサプリメントを総て中止するようにと、そして次の日の朝食前と朝食後に採血がありますと告げられました。

病棟の看護師は、入浴の希望を聞いてくれました。月曜・水曜・金曜の週に三日入れてくれるようになりました。血糖測定は、普通では朝・昼・夕食前と寝る前の四回測ってくれます。インスリンはナースコールによって注入を指示されます。

僕は低血糖を避けるために食後に注入することを主治医に話して承諾を得ておりました。

血圧と体温は六時と十四時と十七時三十分と二十時に測ります。

いよいよ精査の始まりです。入院の次の日に朝食前後の採血の結果はその日の昼前に解りました。

主治医は、血液検査の結果を説明してくれました。入院一ヶ月前検査と比べ驚くべき急激な肝臓の悪化が認められました。

ＧＯＴ(35 ⇒ 205H)　ＧＰＴ(85H ⇒ 628H)　ＬＤＨ(261H ⇒ 383H)

ＡＬＰ(226 ⇒ 459H)　この時点では、主治医も何が原因なのか解りませんでした。

主治医から、最近薬に変化がなかったか疑問を投げ掛けられました。僕も考え倦ね、もしかしたらと八月十二日から一週間呑んだツムラの漢方エキス剤二種類とカネボウの漢方一種類を医師に渡しました。検査(DLST)に出すことになりました。

次の日から消化器内科・リハビリテーション科の受診　一日七回の血糖測定(血糖七検)は九日まで失敗の日を含め五日間行いました。その間甲状腺エコーや朝食抜きの腹部エコー検査を受けました。

薬は肝臓に影響の無い物を血液検査を重ねながら慎重に出してもらいました。血圧を下げるカルブロック錠16 mgと睡眠薬(ベンザリン錠5・ハルシオン0.25錠)を投与していました。しかし十一日から十六日まで頭痛頭重が続きコカール(痛み止め)を投与してもらい落ち着きました。

九月十四日から末梢の血管を拡げて血圧を下げるレニベース錠5を追加投与し、採血で確認しました。

二十日からは、アクトス錠15(体内のインスリンの作用を助け、血糖を下げる)を追加投与して採血にて負担のないことを確認しました。

お小水は蓄尿検と検尿と二分割検尿において精検を行い続けました。

お通じは七日に糞便検査を行い、結果はヒトヘモ‡で大腸内視鏡検査を受ける話がありました。

十一日には泌尿器外来受診と胸部X線撮影　十二日に眼科外来受診　十三日に消化器内科外来にて大腸内視鏡検査の説明と依頼の申し込みの確認を致しました。

十四日は栄養相談室で管理栄養士の栄養指導受診がありました。

十五日は体重測定をしました。車椅子と遠藤のトータル七十三kg

車椅子荷物を含め三十五、三kg　本人体重三十七、七kgでした。

十九日には大腸内視鏡検査がありました。

朝食より注腸造影食A(全粥二百二十g・ポンコロンうめぼし二g・みそ汁お麩)

昼　注腸造影食A(全粥二百二十g・ふりかけ二g・お澄まし汁お麩)

夕　注腸造影食B(葛湯・何も入ってないスープ・オレンジジュース)

夜二十時になるとラキソベロン(下剤)を十五滴水に溶かしてのみます。

当日は朝食昼食共に絶食です。六時に検尿をして、七時にラキソベロン十五ccを飲みます。

そしてニフレックス(腸洗浄剤)二リットルを三時間かけて飲みます。十一時まで水用便が止なく出ます。

水用便がすっかり出切ると丁度RI撮影のためのガリウムシンチを筋肉注射に行きました。
続けて大腸内視鏡検査に呼ばれました。
痛み止めを筋肉注射して下半身裸になって横向きに寝ました。黄門にゼリー状の麻酔薬を塗り内視鏡が注入されました。すると上向きなり、内視鏡が直腸 S字状結腸 下行結腸 横行結腸 上行結腸 盲腸まで到達しました。
僕は腸内を内視鏡が通過するのを感じていました。時々痛みを感じましたが、大丈夫でした。
医師は腸内をモニターで最後まで視て悪い所を観察していました。
全体的にはきれいで心配はないが直腸に十㎜のポリープが見付かったと言って、僕にも視るように勧められたので横目ながらモニターを視ると、南瓜かメロンの種型をした薄桃色のポリープを視ることが出来ました。
医師の説明では、現在悪性ではないにせよ将来悪性になる可能性があるので、出来れば除去していた方が無難でしょうとのコメントがありました。僕も医師のお言葉に賛成の気持ちでした。
二十一日かねてより希望していた和漢診療科外来に受診することになりました、和漢の医師は脈診 舌診 腹診 体温と全身部位の皮膚温を測定して判定してくれました。
当日の耳体温は、三十七．一℃で僕にとっては、微熱があり、のぼせで、左下肢断端先端部は

三十二℃以下で測ることが出来ませんでした。
医師は肝臓機能障害も考慮に入れて漢方を直ぐに処方することを避けその間血液検査の結果と主治医との調整を図ることで、二十五日から煎じ薬(桂枝茯苓丸料)を二十八日まで飲用し、採血で確認してから受診し本格的に投与を始まることにしました。二十八日の受診においては、体温(耳)も五分さがり額も三十四．三と六分下がり下肢断端部先端も三十二．一℃と観測可能な値を示し冷えのぼせの状態が改善していることが解りました。
それで肝臓機能にも悪影響が無いことも確認されました。
そして一歩進め紅花(こうか)と川芎(せんきゅう)を加えて処方し、血液検査で肝臓機能にも悪影響がないことを確認することになりました。陽中間瘀血証と診断されました。
話は二十一日に戻りますが、体内のインスリンの作用を助け血糖を安定し下げる薬［アクトス］を呑み始めました。
二十二日は四日前にガリウムシンチ筋肉注射を行いましたが、今日RI撮影検査(全身の炎症の反応を調べる)がありました。検査方法はMRIやCTと同じ様な格好のドームに入ります。しかしガリウムシンチ筋肉注射は放射能腺で気になります。

一、　ストレッチャーでそのまま仰向けでドームの中に入ります。
二、　左右の上肢は仰向けに五分程じっとしています。
三、　次に上肢を腹の上に五分程置きます。
四、　最後に上肢を万歳して五分程です。全行程二十分で撮影完了。

その後神経内科の受診がありまして、退院後十月二十三日に排尿機能検査(ウロラボ)と十二月八日に末梢神経伝導速度検査を受けるようにと指示されました。

二十七日は消化器内科の外来受診がありました。大腸内視鏡で発見されたポリープの切除手術(ＥＭＲ＝endoscopic mucdsal resection 内視鏡的粘膜切除術)の日程(二十九日)と指示説明を受けました。

前日二十八日は、十九日に受けた大腸内視鏡検査と同じ方法をそのまま実行しましたが念のために書きます。

朝　注腸造影食Ａ(全粥二百二十ｇ・ポンコロンうめぼし二ｇ・みそ汁お麩)
朝食後はアクトス　レニベース　カルブロック　漢方は予定通り呑みます。
インスリンは朝四単位　夕は中止となりました。
昼　注腸造影食Ａ(全粥二百二十ｇ・ふりかけ二ｇ・お澄まし汁お麩

午後和漢診療科外来で診察を受けました。肝臓機能は血液検査で影響ないことがわかりました。診察は前回と同じ方法にて調べてくれました。体温(耳)は三十六・六℃と下がりまして、下肢切断先端部も三十二・一℃と上がり、冷えのぼせも解消に向かっています。

夕　注腸造影食Ｂ(葛湯・何も入ってないスープ・オレンジジュース)夜二十時になるとラキソベロン(下剤)を十五滴水に溶かして飲みます。午後和漢診療科外来で診察を受けました。

当日二十九日は朝　昼　夕食共に絶食です。六時に検尿をして、七時にラキソベロン十五ccを飲みます。そしてニフレックス(腸洗浄剤)二リットルを三時間かけて飲みます。十一時まで水用便が止(とどめ)なく出ます。

午後一番でＥＭＲ・ポリペクトミー治療に呼ばれました。僕の場合直腸の中心部に出来たポリープをポリペクトリー治療にて行い切除する方法をします。

まずポリープの下部に水を注入して浮かばせ、内視鏡に接続された輪っかに引っかけ電流を流して焼き切ります。

僕は何の躊躇(ためら)いもなく医師を信じて臨みました。電流のチリッと感じただけで終わりました。

有難く思っております。部屋のベッドに戻ると点滴が始まりました。

点滴は、鉄分を除いた栄養剤 ヴィーンFとトランサミン五百cc+アドナ(止血剤)を注入していました。

夕方MRI撮影の検査がありました。頭部撮影に義眼を外し臨みましたが、義眼の受け皿が金属のためノイズが出て撮影不可能と医師や技師に説明したのですが、取り敢えず行うことにしました。やはり決行不可能でした。そこで他の日に頸部の撮影をすることになっていた事を告げて急遽(きゅうきょ)頸部撮影になりました。

また部屋に戻り点滴を続けました。その後三十日の朝までソリタT3号G注を続けました。

朝食は重湯(おもゆ)百八十gとスープとオレンジジュース 昼食は、五分粥二百八十g ムツの蒸し魚大根おろしかけとろろ汁 アセロラゼリーC70 ボーロ 夕食は、全粥二百九十g ムツの煮魚 チンゲンサイと玉葱の茹で野菜 煮物(隠元・大根・椎茸) メロン 薬は漢方を含め正常に戻りました。

十月二日は血糖を七回測定し、血糖値の推移を検査しました。

十月三日は腹部CT検査をしました。十月四日は皮膚科の医師が部屋にお出で下さり臀部の褥(じょく)創(そう)の状態を診て戴きました。傷は正常に近い状態になったと申しておりました。有り難うございました。

十月五日は和漢診療科の最終調節の受診がありました。

体温(耳)は三十六・八℃と高めでしたが、右下肢断胆先端部では三十二・二℃と冷えから解放に向かっているとのお言葉でした。大変に安心致しました。

十月六日は二日前より痛みが強くなった右肘のX線撮影をする事になりました。医師の見立てによると酷い石灰化は認められず冷えによる痛みであるとの診断でした。

十月九日に退院が決まり三十六日間の入院生活は終わります。振り返りますと、あれほど熱心に、病気を抱えた一人の人間として全体像を把握してチームを組んで診て戴いたことはかつて一回も有りませんでした。医師チームの鏡として尊敬申し上げます。

また担当看護師はじめ看護師の皆様も毎日リハビリを手伝って戴き筋力を落とさずに体力的にも気持ち的にも充実した入院生活が全うされました。

限を担ぎ今でも腕に付けたネームプレートも取らずに髭(ひげ)も剃らずに退院後の生活を送っております。退院後の血糖値や血圧も正常に保たれ健康人と同じレベルに保たれ元気に生活しております。

C大学医学部付属病院の医師始め看護師そしてすべてのスタッフに感謝の気持ちで一杯です。有り難う御座いました。

㊀右肘潰瘍手術

平成十七年(07年)一月も平穏に七草を迎え穏やかに過ごしていた八日突如として左肘に痛みを感じ視ると、潰瘍を起こしていました。

早速形成外科外来に電話をしました。

休日であることをすっかり忘れていました、多分自分でも沈着冷静さを無くしていて、頭の中が真っ白になって必死に電話をしていました。

応対して戴いた医師は、当直勤務でしたが、直ぐに来ても良いですよ診察しましょう とおっしゃって戴きました。とても嬉しくて有難いと感じました。するとやっと冷静さを取り戻し四日後の十二日に診察を受ける約束を取り交わしました。

一月十二日当日は、妻が会社を休むことが出来ないので、頑張って左手で電動車椅子を運転して一人で病院に行きました。

九時半に診察室に呼ばれ、主治医に診察を受けました。診ると同時に手術をして入院となってしまいました。

平成十五年に両肘潰瘍で左右も使えない しかも両足切断で『だるまさん』状態を経験していたことから比べれば左だけでも使えれば「オン」の字であった。

今回は、鼠経部(そけいぶ)(大腿上部と腹部の境目前面)から結合織を含めた皮膚組織を移植する方法の治療でした。局部麻酔なので医師と会話しながら、また痛みがあれば通知して局部麻酔を追加しながら治療しました。変形した出っ張った骨も削り取ることもしていました。

約三時間の手術でした。

一ヶ月の入院中 右手はずっとギブスを着けそれでも毎日消毒と軟膏を付け替え治療して戴きました。三週間目になった時左手が疲れ動かなくなり、食事を食べることが出来なくなり助手さんや看護師さんに助けてもらって何とか切り抜けることが出来ました

。形成外科の主治医や担当医師始め他の医師に感謝申しあげます。

病棟の看護師の方々助手さんの方々にも感謝致します。
一番に心の支えやもろもろの指示をして戴いた師長さんに感謝申し上げます。

㊂魂の故郷鹿児島

二〇〇七年五月七日がやってきました。
昨年同様鹿児島指宿に帰省しました。今回は、還暦(60歳)を皆さんでお祝いして戴きました。
指宿は、アロハシャツを市役所始め一般でもハワイムード一色になります。
ハワイと姉妹都市になっているからです。
NPO法人の樋高悦子(てたか)さんから還暦の祝いで、全体紅色でハイビスカス白抜きの花模様アロハシャツをプレゼントして戴きました。
アロハ宣言六月一日を先取りして着させて戴きました。
宿泊の白水館では、アロハシャツを着た僕と妻の記念写真をA4サイズにまとめ還暦祝いと書き入れパンチしてプレゼントしてくれました。感謝感激です。
二日目 朝早く車で迎えに来てくれました。何処に行くのか僕は、知林ケ島を見る所に案内して貰えるものと車の助手席に乗せて貰い出発するまで知らされていませんでした。僕を驚かせるや

んちゃ心と喜ばせる目的だったと感じました。
陶芸家焼山の上之薗さんは、僕が九州最南端の笠沙(かささ)岬に行ってみたいことを知っていたのでしょう。天気も上々とても嬉しいドライブになりました。アリガト
三日目のお昼は、昨年行った樋高様のご存じのハーブ園のレストランに行き、またまたお薦めメニューの『とまとのおじや』を食べました。ゴッツウマカョ
そして次に案内して戴いたお宅は、樋高さんの知り合いのガーディニング横田の異名を持つ横田宅でした。南には錦江湾を望む高台に位置した所で、東にjr枕崎線が走っています。
庭には、バラを中心に花が咲き乱れハーブも沢山あって名前を教えながら案内してもらいましたが、とても覚えきれません。
そうこうしていると樋高さんの知り合いの菊次さんが訪れました。
菊次さんは趣味で音楽を作詩作曲して歌うシンガーソングライターだったのです。樋高さんの「喜入コーヒー」の歌も作詩作曲して歌っているのです。
そこで花をバックにミニコンサートになった次第です。
横田さんのハープティーを飲みながら菊次さんのギターと歌を聴きとても安らぎに満ちた時間

を過ごさせて戴きました。次の日 鹿児島市に向かいました。

㊃左肘部管症候群

左肘は、右肘潰瘍手術で入院していた時以前から頸部から手の先まで痺れ痛みで麻痺的症状がありました。

本当は、頸部脊椎症が元で左右両側に痺れ痛みがあるのですが、特に左手には強く現れ麻痺状態になっていました。右肘潰瘍で入院し三週間目に動かなくなったのも使い過ぎの成で遭ったと思われます。

今回整形外科で診断して戴いた結果 頸部脊柱症もさることながら左肘部管狭窄によるところが問題なので手術を受けるようにと勧められました。

僕も考えていなかった結果でしたが、それで少しでも辛さが治まるのならと決心致しました。

六月初めに整形外科病棟に入院 手術をしました。

整形外科病棟は、初めての入院でもあり、全く「ウェルナー症候群」を理解していない看護師が多く、入院生活のケアが上手く行かずストレスが高まり、とても辛かったです。

入院手術のあと代内主治医の外来に面会を申し込みました。

訪問医療の医師が、「ウェルナー症候群」については、非常に高い確率で甲状腺癌になる確率があ

るため腫瘍マーカー(サイクログロブリン)を四月に血液検査して戴き基準値三十以下(ng/ml)のところ百七十三(ng/ml)と高値を認め、訪問医師自ら代内医師の主治医宛に診療情報提供書をお送りしていました。

外来で主治医にその事を告げると、見ていないと言われ、はてな?! と思っていると頸部のエコーをやって見ようと言い代内の枠は、一杯なので整形から耳鼻科に申し込みをして診て貰ってくれとのお言葉でした。その後何日かして耳鼻科に呼ばれエコーを撮りました。そして次の日 右(right)甲状腺に穿刺を施し六日後に結果がわかりました。左(Left)は穿刺検査をしていません。

結果は、(biopsy Group)バイオプシーグループ Ⅱ でした。良く判らないので問い正すと、良性だから関係ない と言われました。

左肘部菅狭窄症の手術は成功と医師のお言葉でしたが、僕にとっては、以前より痺れや痛み時には動かなくなり、悪くなったようにしか思えません。そして左手小指の裳面第一関節に触ると痛み痺れのある腫れものが現れました。左肘の今回の手術では皮膚移植は行いませんでした。

㊄左肘潰瘍手術

平成十九年十二月十二日午前中 風呂に入る用意でヘルパーさんがパジャマを脱がせてくれているとき、左肘に二ヶ所穴が開いているのを見付けて教えてくれました。そこから蟹の泡に似た

泡状のものが吹き出ていました。痛みは少しありましたが、湯船に左肘を浸けず入浴をしました。
十三日には、病院に連絡して十四日に診察してもらうことになりました。それまで左肘は動かせないくらい痛みました。　診察の結果様子を視ることになり、自宅で一日二回の消毒(イソジン)を指示され来年(〇七年)一月十七日に診察に来るようにと言われました。
一月三日の夜 左肘から出血があってとても痛むので、四日に電話して十一日の診察となりました。診察の結果十五日入院手術が決定致しました。
今回の左肘潰瘍の手術は、左肘部菅症候群手術から半年経ったばかりです。以前述べたように皮膚移植を行わないために皮膚の余裕がなくなり起こした結果だと感じました。
午前中に入院して午後に手術は、いつものパターンと同じです。しかし違っていたのは潰瘍部に皮膚移植ではなく、(有茎皮弁)「皮弁」法でした。僕も手術台に乗って横になってから初めて皮弁法で手術することをお聞きしました。
そのときまで皮弁と云う言葉すらお聞きしたことがなかったので良くわかりませんでした。
医師の説明によると、潰瘍部は奥に広く相当に大きく窪みになっていて単なる皮膚移植では間に合わないところまで侵蝕されていたそうです。
そしてその場所に血行をそのまま利用する方法が採られました。手術は五時間に及びました。

左肘関節部中心の局所麻酔で行いました。皮弁で使われる皮膚と結合組織は、上腕三頭筋から長さ十五センチ程捕って縫い合わせました。痛みが感じられるとそのつど医師に告げ局部麻酔を施しました。医師も五時間の長きに渡る手術でさぞかし疲れたでしょう かと言って横になって疲れをとれないのが医者の定めご苦労様です。僕も緊張しっぱなしで疲れました。
病棟のベッドに戻ると抗生剤(フルマリン)とパルクスの点滴が始まりました。
案の定 次ぎの日から下痢が始まり、三日間の十七日に抗生剤点滴のフルマリンを中止してホスミシン錠とビオフェルミンRの処方になりました。それでも下痢は止まらず一月末まで続きました。体温は三十六℃代が続き、時には七 ・五℃まで上がり苦しかったです。
血行が特に悪いことに病棟担当医は、酸素吸入を勧めました。僕は全身麻酔以来受けていないし活性酸素を誘発し、ストレス障害を起こす危険性のため挙止したのですが血行促進のためと押し切られやることになりました。
一月から四月までの収縮期血圧が百五十㎖台から百七十㎖後半が多くなり、脈巾は七十前後から百以上になることも、しばしばありました。
身体の具合が悪い時も多々ありましたが、自主リハビリ(腹筋・左右の股関節や右膝の曲げ伸ばし・看護師さんに左右の腕関節の曲げ伸ばし)を行っていました。

血糖降下のインスリンは一月十六日まで、朝十単位と夕八単位でしたが十八日より朝夕共に六単位一日総量十二単位に減りました。

二月三日から風邪気味となり四日には完全に風邪になったので、和漢診療科外来に診療をお願い致しました。同時に内科診療を受けました。

十五日より漢方は「桂枝越婢湯」を風邪薬として三日間服用し、治りました。

代謝内科ではインスリン注射は朝夕共に取りやめて内服グリミクロン錠に替え服用することになりました。血糖値は百前後の安定した値を維持しています。

三月一日　昼過ぎから　俄（にわか）に血圧が百九十七／九十に上昇　三十分後も同じ数値を示し頸部左喉の締め付けられる痛みと体温の上昇がありました。

早速当直医師の診察がありました。血圧は多少下がりましたが、体温は上がりぎみでした。三月十日まで何も診察がありませんでした。　三月九日より　再び喉の痛みが続き十日・十一日と血液検査を行い十二日にやっと耳鼻科で左右エコー検査を行いました。

（既に二千七年六月　右側のみ吸引細胞診でクラスⅡと病理診断　何故か左側やらず？）

その結果十三日にエコーガイド下に左側吸引細胞診施行　十九日夜結果が判りました。病理診断

は、クラスⅤで悪性髄様癌と言われ手術しないと死ぬとまでいわれました。

さすがの僕もショックが大きく放心状態の滞となり、ストレスからの胃炎と喉や口まで昇るゲップの逆流を起こし嘔吐もありました。

退院することも頭を過ぎりましたが、それは叶いません、そこで気分一新のためを想い、一泊二日で自宅に帰りたい気持ちになりました。

二十二日(土)　二十三日(日)と一泊二日で電車とバスを乗り継ぎ帰り、七十日ぶりの自宅です。嬉しかったです。

運よく仲人さんから連絡があったそうで、お寺のお参りに行けないので代参をお願いしたいとのことでした。僕は代参に行けるのでかえって嬉しかったです。

自宅に帰ったその日は何事もなく過ごしました。しかし次の日病院に帰る日身体の不調で食事の逆流が起こり嘔吐を数回繰り返しました。

病院へは電車を乗り継ぎ三時間掛けてようやく戻りましたが身体に影響と気分の動揺があったようで、へとへとになり、ベッドに倒れ込むかのように横になって暫く動けませんでした。

二十五日　心電図検査　その後左眼球に痛みが出たので、次の日眼科で診察をうけましたが何も悪い変化は無いとのことでした。左肘の再手術は温存療法に変更

下痢と痛みとゲップの逆流が続き二十七日の夕血糖検査で六十四と低血糖症状を起こしました。気にしないと思っていても身体は「癌」を気にしているようです。

三十一日 心臓超音波検査 頸部造影 CTスキャン検査がありました。しかし検査に行くと直ぐに検査室に入り横になるように言われました。

はてな？ 僕は両足が無いのと左肘つまりは左腕が使えないのに一人でベッドに移動出来ないことを指示表に書いてなかったのでしょうか それに造影による ct 検査なのにそのまま実行しようとしたのです。

僕は技師にハッキリと「造影」なのではないですかと問いかけました。すると指示表を確かめに行って判ったのか こちらに来て下さいと行ってサーフローを右手正中に刺しました。

そして二人で僕を持ち上げスキャンベッドに仰向けに寝かせました。いよいよ造影剤が注入されました。頸部から下腹部全体を撮影するとのことです。何か熱いものを胸から腹部にかけて感じました。約二十分程の短い時間でした。

四月二日 は肺活量検査 午後より耳鼻科教授の受診がありました。

甲状腺癌と肺癌の手術を強く勧められました。

この夜消灯過ぎてから眩暈と吐き気が起こりました。看護師をナースコールで呼びました。来

てくれた時にはすでに吐き、暫く続きましたので、吐け気止めの処方でプリンペランの静注を頼みました。

看護師は、錠剤なら処方されているからどうかと尋ねて来ましたが、僕は現在吐いている最中で口から飲んでもまた吐いたら無駄になるので静注でお願いしますと再度頼みました。

暫く気分の優れないまま待ちました。十時頃になって当直医師がプリンペランの静注をしてくれました。それから気分も落ち着きまして眠ったようです。

四月七日と八日の二日連日夕食時を挿み耳鼻科の医師と手術についてと再度左側の生検(穿刺より太い針)の話し会いが持たれました。

僕としては、心の余裕が持てないので二日目も保留して病室に戻って遅い夕食を食べ始めましたが、そこへ医師が追いかけるように来て同意書にサインを求めました。僕も本意でないけれど渋々サインをして同意することになりました。

三月一日に具合が悪いからと告げてから、優先順位があるにせよ一ヶ月以上の間ほっておかれた気がしてなりませんでした。そもそも平成十八年九月に甲状腺の状態を調べるためエコーを撮っていました。十一月CT胸部に転移癌が写っていたとのこと早期発見を見逃していた医療ミスと勘ぐられても仕方ありません。四月九日 十時の約束で妻と同席の上耳鼻科教授の説明があるとの

ことで、会社には午前中休みをもらい早めに来た妻と共に外来受付で待ちました。
十分二十分と経っても呼ばれません さすがの僕も苛立ち始め受付に聞いてもただ「お待ち下さい」と言われるだけでした。僕一人なら入院中なのでかまいませんが、妻は昼から仕事で仕事場に行くまで二時間半かかります。それを心配していました。やっと呼ばれたのが十時四十分だったのです。約束を守らない医師に大切な命を託す気がしませんでした。
案の定教授医師は、以前と同じ手術の重要性を説いたメモ書き用紙を寄こしました。僕は前回くれたメモ用紙は月日も医師の名前も書いてありません、今度もそうであれば誰が書きそれは何時かも判りません。今回は月日と名前を書いてもらいました。すると教授が頸部のエコーを撮りました。「左右甲状腺癌とリンパ腺全摘に加え左肺癌と左肺全摘手術をしないと治す見込みがない」と言われました。僕は手術の希望を持っていませんでしたので、医師の話も「馬に念仏」のように聞いていました。他の治療法を示してくれません。西洋医学の不臨機応変さと西洋医学の限界を改めて感じました。
四月十一日 呼吸器外科で気管支鏡による肺癌細胞の生検検査が午後からありました。(先日造影CTスキャンで左下葉S6・S7に投影) 朝昼食は食べられません。 血糖を下げるグリミクロンとアクトス以外の薬は朝六時に内服しました。

午後手術室に呼ばれました。カーテン越しに大勢の患者の気配を感じました。
僕には病棟から二人の看護師さんが付いて来ていました。しかし手術室の看護師には事前通告やら申し送りが成されていないのか、僕に対する対応にあたふたしている慌てた様子でした。
全身麻酔でやることも知らなかったので僕から喋りました。
カーテンの内側に入りましたが、病棟から乗って来たストレッチャーに乗ったまま術前の筋注(アタP)や調書を取りました。それは普通のことなのですが、二十分程して手術室に呼ばれました。手術ベッドに乗せることが出来ずに、ストレッチャーで手術となりました。
僕は眠ったままなので後のことは覚えていません。気が付くと喉の痛みで喋ることが出来ませんでした。結果左肺野下葉s6に原発甲状腺癌の転移癌と判明しました。
四月十四日 耳鼻咽喉外科による更なる確定診断を得るため左甲状腺癌の組織診を行いました。(七日と八日に連日拒んだ細胞診 何故拒んだかと云うとかえって癌を散りばめる可能性のリスクがあることが判りました)
さて検査前日消灯時より検査終了後の医師の指示があるまで食事飲水は禁止となりました。
当日朝六時にグリミクロンとアクトス以外の薬を内服いたしました。
昼過ぎ検査のためストレッチャーに乗り外来に妻が付き添って参りました。

僕は仰向けで連れて行かれましたが、天井が眼の廻る早さで過ぎるのを三十回ととなく経験しその時々の恐怖が走馬燈のように現れ恐ろしさのあまり、受けるのを拒んで妻を困らせました。妻は僕に検査を受けるよう賢明に説得していました。最終的には、受ける覚悟を決め受けました。

僕は二十日退院を希望し告げましたので、病棟も医師も準備を始めました。

僕自身も退院のその日までの体調や自立のための風呂浴を、火・木の二日入れてもらうことにしてもらいました。入浴用ストレッチャーによる入浴でした。

四月なので、新人看護師の教育のため大勢の人々に触られ左肘もあかすりで普通に洗われてしまいました。言うのを忘れたと思った時にはすでに遅かったのです。

木曜(十八日)の風呂の前後は外来に呼ばれ肘がどうにかなったとか具合がどうかなど気にする暇がなく過ぎていきました。金曜日には、また外来に呼ばれたり退院処方のことで師長や看護師が出たり入ったりそれはとても忙しく一日が過ぎました。

そして夕飯前後には、入院中に係わった医師やらケースワーカーの方々で数えたら十三名の方々が、僕の癌の発症を慰めの言葉と共に逢いに来て下さり涙涙の別れの挨拶となってしまいました。このようなことで医療スタッフの方々には、親身にご心配戴きこの場を借りて御礼申しあげます。

ありがとうございました。

食事の対応

○ 一日 千四百キロカロリー
○ 塩分 一日 五グラム
○ 朝パン食 御飯と同様のおかずの提供
○ 揚げ物を除き他の料理に替える
○ 乳 製品を他のものに替える
○ マヨネーズを使用した料理は他の料理に替える
○ 卵、卵量を他のものに替える
○ 鶏肉、エビ料理を他のものに替える
○ 納豆を他のものに替える
○ 魚骨抜き、果物皮むき

第十章　生きている喜び

㊀三度目の鹿児島帰省

さて退院後の僕は、すっきりとした気持ちや身体で何事もなく平凡な日々を過ごしていた訳ではありませんでした。

手術後の左肘は周りがブヨブヨとして痛みを伴い傷が治っていませんでした。

そのような日々を過ごしながら五月七日に魂の故郷、鹿児島指宿への帰郷に出立する日も刻々と迫っておりました。

今回は、鹿児島のＮＰＯの方々が、僕をどのようにして砂州を渡り知林ケ島からの帰りをどのようにしたら善いか頭をひねって拈っていたそうです。

近日になって「工房てたか」のブログを見ていたら、僕の渡島をブログに乗せていたのでそのイメージがほんのりと判った気がしました。

わくわくとして勇気百倍・嬉しさ千倍でぇ～す。

砂州に渡る様子をＴＶに撮影したいと取材許可を求めてＫＴＳ指宿局から自宅に電話がありました。

取材の方法とカメラアングルについておおよその打ち合わせをしました。

○六年八月に取材を受けて以来のことで同じＴＶ局なのでびっくりしました。

五月七日　鹿児島空港に降り立ち迎えの樋高さんや菊次さんの出迎えの Ray を首に架けて戴くところから撮影が始まりました。

「お帰りない」「ただいま」の挨拶をしてゲートを出ました。

打ち合わせ通り、指宿に向かう車の中で助手席に座っている僕にカメラを向けて質問を始めました。

台本は一切ありません、何を質問されるのか判りません。そこで適切な言葉を探し「答え」ました。

緊張によるプレッシャーは限界を遙かに超えていました。

そして昼食は、昨年鹿児島空港に帰るとき立ち寄った巨大マーケットで炭火焼きの魚定食を食べてとても美味しかったことを想い出し行くことしました。

ところが見付かりません、中心にテーブルとイスの並んだセルフサービスの食堂に変革していました。でもそこでは刺身定食を食べました。

妻も樋高さん菊次さんもＫＴＳ局の人々もそれぞれ好きなものを食べておりました。

そして宿泊する白水館に取り敢えずチェックインのため向かいました。
明日いよいよ砂州を渡り知林ケ島に行きます。ＫＴＳ局との打ち合わせもしていたようです。
その後十五時半になりましたが、横田宅に伺い菊次さんのライブを聞くため出掛けました。
横田宅に到着すると一足早くライブの用意をしていた菊次さん、咲き乱れる花々を説明して案内してくださる横田さん本当に家族が戻ったように歓迎して下さりましたそれだけで感激です。
僕は本当に知らなかったのでびっくりしたのです、皆さんで六十一歳の誕生日パーティをするためケーキを用意してくれました。
六十一本の蝋燭はとても無理なので、６と１の二本の蝋燭の頭に火を灯して吹き消すような意気な計らいをしてもらい、生まれて初めての体験をさせて戴き「感謝感激雨霰（かんしゃかんげきあめあられ）」でした。
八日は、キャンプ場に十三時集合出発でしたが、指宿駅近くの居酒屋兼昼食処で昼食を食べるように十時半に樋高さんが白水館に迎えに来てくれました。
その時昨日のＫＴＳ局と違うＫＹＴ局が昼食の様子を取材し、砂州を渡り知林ケ島に行く様子も取材したいとのことで、同行致しました。昼食は「青葉」で指宿市特産品のオクラとソラマメを女将さんが特別に繕い食卓に出してくれました。

カメラがまわって質問に答えました。何となく自分の趣味の領域を自分が受けているのが気になって不思議な気持ちです。
そしていよいよ出発の地にやってきました。
「ＮＰＯ法人 縄文の森をつくろう会」の方々が僕を乗せる輿（こし）を用意して待っていてくれました。
「宜しくお願います」と挨拶をして輿に乗せてくれました。
六人掛かりで力を分散して担ぐのです。渡し木の真ん中に椅子を括り付け、僕が座ります。シートベルトも付けて細心の注意をはらってくれました。
渡し木には柔らかい強い紐を付けて、それを肩に架けて六人が担ぎますが、疲れたら違う人か担ぐのです。約一キロ（砂州は八百メートル）を四十分架けて渡りました。
周りにはビデオカメラマンやスチールカメラマンそして音声のマイクなど大勢のスタッフがおりました。
知林ケ島に到着すると、ＮＰＯ法人の皆さんと万歳三唱をして、記念撮影もしました。
知林ケ島で願いごとをするとかならず聞き入れてくれる信心があり、僕も手を合わせ願いごとをしました。鹿児島市から駆けつけた栗畑さんや皆さんもそれぞれ願っていたようです。

すると、知林ケ島を脊に向け輿に座ったまま僕が西向きになるようにＴＶスタッフが申し入れて来ました。
僕の三メートル先には弧を描くようにカメラの放列に加えマイクとキャスターが大勢いました。ＮＨＫ鹿児島を含めＴＶ三局と新聞二局でした。
打ち合わせの無いまま二人のキャスターに質問されました。僕も勝ち気の反面気の弱いところがあります。胸がドキドキしながら答えましたが当然覚えていません。
そして帰りは、僕も初めての経験でした二人乗りのカヌーに乗船して風に煽(あお)られ少し揺れましたが、千二百メートルの海をスイスイと戻りました。
この日は、宿に早く戻り前日入れなかった砂風呂と露天風呂に入れてもらいました。
しかし上がると気持ちが悪くなり、嘔吐してしまいました。
疲れていたにもかかわらず、長湯で湯当たりをしたせいなのでしょう。庭で涼んでいたのですが、夕食のご馳走を食べることが出来ませんでした。
しかし夜中でもお腹が空いたら食べられるように妻がたのんでおにぎりを作っていてくれました。案の定お腹が空いたので夜遅くなってから食べることが出来ました。

九日は、天気が良ければ佐多岬に行って開聞岳(薩摩富士)の写真を撮影したかったのですが、晴れ男初めての雨になって神話が崩れてしまいました。でも考えると、疲れた身体を休めなさい と云う計らいかもしれません。
そこで陶芸の「焼山」さんの工房に出掛け陶芸教室になった次第です。
その後昼食は、午後二時頃になってしまいましたが、昨日知林ケ島からの帰り路で鮪を捕ってくれたものを煮てオカズに、野菜の煮物や鹿児島料理と合鴨米のおにぎりでとても美味しかったです。
夕方は、昨日の長風呂で具合が悪くなったのを受けて風呂には入らず夕食に向かいました。
昼が遅かったのであまり沢山食べませんでしたが、ゆっくりと夕食を楽しみました。
十日は朝から雨になりました。
晴れ男の顔が丸つぶれジンクスもこれまでと思いました。
今日は鹿児島市に向かいます。
途中で、樋高さんの計らいで善行寺の住職の奥様率いる「喜入寺子屋合唱団」の母子で大勢の人々に「いらっしゃい遠藤さん」の横断幕を掲げ歓待してくれました。
爽やかな歌声に酔いしれたひとときでした。子供達もみんなみんな元喜な様子でとても嬉しく

て「嬉涙」が溢れました。「来年元喜(元気)で会いましょう」が合い言葉で惜しみながら別れました。子供達はちぎれんばかりに手を振って別れました。

ちょうど昼食の時間になりました。

介護老人施設の「サンシャイン喜入」に立ち寄りました。此処へは三度目の来院です。すっかり慣れて気ままに過ごせます。

昼食は赤字覚悟の五百円なのに、蛋白質・炭水化物・野菜のミネラル・汁もの・デザートのビタミンと栄養満点のフルコースでお年よりから若い人にも抜群の味付けです。しかも送迎無料で周りのお年寄りには願ってもない施設です。

僕も食べているときに新田(しんでん)所長がお出でになり、お金はいらない とご馳走して戴き気の毒をおかけいたしました。

そして所長さんのお話を伺い感銘致しました。そして僕のことを「強くて逞(たくま)しく生きている」とお褒めのお言葉を戴き、また涙が溢れとても嬉しかったです。

本当に本当に素晴らしい人にお会いすることができました。

鹿児島市内には三泊しました。海釣り公園で釣りをやりたいと樋高さんに話してみたら、焼山窯の上之薗さんが急遽魚釣りを教えに来てくれました。

どうにも初めてなので十センチ程の魚（稚魚かな?）ばかり釣れるので海に帰してあげました。とてもとても楽しい一日でした。

次の日は、鹿児島最大のモール街に行って昼食を食べました。

桜島の雄大な景色の前と篤姫館の中での撮影と共にＫＹＴ局のキャスターにインタビューを受けながら見学しました。

いよいよ鹿児島県滞在最終日になってしまいました。

飛行場に行く途中なので挨拶のつもりで立ち寄った栗畑さんのお宅では早めの昼食を用意してお待ちしていてくれました。

通された部屋の中は、僕の大好きな骨董品が並び特に目についたのが、昔から気にしていた「階段箪笥」でした。

そして食事はテーブルに備え付けの囲炉裏で焼きながら新鮮な魚貝類を食べたことです。

そして樋高さん 坂元さん栗畑さんが飛行場まで送って下さいました。

ありがとうございました。

㈡日常の生活

平日は凡そ六時半頃起きます。身体の具合が悪いときは、寝たまま朝食も食べずにいることがあります。また、午前七時頃妻が会社に行く時間に起きだすこともあります。

逆に午前五時前後に妻を起こしお小水で起きてそのままベッドからテーブルの定位置に行くこともあります。

ベッドに寝ており起き上がるときは、電動のリクライニングの助けを借りています。時々力が抜けた様になって、両腕と親指と人差し指に痛みがあり動きが悪く力が入りません。箸(はし)が上手く使えません。

また身体の移動(トランスファー)する時 掌(てのひら) で出来ないので 拳(こぶし) を使用します。

更に、身体が急にバランスを失うことがあって、ベッド上で横になったまま動けなくなります。ベッドや車椅子から落ちて動け無くなることがありました。

現在は、ベッドで目が覚めると妻が二百ccのお茶を飲みやすさまして持ってきてくれます。僕は、ゆっくりと飲み干します。そして妻が肩から背中 腰まで血行を促すように叩いてくれます。

朝ベッドから車椅子に乗り移ると、定位置のテーブルで、血糖値 血圧 脈拍 体温 血糖値を測りノートに書きます。サプリメントはビーポーレンとビタミンCを常時呑みます。

漢方薬は『桂枝茯苓加紅花加川弓(けいしふくりょうかこうかかせんきゅう)』を朝 昼 夕の一日三回 百ccずつ飲んでおります。

ヘルパーさんには、平日の月水金曜日は入浴介助と昼食のため十一時から二時間と火木曜日は十一時より昼食に二時間来て貰っております。

昼食は麺類を中心としてヘルパーさんによってあるいは食材によって献立を替えております。昼食が済むと、定期の西洋医薬とサプリメントと漢方を飲みます。その間トイレは？二十～三十分かけてお小水か大便をします。

お小水にしても出があまり良くないので気張るため便も何時も出てしまいます。

下痢の時はとても困ります。下痢止め薬を呑んでも半日はトイレに入り浸り、また下着の脱ぎ着に身体が疲れて何もすることが出来ない日々が続くことがあります。

以前その様なとき、食事を一～二回絶食することで正常に戻っていました。しかし現在は全く違うのです。低血糖の恐れがあります。しかも一日分 五大栄養素を総て摂取しなくては身体を維持し、病の進行を和らげることは出来ません。

【食事】は 生きる 健康 元気 の 源(みなもと) と信じています。さて僕は、下痢になった時の食事としては、全粥(ぜんがゆ)が最善かと思います。

米大匙四杯に対し 水(十倍)大匙四十杯の水で炊きます。もちろんお米は研いだものです。最初強火で沸騰させその後弱火でゆっくりと水分が半分になるまで炊きあげます。途中で梅干しを1/3個を包丁で叩きペースト状にして入れても善いでしょう。また、だし百五十ccを入れほんの少し炊きます。 帆立の薫製を入れても善いでしょう。

少し具合が良くなれば、おじやにして消化の良い野菜のみじん切りやグルテンバーガーなど入れて栄養も補給しましょう。僕なりの方法でやっています。ホカロンで下腹部を温めると早く良くなるのは経験しております。

さて、昼食後の薬とサプリメントを飲みます。午後は身体の調子によって行うことが違います。調子の良いときにはパソコンに向かって、ワードに文章を書いたり、インターネットホームページやブログを見ています。時には麻雀(マージャン)などのゲームを楽しんでおります。それでも疲れ飽(あ)きた時は、ベッドに移り身体を動かして運動をしています。そして寝てしまいます。

身体の具合が悪くなる時はどうも冬や春秋の気温が低く陰気に包まれた時に表れます。僕の体温は普段三十五度台で、元気なのです。

三十四度台や三十三度台に下降する時には、声が出なくなり(お喋(しゃべ)りが出来ない状態)身体も動かなくなります。それに加え気が滅入り、具合の状態も更に悪化していたと推測しました。

そして夕方十七時にヘルパーさんが来てくれます。

夕食の仕度と調理をして貰います。湯たんぽも大きいゴムのを一個とパイロゲンの空き箱に四個(夏は三個)入れてもらっていましたが、現在は電気毛布を下腹部から足まで暖めています。

その後テレビニュースやドラマを見ます。パソコンに向かうこともあります。二十一時にはベッドに乗り寝る用意をしてトイレにいきます。睡眠薬を呑み音楽を聴きながら眠ります。

平日はほとんど替わらない生活をしています。天気が良くても日光を浴びられません。

土曜日と日曜日が晴れて天気が良くなり身体も元気な日が楽しみです。そんな日は、妻に抱(だ)っこして玄関の外に出して、電動車椅子に座らせてもらいます。

午前中太陽の陽を浴びながらパソコン教室に行きます。昼食はパソコン教室の先生方と一緒に大勢で食べるのでとても美味しいです。

トイレも使わせて戴き、玄関の外まで送り出して貰います。そこからは荻窪で買い物して、あるいは新宿で買い物をします。つまり新宿まで往かないと東高円寺にエレベーターで帰れません。また早く終わった時は新宿御苑で自然を満喫し、楽しんでいます。花の写真を撮ることが大好きです。

日曜日に身体の調子が良いときには、遠出して、皇居の東御苑や多摩動物園や浅草や横浜中華街に行くこともあります。

でも一番気にして大変なのが車椅子トイレの設置があるか無いかなのです。二番目は、バスでノンステップがあるか無いかです。

電車の駅にエレベーターがあるかないかです。三番目に食事(食べられるものが限られているので)の場所の入り口がたいらかスロープで入れるかどうかです。

総ての条件は、パソコンで見付けた所に直接電話で確かめて行動しています。

確認を怠ると自分が惨(みじ)めになります。それから何か助けて貰いたい時には、恥ずかしがらずに回りの人に声を掛けてみて下さい。きっと助けてくれます。僕は実行しています。

いま現在の身体の具合は、非常に悪い時のことを書きましたが、普段の具合は何もないように感じられます。僕も何もないようにふるまっております。

しかしながら苦しいことは沢山あります。

あえて文書に書いてみます。頭痛・頭重・後頭部分の凝りと痛み・緑内障・耳鳴り(左はせみの鳴き声・右は拍動)・耳下腺の痛み・咽頭(いんとう)部閉塞感・嚥解困難(えんげこんなん)以上の病は、鶏卵鶏肉乳製品を食べないことで最低限防いでおります。頸椎症からくる手足のしびれ　左腕はしびれと痛み強くなると腕全体が動かなくなり肘関節も潰瘍があり痛みます。右手は軽いしびれと肘関節の潰瘍と強い痛み。両足においては、常にしびれ感(幻肢痛)がありまして時々ギャーと思わず声が出るほど

激痛があります。
ギャーという激痛は連続して起こり、あるいは、三分から五分置きに一日中から二日程続くことがあります。
またとても恐れて医師にも告げていた、甲状腺癌と肺への転移癌が見付かりました。手術をしても五年 生存五十%と告知を受けています。
一時間 二十四時間 一週間 一ヶ月 一年 過ぎるのは長くもあり、すごく短く早い気もします。
僕は一時間が二時間の早さ 一年が二年の早さで年齢(細胞)が過ぎる病気 早老症です。自分の可知(かち)の誤(あやま)りで起こした病気ではないので医療人とても複雑な気持ちです。でも頑張るしかないのです。
一ヶ月に二回主治医が訪問医療に来ます。定期的に二〜三ヶ月に一回 代謝内科 和漢診療科・形成外科・耳鼻咽喉外科・眼科外来に診察に行きます。
一年を通じては、五月の連休明けに旅行を予定しています。なぜか?と言うと、宿泊が容易に取れる時と航空券のバースデイ割引が一致してほんの少し安く行けるからです。
勿論障害者割引よりも安いのでその方法を大いに活用しています。目的は、多様にあります。

妻への慰安(妻は疲れると申しておりますが)自然へのふれあい 美味しい空気 人との出会い 名物料理 写真撮影(海 山 花 人物 動物)など
旅行は、正直言って旅行中は張り切って元気一杯です。妻が言うには、自分より元気で嬉しいけど自分の方が疲れてしまう と申しておりました。冗談笑
やはり、僕の生きる喜びが・・・何時知れず他人に御迷惑をお掛けしていると思います。
兄姉では血の繋がりの性か迷惑がそのまま感情に出ると思います。
その点ボランティアやＮＰＯ法人や介護施設の方々は世話をするのが【生き甲斐であり、喜びである】と明言している方もおりました。感服致しました。

あとがき

二千四年五月ＴＶで『プロジェリア』のことが放映紹介された。わずか十二歳の少女が百歳に近い肉体であると告げられ映像が写しだされた。母親にしても当人にしても大変な勇気と決断だったと思います。またこの映像を、世の中にはこれほど脅威な病気もあるのだとしらしめたプロデューサー凄いと思いました。

『プロジェリア』は通常の人の八から十倍の早さで老化(皮膚が乾き・体重が増えない・毛が抜ける)が進む『早期早老症』で、八百万人に一人の割で出現する生まれつきの病気(遺伝子の難病)です。原因は、遺伝子の第一染色体(ラミン=全身細胞核を支える細胞核の内側に骨組みを作る蛋白質)の突然変異によって細胞核が破壊されるか変形する。あるいは核の分裂の時の異常と考えられている。『プロジェリア』は、非常な早さで進む動脈硬化の心臓病で亡くなります。

僕の病気『ウェルナー症候群』発症から四十年間の医療体験を綴(つづ)ってきました。これで総て終わった訳ではありません。当然、此の世に生きて存在する限り続くことは間違いありません。

僕は、人生を意味あるものに、人生に対して前向きに、背負った運命を最大限にいきる努力をしているつもりです。僕は、此の世の総ての物や事柄が大好きです。

植物(特に高山植物)や動物(自然にとけ込み生活する動物など、身近では牛や馬・犬や猫・兎や鶏・小鳥)に好奇心で接したいと思っています。自然(山 海 川)への観察はまだ行けますが、登山や水泳などの運動はとても無理で出来なくなりました。

音楽や骨董 食べ物や調理に興味を持って探求しています。五十歳になるまで足が悪くなり、車椅子になるまで冬山に登山していました。自由な発想で実現を信じて夢に向かって前進あるのみだと感じております。

常に僕は自分を愛し自由(勿論他人の自由を認め)を求め他人に迷惑を掛けない、そして人を助けることに心がけて生活してきました。足が悪くなっても自分で治療を施し、友人に治療してもらい直していました。それでも歩けなくなると医療機関にお世話になるしか方法が見付かりませんでした。僕は僕が患者にやってきた処置で充分に治癒するものと「非常な誤解」をしていました。

病院や医師はマネージメントを追求するあまり「患者」を蔑ろにしている感を覚えます。問題なのは、誰にも夢があるはずです。夢を叶えると言う希望を捨てない意志と勇気を持って邁進して下さい。

僕は四十年の長期に渡る病気との闘い、後半の十二年は、鍼灸院を閉院して入退院を繰り返し

激痛の苦しみや十五回の手術の中で十回以上の全身麻酔手術に耐えてきました。

そしてついには、一番恐れていた甲状腺癌も早期に発見されず、肺に転移癌が発見されて初めて、手術しないと死ぬよと宣告されました。また多くの色々な病院での入院中の担当医や病棟看護師の態度そして食事(治療食でない)の愚かさによるストレッサーに晒されると、さすがの僕でも耐えられず、ストレスになりました。当然警告反応である胃十二指腸潰瘍の前進とされる、糜爛(びらん)性出血を起こし嘔吐と下痢と眩暈そして血圧上昇 血糖値上昇 低血糖 低体温などを引き起こしていました。どうにか自分自身で立ち直り現在を迎えていますが、そのまま寝たきりの状態になってしまう患者もいると思います。 その点僕は幸せ者だと感じて感謝しております。

せめても僕の体験が、本書をお読みになられた方々に幾らかでも指針になることを願って筆を認めました。

この著書を認めるにあたり杉本正信先生と光子先生には多大なるご指導を戴きました『推薦文』も書いて戴き有り難う御座いました。本書の末筆で御座いますが感謝の言葉に換えさせて戴きます。

平成二十年五月吉日

遠藤 博之